

夕垣古墳群・夕垣遺跡  
発掘調査報告書

—昭和58年3月—

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本書は養父郡八鹿町下網場字夕垣に位置する、夕垣3・7・8・9号及び夕垣遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、主要地方道宮津・八鹿線改良工事に伴って実施したものであり、兵庫県八鹿土木事務所の委託をうけ、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は吉識雅仁が主となり、一部を小川良太・森内秀造・深井明比吉が分担し、昭和56年8月27日から12月29日までの間に実施した。
4. 遺構の実測は加藤直子・長尾まゆ子の補助のもとで調査員が実施した。
5. 遺物の実測は主として吉識が行ない、一部を大平茂・平田博幸・山下史朗・町口弘子の手を煩わした。
6. 写真は遺構を調査員が撮映し、遺物については森昭氏の手を煩わした。
7. 本書の執筆はⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴを吉識が、Ⅱを小川が担当した。
8. 本書の編集及び浄写は吉識が主となり、魚住分館駐在の職員及び作業員が実施した。
9. 遺物類の番号については、本文・図版・挿図とも統一している。
10. 本書に使用した標高は八鹿土木事務所の工事用BMを使用した。
11. 今回の発掘調査及び整理報告作成にあたって、関係各方面からの多大な協力により実施した。記して深意を表するものである。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 歴史的環境	1
3. 夕桓古墳群の概要	4
II. 第3支群の調査	7
1. 3号墳の調査	7
(1) 立地	7
(2) 墳丘	8
(3) 埋葬施設	8
(4) 遺物の出土状況	9
(5) 遺物	9
(6) むすび	10
III. 第4支群の調査	11
1. 第4支群の概要	11
2. 7号墳の調査	11
(1) 位置と調査前の状況	11
(2) 馬蹄形の溝	12
(3) 墳丘	13
(4) 埋葬施設	14
(5) 遺物の出土状況	17
(6) 遺物	17
a. 石室内出土遺物	17
b. 溝内出土遺物	19
c. 墳丘周辺採集遺物	21
(7) 小結	21
3. 8号墳の調査	22
(1) 位置と調査前の状況	22
(2) 馬蹄形の溝	23
(3) 墳丘と列石	23
(4) 埋葬施設	25
(5) 遺物の出土状況	26
(6) 遺物	27
a. 石室内出土遺物	27

b. 溝内出土遺物	30
c. 盗掘坑内出土遺物	32
(7) 小 結	33
4. 9号墳の調査	33
(1) 位置と調査前の状況	33
(2) 馬蹄形の溝	34
(3) 墳丘と列石	34
(4) 埋葬施設	37
(5) 遺物の出土状況	37
(6) 遺 物	39
a. 石室内出土遺物	39
b. 溝内出土遺物	41
c. 墳丘上出土遺物	43
(7) 小 結	44
IV 夕 垣 遺 跡	45
1. 位 置	45
2. 土層の堆積状況	45
3. 遺 構	45
V ま と め	47
1. 7号墳の埋葬施設について	47
2. 群集墳の構成について	48
3. ま と め	49
出土遺物観察表及計測表	52
3号墳出土遺物	52
7号墳出土遺物	52
8号墳出土遺物	54
9号墳出土遺物	58

## 挿 図 目 次

第 1 図	夕垣古墳群付近遺跡分布図……………	3
第 2 図	夕垣古墳群分布図……………	5
第 3 図	3号墳 墳丘測量図……………	7
第 4 図	3号墳 濠部断面図……………	8
第 5 図	3号墳 出土遺物実測図……………	9
第 6 図	7・8・9号墳 墳丘測量図(調査前)……………	12
第 7 図	7・8・9号墳 墳丘測量図(調査後)……………	13
第 8 図	7号墳 墳丘断面図……………	14
第 9 図	7号墳 石室実測図……………	15・16
第 10 図	7号墳 石室内出土遺物実測図……………	17
第 11 図	7号墳 石室内出土遺物実測図(鉄製品)……………	18
第 12 図	7号墳 溝内出土遺物実測図……………	19
第 13 図	7号墳 溝内出土遺物実測図……………	19
第 14 図	7号墳 墳丘周辺採集遺物実測図……………	20
第 15 図	7号墳 墳丘周辺採集遺物実測図……………	20
第 16 図	8号墳 墳丘断面図……………	22
第 17 図	8号墳 墳丘平面図……………	24
第 18 図	8号墳 石室実測図……………	25
第 19 図	8号墳 石室内出土遺物実測図(須恵器)……………	27
第 20 図	8号墳 石室内出土遺物実測図(鉄製品1)……………	28
第 21 図	8号墳 石室内出土遺物実測図(鉄製品2)……………	29
第 22 図	8号墳 石室内出土遺物実測図(鉄製品3)……………	30
第 23 図	8号墳 溝内出土遺物実測図……………	31
第 24 図	8号墳 盗掘壕内出土遺物実測図……………	33
第 25 図	9号墳 墳丘平面及び断面図……………	35・36
第 26 図	9号墳 石室実測図……………	38
第 27 図	9号墳 石室内出土遺物実測図……………	39
第 28 図	9号墳 石室内出土遺物実測図(鉄製品)……………	39
第 29 図	9号墳 石室内出土遺物実測図(玉類及び紡垂車)……………	40
第 30 図	9号墳 溝内出土遺物実測図……………	42
第 31 図	9号墳 墳丘上出土遺物実測図……………	43
第 32 図	夕垣遺跡 土層堆積状態実測図……………	45
第 33 図	夕垣遺跡 柱穴状遺構実測図……………	46

## 図 版 目 次

- 図版第 1 夕垣古墳群航空写真
- 図版第 2 夕垣古墳群 上) 遠景 (西方向より)  
下) 遠景 (南西方向より)
- 図版第 3 3号墳 上) 9号墳より見た3号墳全景  
下) 墳頂部石抜き取り跡
- 図版第 4 3号墳 出土遺物
- 図版第 5 7号墳 上) 調査前の状況  
下) 東側から見た全景
- 図版第 6 7号墳 上) 斜面下方側から見た全景  
下) 墳丘断面
- 図版第 7 7号墳 上) 東側から見た石室  
下) 西側から見た石室
- 図版第 8 7号墳 上) 石室床面遺物出土状態  
下) 南側壁構築状況
- 図版第 9 7号墳 上) 南側壁の断面  
下) 北側壁の断面
- 図版第10 7号墳 上) 石室内出土須恵器  
下) 石室内出土鉄製品
- 図版第11 7号墳 上) 溝内出土遺物  
下) 墳丘周辺採集遺物
- 図版第12 8号墳 上) 西側から見た全景  
下) 斜面上方側から見た全景
- 図版第13 8号墳 上) 横穴式石室全景  
下) 石室床面
- 図版第14 8号墳 上) 遺物出土状況 (奥壁側)  
下) 墳丘東側列石
- 図版第15 8号墳 上) 斜面下方側の墳丘断面  
下) 斜面上方側の墳丘断面
- 図版第16 8号墳 上) 石室内出土遺物 (須恵器 1~5)  
下) 盗掘壕内出土遺物 (3・5・6)
- 図版第17 8号墳 石室内出土鉄製品(1)
- 図版第18 8号墳 石室内出土鉄製品(2)
- 図版第19 8号墳 石室内出土鉄製品(3)

- |       |      |                                       |
|-------|------|---------------------------------------|
| 図版第20 | 8号墳  | 溝内出土遺物                                |
| 図版第21 | 9号墳  | 上) 調査前の状況<br>下) 斜面下方側から見た全景           |
| 図版第22 | 9号墳  | 上) 東側から見た全景<br>下) 西側から見た全景            |
| 図版第23 | 9号墳  | 上) 列石1と3の関係<br>下) 列石2と3の関係            |
| 図版第24 | 9号墳  | 上) 列石2と3の関係<br>下) 列石3除去後の墳丘           |
| 図版第25 | 9号墳  | 上) 羨道部側から見た石室<br>下) 奥壁側から見た石室床面       |
| 図版第26 | 9号墳  | 上) 石室内遺物出土状況(奥壁側)<br>下) 同(玄室内羨道寄り床面上) |
| 図版第27 | 9号墳  | 上) 斜面下方側墳丘断面<br>下) 断面                 |
| 図版第28 | 9号墳  | 上) 石室内出土遺物(須恵器)<br>下) 墳丘上出土遺物(須恵器)    |
| 図版第29 | 9号墳  | 上) 石室内出土遺物(玉類)<br>下) 同(紡垂車、刀子)        |
| 図版第30 | 9号墳  | 溝内出土遺物(須恵器)                           |
| 図版第31 | 夕垣遺跡 | 上) 土層断面(南より)<br>下) 山側から見た柱穴列          |

# 1. はじめに

## 1. 調査に至る経過

古墳群が所在する養父郡八鹿町は、中国山地に源を発し但馬最大の河川である円山川と、米の山山麓に源を発する八木川との合流点に開けた町である。古代の山陰道筋にあたり、現代も国道9号線と豊岡・城崎方面への国道312号線とが分岐し交通の要所である。

このため、夏の海水浴シーズン・冬のスキー・蟹の季節ともなれば、町内で交通がマヒ状態に陥る。そこで兵庫県八鹿土木事務所は早急に、これの緩和を計るため、円山川右岸沿いの道路改良工事を計画した。ここで埋蔵文化財の有無について照会を求められた兵庫県教育委員会は、円山川右岸沿いには多数の古墳が所在し、いまだ未発見の古墳が存在する可能性のあることから、昭和54・55年度に小川が担当して分布調査を実施した。しかし立木が繁茂して密林状態であり、十分な調査が実施できなかったこともあって、埋蔵文化財は確認できなかった。そのためあらためて立木伐採後に調査を行うこととなった。

そこで土木事務所は昭和57年夏の開通に向け、昭和55年度から工事に着手した。工事着手から間も無い昭和55年度に2件、埋蔵文化財発見の情報が、県教育委員会に届いた。このため係員が現地へ赴いたが、2件とも自然地形等であり、埋蔵文化財等ではないと判断され、工事は進められていた。

昭和56年8月23日に地元の考古学研究者であり、文化財パトロールをお願いしている、関宮中学校教諭の高松瀬輝氏から、道路建設地内で3基の古墳と古墳らしき高まりが発見されたという知らせを受けた。そこで同年8月25日に兵庫県教育委員会は大村敬通、吉識を現地に派遣し、古墳であることを確認した。このため現状保存の方法を土木事務所と協議・検討したが、道路予定地内を横断するように3基が存在することから、工法変更等は、不可能であり、発掘調査を実施して、記録保存することとなった。また3号墳も予定路線内に位置していることが判明し、現状保存の方向を八鹿土木事務所と探った。しかしこれも計画道路の法面にあたり、法面勾配の問題から設計変更は不可能であり、記録保存の他に方法はなく、今回合わせて調査を実施した。発掘調査は昭和56年8月27日より実施した。

## 2. 歴史的環境(第1図、図版第1)

中国山地に源を発し、北流して日本海に注ぐ円山川は、但馬地方最大の河川であり、上流域の和田山盆地、下流域の豊岡市周辺にややまとまった平野部を形成している。しかしこれらの地域に挟まれた中流域には、まとまった平野部はみられず、大屋川・八木川との合流点に、狭い平野部がみられる程度である。中流域の右岸は山麓が河岸まで迫り、山裾を洗うように円山川は北流している。

但馬における弥生時代の遺跡は、円山川流域には少なく、その支流域に多くが位置するといわれ、本古墳群が位置する八鹿町周辺でも同様の現象がみられる。弥生時代中期の円形周溝墓が検出された米里遺跡<sup>註1</sup>、弥生時代前期以降の土器が採集されている小山東家の上遺跡<sup>註2</sup>、弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が採集されている大明神遺跡等は、八木川流域に位置している。また最近の調査において、弥生時代中期前半の小山西家の上遺跡<sup>註3</sup>が、小山東家の上遺跡の西側の尾根上で確認されており、注目<sup>註4</sup>

される。

古墳としては、八木川地岸の尾根上に位置する上山古墳<sup>275</sup>が最も早く築造されたものであろう。上山古墳は全長約42.5mの前方後円墳であり、周辺の地域としては唯一のものである。また上山古墳周辺には、とが山古墳群が存在し、両者の築造は一連のものと考えられている<sup>276</sup>。

この他は大部分が小規模な円墳であり、分布は八木川北岸の尾根上、円山川右岸の尾根・山麓に集中している。特に朝来郡和田山町奥山・広六林古墳群から城崎郡日高町榑嶺古墳群に続く円山川右岸には、舞狂・光明山塊から派生した尾根・山麓を中心として、300基以上の古墳が築造されている<sup>277</sup>。中でも養父郡養父町の大藪群集墳は、但馬地方最大の横穴式石室をもつ禁裡塚古墳に代表される大規模な横穴式石室をもつ古墳が含まれ、4支群・約88基以上の古墳からなり、円山川右岸の群集墳では、突出した存在である。この他特異なものとしては、1墳丘に2基の横穴式石室をもつこおとしB-3号墳、はげさか2号墳の存在が知られている<sup>278</sup>。

これらの大部分の古墳は盗掘を受けており、現在遺物が若干知られているものがある。この中で世賀居群集墳に含まれる鏡塚古墳は六畿鏡を出土しており、特記されるものである。この他びんぐし4号墳では太刀、鐙、舞狂若宮6号墳では金環の出土が知られており、こおとし3号墳、夜垣古墳では6世紀後半から7世紀前半の須恵器が出土している<sup>279</sup>。また八木川北岸の群集墳の中で、小山西家の上古墳群の調査が実施中であり、現在までに6世紀前半から後半にかけての地山を削り出し墳丘とした古墳と、7世紀前半に築造された横穴式石室をもつ古墳が明らかになっている<sup>280</sup>。

このような円山川右岸・八木川北岸に対し円山川の左岸には八鹿町のサイレン山古墳群、下綱場古墳群、養父町の宮の谷古墳以外に、古墳は確認されていない。しかし宮の谷古墳は地山を削り出し、墳丘とした古墳であり<sup>281</sup>、付近の尾根上には同様の古墳が存在する可能性が高い。おそらく今後の調査では円山川中流域の左岸に、但馬地方に多くみられる溝で尾根と切り離し、地山整形による墳丘削り出しという古墳が多く発見される可能性が高い。

番号	遺跡名	古墳基数	番号	遺跡名	古墳基数	番号	遺跡名	古墳基数
1	米里遺跡		15	高尾中古墳群	18	29	夜垣古墳	
2	小山東家の上遺跡		16	赤ばな群集墳	3	30	無狂丸山古墳群	13
3	大男神遺跡		17	はげさか群集墳	4	31	無狂若宮群集墳	11
4	上山古墳		18	宮谷尾根群集墳	5	32	大藪群集墳	88
5	上山群集墳	3	19	茗ヶ谷小林群集墳	8	33	西の岡古墳	
6	中山群集墳	21	20	世賀居山王群集墳	6	34	禁裡塚古墳	
7	小山群集墳	8	21	鏡塚古墳		35	塚山古墳	
8	片山寺坂古墳群	15	22	世賀山群集墳	24	36	コウモリ塚古墳	
9	片山群集墳	3	23	三本松群集墳	6	37	沢原古墳群	5
10	桜谷群集墳	2	24	コガ山群集墳	4	38	沢原東群集墳	3
11	米里群集墳	11	25	こおとし群集墳	12	39	口米地群集墳	3
12	サイレン山古墳群	3	26	小坂群集墳	2	40	中米地群集墳	2
13	上綱場古墳群	5	27	びんぐし群集墳	4	41	鉄屋米地群集墳	3
14	なる群集墳	7	28	夕垣古墳群	14	42	宮の谷古墳	

表1 周辺の遺跡



第1図 附近の遺跡分布図

### 3. 夕垣古墳群の概要（第2図、図版第2一上・下）

円山川と八木川の合流点のやや下流に向って、舞狂山塊から張り出した3本の尾根とその斜面に築かれた、14基の古墳で構成された群集墳である。立地、まともりから5群に分けることができ、それぞれ何らかの有機的な繋りをもつものと思われる。

第1支群 本古墳群中最も北側の尾根上、標高約70～80m付近に築かれた5基の古墳（10～14号墳）で形成された支群である。

舞狂山から伸びてきた尾根が2本に分れる尾根の分岐点にあたり、尾根上は巾が広くなり、平坦となっている。そこに5基の古墳が築かれている。10・11号墳は尾根先端に横に並んで築かれた、径約8～9m、高さ約1mの低平な墳丘の円墳であり、山側に半円形の溝をもつ。おそらく埋葬施設は木棺直葬か箱式石棺と思われる。12～14号墳は、径約13～15m・高さ約2m～2.5m、山側に馬蹄形状の溝をめぐるせた横穴式石室の円墳である。10・11号墳の溝と墳丘裾部を接して12号墳が、12号墳の溝と墳丘裾部を接して13号墳が築かれ、13号墳から約20m離れて14号墳が築かれている。石室は開口していないためはっきりしないが、おそらく尾根と直交する形で設けられているものと思われる。

第2支群 第1支群が位置する付近で2本に分れた尾根の内、北西に伸びた尾根が平野部に接するあたりのやや上方、標高約55m～60mの間に築造された2基の古墳で形成される。尾根に沿って上方に2号墳、下方に1号墳が約5mの間隔で築かれている。ともに径約8m、高さ1m程度の円墳であり、埋葬施設に木棺あるいは箱式石棺を用いた古墳と思われる。尾根とは溝によってそれぞれ切り離している。

第3支群 第4支群とともに今回調査を実施しており、別項で詳述するが、尾根先端に位置する3号墳単独で構成された支群である。

第4支群 第3支群の位置する尾根南側の谷部に面した、北向きの斜面に築造された4基の古墳（6～9号墳）で構成された支群である。

第5支群 本古墳群の内、南端の尾根上、標高約80～90m付近に築かれた径約12m～13m、高さ約2mの円墳2基からなる支群である。両墳ともに尾根と直交する方向の横穴式石室を埋葬施設とし、尾根とは溝で切り離してい

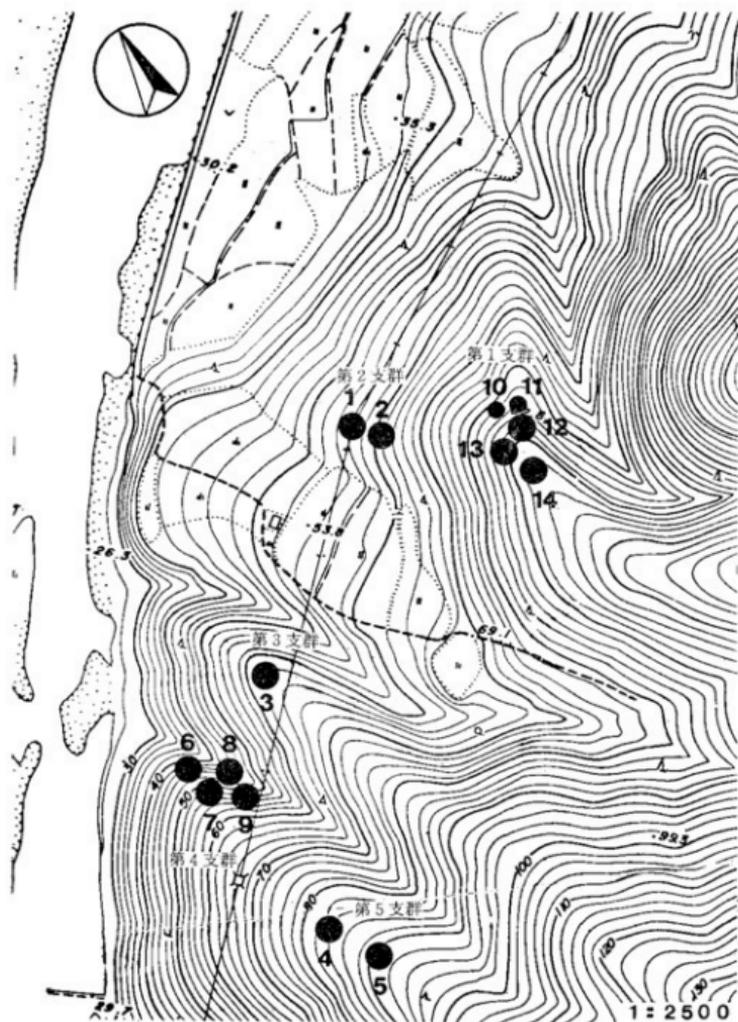
支群 番号	古墳 番号	立地	墳形	墳丘規模		埋葬施設
				墳径	高さ	
第1 支群	10	尾根上	円	9m	1.5m	木棺直葬?
	11	◇	◇	8m	0.8m	◇ ?
	12	◇	◇	15m	2.5m	横穴式石室
	13	◇	◇	13m	2.0m	◇
	14	◇	◇	15m	2.5m	◇
第2 支群	1	山麓	◇	8m	1.0m?	木棺直葬?
	2	◇	◇	8m	0.5m	◇ ?
第3 支群	3	尾根先端	◇			箱式石棺
第4 支群	6	斜面	◇	東西12m 南北9m	3m	横穴式石室?
	7	◇	◇	東西12m 南北11m	3m	横穴式石室
	8	◇	◇	東西13m 南北11.5m	3m	横穴式石室
	◇	◇	◇	東西9m 南北7m	3m	◇
第5 支群	4	尾根上	◇	13m	2m	横穴式石室
	5	◇	◇	12m	2m	◇

※古墳番号については旧番号を踏襲した。

表2 夕垣古墳群一覧表

る。裾部で約10mの間隔を開けて築造されている。

このように各支群とも小規模な古墳で構成され、ほぼ均一の規模であるが、埋葬施設については異なっている。第2・第3支群は木棺直葬あるいは箱式石棺を埋葬施設に用い、第4・第5支群は横穴式石室を、第1支群は両者が混在している。この埋葬施設の違いは一般的には築造時期の差を示すも



第2図 夕張古墳群分布図

のと考えられる。しかし今回の調査結果では、第3、第4支群とも相前後して築造が開始されており、第1～第4支群は、ほぼ同時期、6世紀前半から中半にかけて、築造が開始された可能性が高い。第5支群だけがやや遅れて、6世紀後半に築造が開始されたものと考えられる。

註1 松下勝、井守徳男「但馬・米里遺跡」1979

註2 註1に採集された土器が照会されている。

註3 註2に同じ

註4 現在調査が実施されており、調査をされている藤原幸弘氏に御教示願った。

註5 榎本誠一「兵庫県下における前方後円墳」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』2 1982

註6 但馬考古学研究会「但馬の主要な古墳」『よみがえる古代の但馬』1981

註7 兵庫県教育委員会「遺跡分布地図及び地名表」1974

註8 武庫川女子大学研究会「但馬・大敷古墳群」1978

註9 茨木信雄「一墳丘二石室の古墳をめぐって」『よみがえる古代の但馬』1981

註10 八鹿町教育委員会「八鹿町の文化財」1969

註11 現在八鹿町に保存・展示されており、実見させていただいた。

註12 註11に同じ

註13 註4に同じ

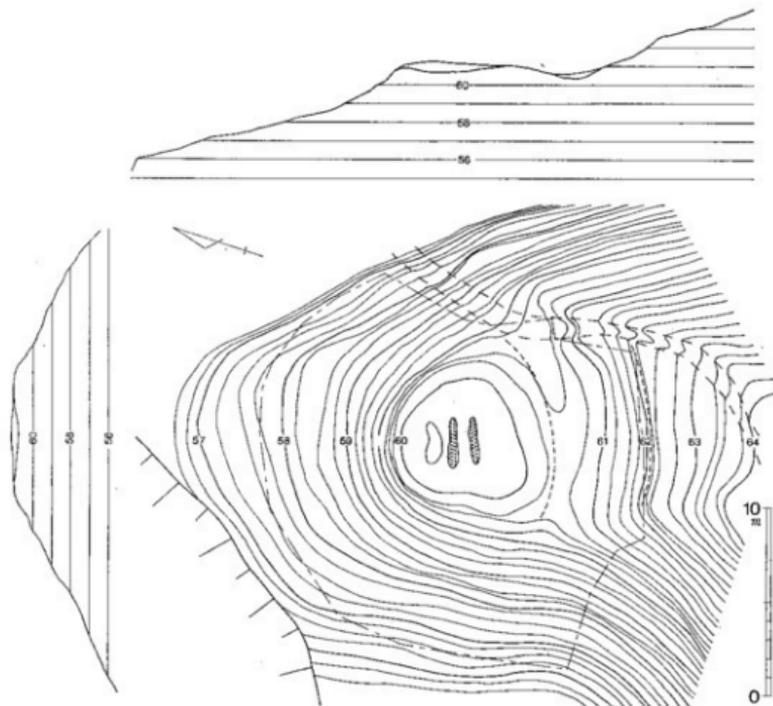
註14 関西電力による鉄塔工事に際して発見され、現状保存されている。政次義孝氏に御教示願った。

## Ⅱ 第3支群の調査

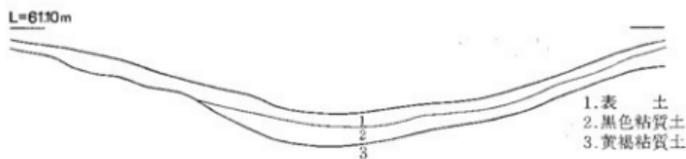
### 1. 3号墳の調査

#### (1) 立地(図版第3—上)

今回発掘調査を行った古墳群は円山川の右岸に位置し、川に向かって南東から北西に延びる櫛歯状の小支尾根上にある。古墳はこれら小支尾根の一つの先端部の標高60mの地点にあり、3号墳が位置する尾根は、尾根幅が狭く両側の傾斜も急峻な地形である。古墳は尾根が先端部で傾斜がやや緩やかになる傾斜変換地点に築造されている。古墳から尾根先端は円山川に向かって崖となっている。古墳より上方の稜線は緩傾斜地となって背後の山塊に続き、この尾根には他に古墳は一基も認められない。



第3図 墳丘測量図



第4図 壕部断面図

## (2) 墳丘 (第3図・第4図、図版第3一上)

古墳は南北径13.5m・東西径13mの円墳である。墳丘高は北側で2.1mを計る。調査前の墳頂部は過去に開墾により畑にされていたとので平坦になっており、中央部に浅く僅かに凹地がみられた。調査の結果墳丘は全く盛土がみられず、表層の厚さ約15cmの腐蝕土層下は赤黄色の地山層であった。この地山層には角礫が混っており、一部には岩脈がみられた。これらのことにより古墳は、盛土を行わずに地山を削り出すことによって墳丘の大部分を形成し、その上に埋葬施設の石棺を覆う程度の約1m内外の盛土を行っていたのではないかと推測された。墳丘上には葎石その他の外表施設は、何ら確認できなかった。墳丘南には丘陵上に築造された古墳によくみかけられる馬蹄形の濠がある。濠幅は中央部の最も大きいところで5.4mある。深さは現墳頂部から0.8mである。濠の底部は岩盤であり、現墳頂部とは余り高さ差のない浅いものである。地山面上には黒色の腐蝕土が約0.35m堆積していた。濠による尾根の切断面は、墳頂部より約2.2m上方の標高62.1mの地点まで認められこの切断面は現墳頂部と同レベルの地点で傾る。斜角度が僅かに変化している。

墳丘裾部には幅3.5mの平坦地が、北西から北東にかけて半周している。この平坦地においては遺構は全く認められなかった。北東部の墳丘傾斜部から平坦地にかけて黒色の腐蝕土層が厚く堆積しており、中より須恵器の破片が出土した。

## (3) 埋葬施設 (第3図、図版第3一下)

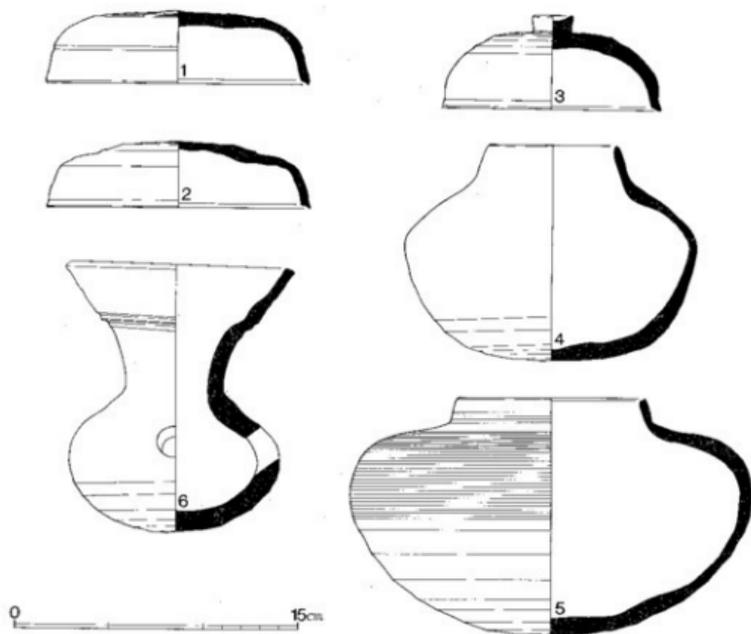
埋葬施設は組合せ式の石棺であることが推測された。石棺はすでに墳頂部の削平の際に破壊されていなかったが、石棺設置のための掘方が確認できた。この掘方は墳頂部の中央よりやや北側で、表土層下の黒灰色土層を除去した面で検出された。この黒灰色の腐蝕土層は厚さ約10cm堆積していた。掘方は黒灰色土層下の地山面に掘り込まれており、幅15cm～25cm・深さ約10cm・長さ205cmにわたって2本検出された。これはその形態から、組合せ式石棺の両側板の掘方と考えられる。両側板の掘方間の幅は東端部で90cm・西端部で120cmである。また木口部については、東・西端部とも掘方等の掘り込み痕は認められなかった。以上のことから長軸を縦線と直交させ、厚さ約10cm前後の石材を使用した内法長180cm～200cm・同じく幅65cm(東)・85cm(西)の頭部を西においた石棺が想定される。その他の埋葬施設については何ら痕跡も認められなかった。石棺の位置が墳頂平坦部の中央よりやや北に寄っているため、他に木棺等が存在していたことも考えられるが確認は得られなかった。

#### (4) 遺物の出土状況

副葬品は石棺掘方の上面の黒灰色土層中より、杯・甕・壺等の須恵器片が出土している。他に墳丘北東隅の平坦地上の堆積土からも須恵器片が出土しているが、両者の破片が接合できることから墳頂部削平の土をこの面にかき落したものと考えられる。他の鉄製品等の副葬品については検出できなかった。

#### (5) 遺物 (第5図、図版第4)

今回の調査での出土遺物は須恵器の短頸壺・甕等であり、図示した以外の出土遺物は須恵器の杯蓋・提瓶・壺等であり、いずれも細片であり復元も困難なものである。壺は5と同型態の短頸壺片である。



第5図 出土遺物実測図

る。2は5の肩部にある重ね焼痕と口径が一致するところから5の蓋であると考えられる。3についても4の蓋の可能性がある。

## (6) む す び

3号墳は組合せ式の石棺を主体部とする円墳である。築造時期は出土した須恵器によると6世紀前半から中頃と考えられ、7号墳とはほぼ同時期であり8・9号墳よりは若干先行すると考えられる。埋葬施設は石棺を有しているが、今回の調査を実施した古墳群内・近隣に分布する古墳群の大多数の埋葬施設は横穴式石室であり、石棺又は木棺を有すると推定される古墳も数基ある。古墳の立地面では、一尾根に独立して築造されており、他の横穴式石室を有する古墳のように群在していない。位置的にも今回調査した古墳群から北東側に広がる平野部に向かって、最先端の尾根上にある。

今回の調査を実施した古墳の中では、立地・埋葬施設とともに7号墳以下とは異っており3号墳は一基で一支群を形成しているものと考えられる。

### Ⅲ 第4支群の調査

#### 1. 第4支群の概要(第2図・第6図、図版第2一上・下)

6～9号墳とした4基の古墳で構成された支群であり、第3支群の位置する尾根と、第5支群の位置する尾根に挟まれた谷の口近く、北向きの斜面に位置している。尾根先端と谷口は円山川によって削り取られ、6・7号墳の西は川に向かって崖状に落ち込んでいる。谷に面した斜面は急な傾斜を示し、古墳群の位置する付近では約20°の傾斜となっている。また谷底には多くの転石がみられ、かなりの湧水がある。

第3支群の3号墳は谷を挟んで見上げる尾根の先端に位置し、標高差で約8m～15m、直線距離で約30mを測る。また背後の尾根の上方には第5支群が位置し、標高差で約30m～40mを測る。

4基の古墳は標高約45m～53mの間の東西約30m、南北約25mの範囲に近接して築造されていた。4基は千鳥に配置され、6号墳と墳丘裾部を接して上方に7号墳、7号墳の裾部と馬蹄形の溝の肩部を接して8号墳、8号墳の溝の肩部に裾部を置いて、9号墳が築造されていた。6・8号墳は標高約45m～49mの間に築かれており、裾部で約5m離れている。7・9号墳は標高約49m～53mの間に築かれ、裾部で約8mの間を開けている。

4基の内7～9号墳が今回の調査対象であり、6号墳は現状保存となった。現地形の観察では、6号墳は墳丘中央が浅く凹み、石材が認められることから、おそらく埋葬施設は斜面と並行した横穴式石室と思われる。しかし7～9号墳のように馬蹄形の溝は観察できず、7号墳の墳丘裾部から平坦な面となっている。墳丘規模は径約10mであり、東西にやや長い楕円形を呈する円墳であると思われる。

7～9号墳は今回調査を実施しており、後に詳述するが、その調査結果から考えて、第4支群は6・8号墳、7・9号墳の2グループで構成されるものと考えられる。

#### 2. 7号墳の調査

##### (1) 位置と調査前の状況(第6図、図版第5一上)

7号墳は標高約48.0m～51.0mに築かれた古墳であり、6号墳・8号墳の斜面上方に位置し、8号墳の溝肩部とは墳丘裾部で約2m離れて築かれている。東側には9号墳が約8m離れて位置している。

すでに工事用道路が墳丘上に設けられ、墳丘は削平されており、約1/2程度を残すだけのようみえた。しかし調査の結果、墳丘は北半だけが削平され、南半には盛土がされていることが判明した。そ

こで南半については、工事用道路が設けられる以前の状態がある程度復元できた。

おそらく墳丘は中央やや南寄りに、東に開くコの字形の掘り込みがあり、墳丘の山側裾部には浅い窪地が馬蹄形に繞っていたものと思われる。またこの窪地内は、9号墳の上方から続く道路になっていたと思われ、付近に集落が存在していた際、また付近に残る田畑が作付されていた際には、農道として利用されていたものと思われる。

## (2) 馬蹄形の溝 (第7図、図版第5—上)

石室はほぼ等高線に沿って、斜面に並行して築かれており、墳丘の築造にあたっては山側、つまり斜面の上方を削りとする造作を行なっている。このような造作は8・9号墳でもみられ、その方法を同一にしている。そこに地山を掘り込んで馬蹄形状をなす溝をめぐらしている。尾根に最も近い墳丘中央の南側は、深さ約20cmと浅く、断面は皿状を呈する。東側は幅約1.4m、深さ約50cmを測り、南側中央から西側にかけてやや広がっていた。また溝の東側北端付近の墳丘裾部には、長さ1.2mほどの大きな石がみられた。このような石は8号墳、9号墳にもみられ、墳丘の区画に何らかの関係をも



第6図 7・8・9号墳丘測量図 (調査前)

つものかもしれない。

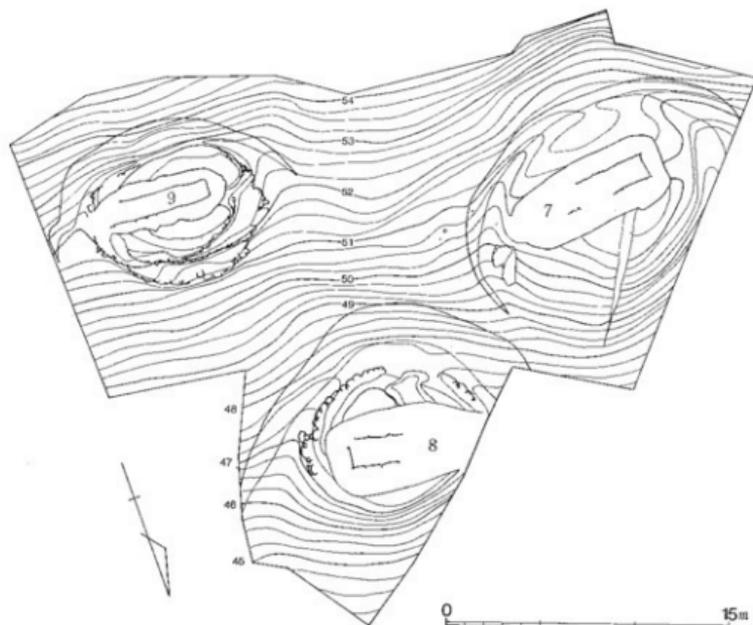
(3) 墳 丘 (第7図、第8図、図版第5一下、図版第6一上・下)

標高約47.3m～51.0mの斜面に築かれ、元米約21.5°の傾斜をもっていた斜面を削り出し、埋葬施設を設ける区画だけに、やや平坦な面を削出して築造している。斜面上方から墳丘東西側には溝をめぐらしているため墳丘裾部は明確にできたが、北側は何らの施設もたないため、裾部は明確にできなかった。しかし一応32の黒灰色粘質土を墳丘内に、33の灰褐色粘質土を墳丘外に堆積したものと考えた。

この結果墳丘は等高線の走行方向に長い東西約12m、南北約11mの楕円形を呈し、斜面下方側の高さ約3m、斜面上方側の高さ約0.4mを測る。築造当時の墳丘はもう少し高かったものと考えられる。

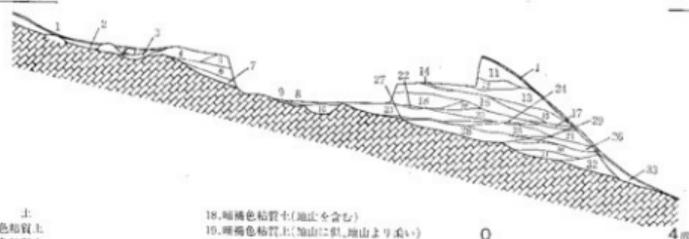
墳丘封土の盛り上げは、まず斜面下方から積み上げ、石室基底部までは水平方向に近く積み上げている。4・5・14の土層などは石室に向かって高く積み上げている。封土に用いられた土層は、水平方向に近く盛り上げられた土層がやや黒く、炭化物を含むのに対し、4・5あるいは16以上の土層は褐色の粘質土を積み上げている。

なお北側の墳丘裾部及び墳丘上には約40～50cmの石が所々にみられ、墳丘上のは長さ1mにわたって列石状となっていたが、僅かに5～6石が並ぶだけであった。このため盗掘の際に掘り出され



第7図 7・8・9号墳墳丘測量図(調査後)

L=51.80m



- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1. 表土                  | 19. 暗褐色粘質土(地土を含む)        |
| 2. 黒灰色粘質土              | 20. 暗褐色粘質土(湖山に似、湖山より重い)  |
| 3. 暗褐色粘質土              | 21. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土含)       |
| 4. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土含)      | 22. 黄褐色粘土                |
| 5. 暗褐色粘質土              | 23. 暗褐色粘質土(湖山の土、地上、炭化物含) |
| 6. 暗褐色粘質土(やや茶色味濃く炭化物含) | 24. 黄褐色粘土                |
| 7. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土含)      | 25. 暗褐色粘質土(湖山より黄色味強)     |
| 8. 暗褐色粘質土              | 26. 暗褐色粘土                |
| 9. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土含)      | 27. 黄褐色粘土                |
| 10. 暗褐色粘質土(湖山を含む)      | 28. 暗褐色粘質土               |
| 11. 暗褐色粘土              | 29. 黄褐色粘土                |
| 12. 暗褐色粘質土             | 30. 暗褐色粘質土               |
| 13. 暗褐色粘質土             | 31. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土混)       |
| 14. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土及炭石含)  | 32. 暗褐色粘質土(黄褐色粘土の混生)     |
| 15. 黄褐色粘土              | 33. 暗褐色粘土(黄土)            |
| 16. 暗褐色粘質土             |                          |
| 17. 暗褐色粘質土             |                          |

第8図 墳丘断面図

た石と判断したが、8・9号墳の結果から考えて、これは列石の一部であったのかもしれない。

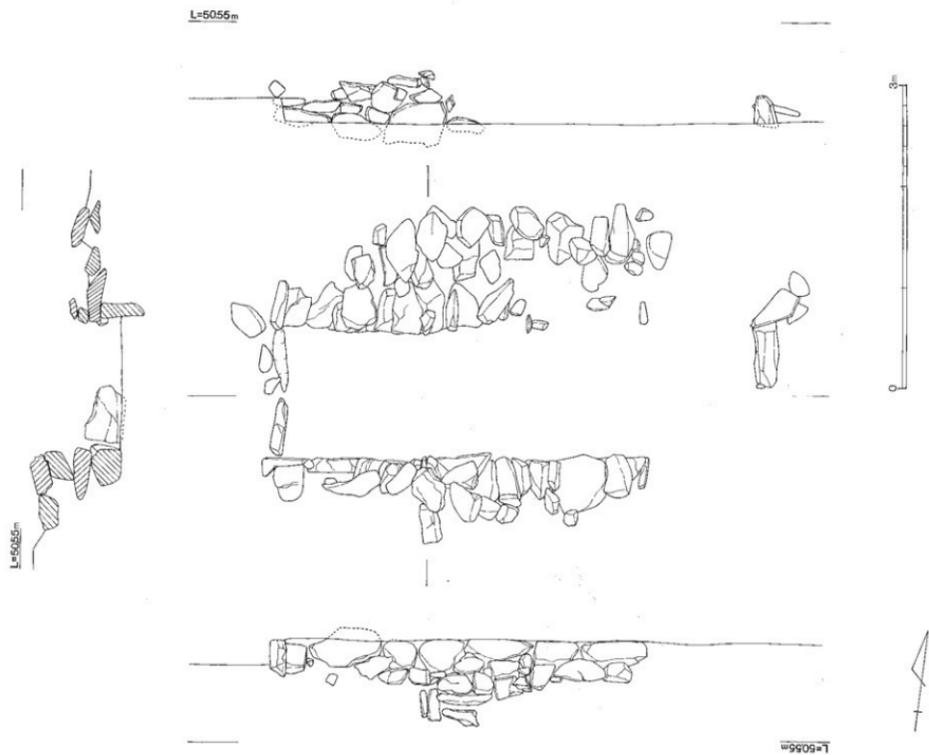
#### (4) 埋葬施設 (第9図、図版第7・9—上・下、図版第8—下)

埋葬施設は墳丘中央から南寄り、つまり山側寄りに設けられた石室であり、おそらく横穴式石室であったろうと考えられる。

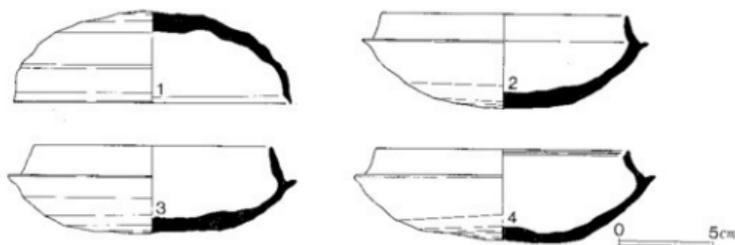
しかしながら石室の損壊がひどく、羨道部と考えられる東側は全く旧態を残さず、袖石かと思われる一石を残し全壊していた。また北側壁は東半は基底部まで欠き、他は最高で3段、約50cmの高さしか残っていなかった。南側壁も東端を基底部まで欠き、他は最高で4段、約65cmの高さまで残っていただけである。奥壁と考えられる西側の壁は南半の基底部の一石を残すだけであり、北半の基底部には石の抜き取り跡がみられた。このように大きく破壊されており、疑問も残るが一応横穴式石室とした。

石室は支室を残すだけであり、支室は主軸をN 85°Wに置き、斜面と並行して東に開口して、構築されていたものと思われる。床面の平面プランでは、現存長約4.7m、幅約1.3mと狭長なプランであり、幅の約3.6倍の長さを有する。高さは現存する部分では最高約65cmを測るが、元来はさらに高かったものと思われ、旧状を保つ墳丘部分から推測すると、約1m~1.2mぐらいの高さがあったものと考えられる。羨道部については全く残っていないため不明であるが、東側の一石を袖石と考えたと幅約65~70cmであったと思われる。袖石から墳丘裾部までは約2mを測り、おそらくこれ以内の羨道をもっていたと考えられる。

石室の壁はまず基底に約70cm~80cmの石を据え、一部側石積みをするが、大部分はこの上に所謂木



第9圖 石室 與 測 圖



第10図 石室内出土遺物実測図

口積みをする方法をとっている。特に北側壁の背後には丁寧な控え積みを施している。このように石室基底の石を立てて据え、木口積み、控え積みをするなど竪穴式石室とよく似た構築方法を用いている。このため当初竪穴式石室と考えたが、但馬地方の竪穴式石室と比べると規模が大きいこと、また古式の横穴式石室とされる観音塚古墳と類似していることから、一応横穴式石室と考えた。

#### (5) 遺物の出土状況 (図版第8—上)

石室内からは、南側壁の東半に沿うように、東西約2.6m・南北約0.6mの範囲で、遺物が出土している。全ての遺物を一群のものとも考えることも可能であるが、細かくみれば3群に分ることができる。

第1群は支室入口付近と思われる石室の東端の1群であり、1の杯蓋、2・3の杯身、1の刀子、7の鉄斧からなる1群である。2点の杯身は逆転して出土している。

第2群は南側壁に沿って、4、5の鉄鎌2本からなる1群である。

第3群は石室の中央付近から南側壁にかけての1群であり、4の杯身、2の刀子、6の鉄鎌からなる1群である。4の杯身も逆転して出土しており、第1・第3群はともに遺物は埋葬時のままの状態とは考えにくい。

この他馬蹄形をなす溝内からも遺物が出土している。特に石室の主軸延長線の南側、おそらく石室入口の山側と考えられる付近から、杯蓋、杯身、高杯、器台脚部片、中型・大型甕片が出土している。器台脚部片は墳丘南側、墳丘外の斜面から採集された器台杯部と同一個体である。

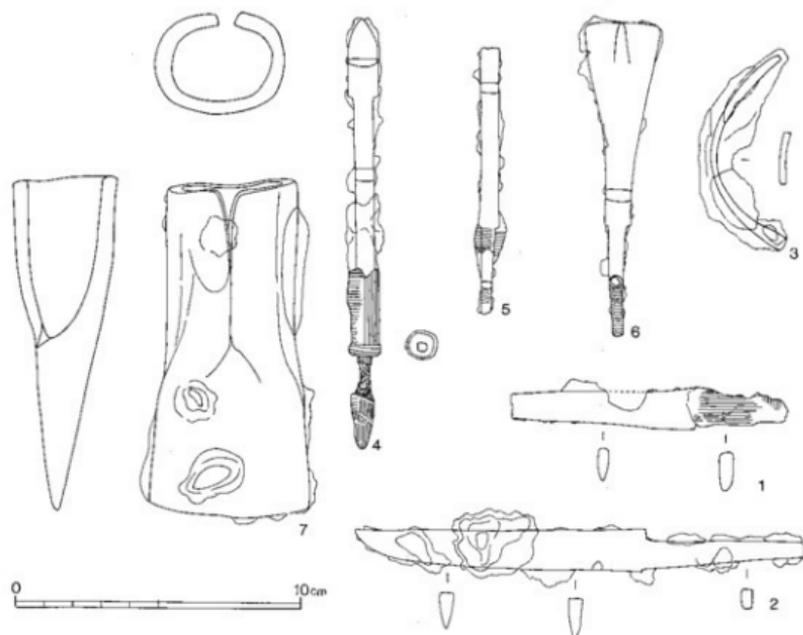
さらに墳丘東側に積まれていた、工事用道路設営の際の塵土中より、杯身に蓋がされた状態で2セット出土している。

また墳丘の南側、墳丘外の斜面表土から甕・器台杯部片・甕胴部片が採集された。当初本墳とは別の古墳の存在も考え、工事用道路の断面を観察したが、確認できなかった。

#### (6) 遺物

##### a. 石室内出土遺物

石室内からは、杯蓋1個体・杯身3個体の須恵器類と、鉄鎌3本・刀子2本の鉄製品類が出土して



第11図 石室内出土遺物実測図（鉄製品）

いる。

須 惠 器 類（第10図、図版第10—上）

杯 蓋 天井部と口縁部を分ける縁は鈍く凹線状となり、口縁の下半は短く外反する。端部は凹面を有し、右回りのヘラ削り調整をしている。

杯 身 2～4は受部からやや内傾して立ち上がる口縁部をもち、端部は丸い。4は口縁端部下の内面に一条の沈線を施しており、3は底部内面に同心円文を残す。いずれも大形である。

鉄 製 品（第11図、図版第10—下）

鉄 鎌 3本出土している。その形態から長頸鎌と円頭広根斧箭式鎌に分けられる。

4は両刃で腸袂をもち、両側で丸造りの長頸鎌である。基部分に矢柄の一部を残す。矢柄への鎌の装着は、茎を直かに樺の皮のようなもので巻き、矢柄を装着した後、糸状のものを巻いている。

5は刃部を欠くが筈径の長さからすれば長頸鎌の部類と考えられる。

6は身と茎の境には関をもつ。所謂円頭広根斧箭式鎌である。

刀 子 刀子は2本出土している。1は切っ先を欠き、茎部に木質が残る。おそらく両側のものであろう。2も、両側の刀子である。背側の方が刃側より大きくなっている。

鉄 斧 刃部のついた1枚の鉄板の両縁を折り曲げて袋穂部としている。全長約11.8cm、刃幅約5.

7cm、袋穂部の長さ約5.7cmを測り、袋穂部の断面は楕円形を呈する。片刃である。

**用途不明鉄製品** 幅約0.9cm、厚さ2～3mmの鉄板を弓状に曲げており、現存長約7cmを測る。

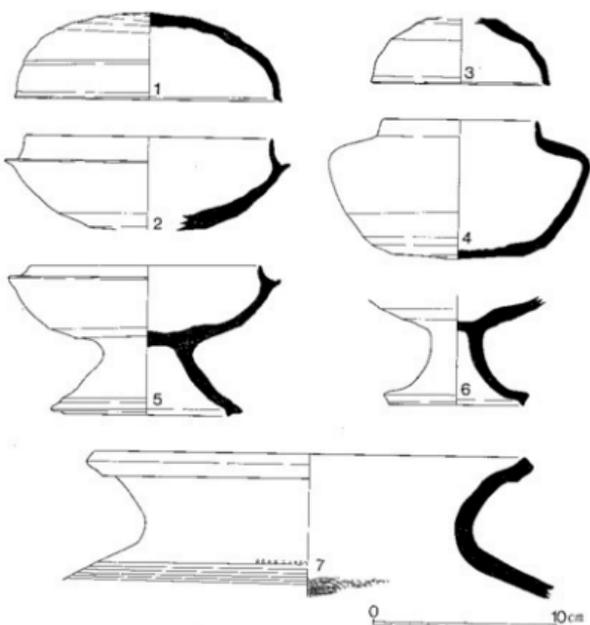
b. 溝内の出土遺物（第12・18図、図版第11—上）

馬蹄形溝内からは杯蓋・杯身・高杯・有蓋短頸壺・杯蓋・中型甕・大型甕が出土している。

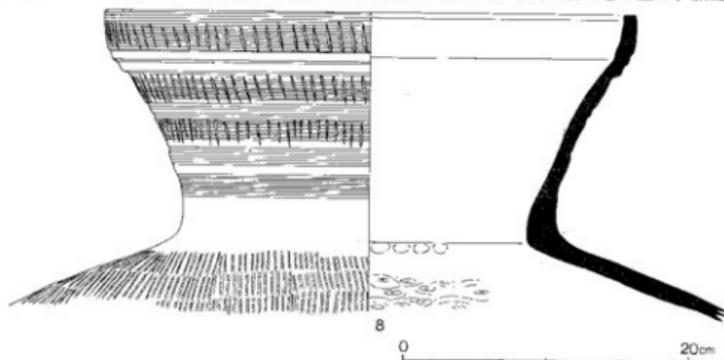
**杯蓋** 1の杯蓋は口縁端部が短く外反し、端部に凹面をもつ。体部と口縁部との境には鈍い稜をもつ。

**杯身** 2の杯身は、外上方に伸びる受部から、下半は内傾し、上半が直立する口縁がたちあがる。

**高杯** 5は有蓋高杯であり、6は脚部から体部にかけての破片である。5は灰褐色を呈し、立ちあがりの低い口縁部を有する杯部に、太く短い台状の脚部が付く。6は杯部の体部上半を欠くが、脚部が細いことから、おそらく無蓋の高杯になるものと思われる。色調は青灰色を呈し、胎土は粗い



第12図 溝内出土遺物実測図



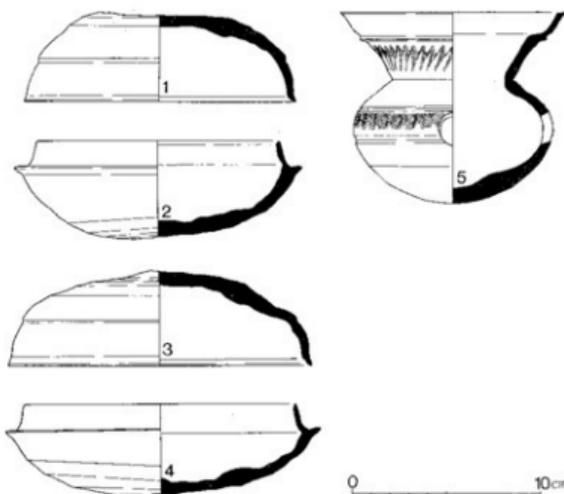
第13図 溝内出土遺物実測図

が、焼成は堅緻である。

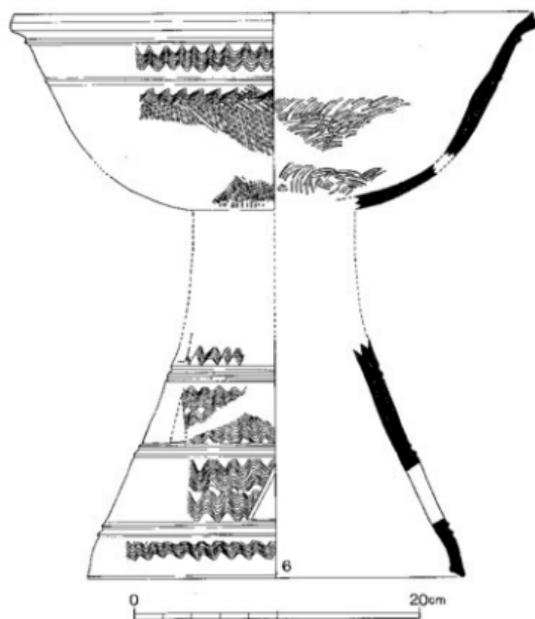
**有蓋短頸壺 3**は口縁端部が短く外反し、内傾する端面をもつ。しかし、体部と口縁部を分けるものは口縁部上方の体部のナドと思われる浅い凹みである。

4の肩部に残る重ね焼の痕跡に一致することから、4の蓋と思われる。

4は強く張った肩部から短く直立した口縁が立ち上がる有蓋短頸壺である。低部は扁平であり、内面に押圧文あるいは叩き目文と思われる同心円文を残す。肩部に重ね焼の



第14図 墳丘周辺採集遺物実測図



第15図 墳丘周辺採集遺物実測図

痕跡が残り、焼成時から蓋をしていたものと思われる。

**壺 7**は中形甕であり、大きく外反する頸部を外側へ折り込み口縁としている。内面には同心円の叩き目文を残したままである。

8は大形甕で頸部を直立させて口縁部とし、口縁端部は凹面となり、僅かに内面に突出している。口縁部と頸部の境界は段をもち、段に一条の凹線を施す。頸部は一〜二条の凹線で区画され、櫛による列点文で飾られている。口縁部にも同様の文様が見られ、いずれも頸部、口縁部を全体にカキ目調整をした後に、施している。

c. 墳丘周辺の採集遺物(第14・15図、図版第11—下)

7号墳の墳丘周辺からは杯身に蓋が被さった状態で、2セットを採集している他、甕・器台を採集している。すべて須恵器類である。

**杯身・蓋** 1と2、3と4がセットになり、同一場所で採集している。1、3の蓋はともに体部と口縁下半が短く外反する。1の口縁端面は凹面を呈するのに対し、3の口縁端面は段状となる。ともに大型であり、古い様相を残している。杯身はともにやや外上方に伸びる受部からやや内傾する口縁部がたちあがる。口縁端面は丸い。4は口径14.4cm、口径5.0cmを測る。3と4が扁平で大型なのに比べると、1、2はやや小型である。

**甕** 口縁部は一部が残るだけである。口縁端面は平坦面を有し、口縁部と頸部の境界には突帯をもつ。やや扁平な球形の体部に、基部が太く、短い頸部をもつ。体部の中央、最大胴径付近には、2本の凹線で区画した文様帯を構成し、櫛描きの波状文を施す。頸部にも波状文を施している。

**器台** 杯部と脚部下半の破片が出土し、復元を試みたが完全に復元することはできなかった。

受部は鉢形を呈し、体部を外反させた後、端部をつまみあげて口縁としている。口縁端面は丸い、口縁部は体部の境界付近と体部に一条ずつの突帯をまわしている。突帯の稜は鈍い。それぞれの突帯下に櫛描きによる波状文を施し、受部下半の器表は平行叩き目文を残し、内面には同心円の叩き目文を残す。

脚部は、基部を欠き、下半が残るだけである。中半付近から外反し、裾部からは内彎して端部となる。端部は短く外反し、端面は凹面となる。端面と内面の境界には稜を有する。またつまみだした低い、2本2列の突帯と、2本1列の凹線で区画し、カキ目調整後に櫛描き波状文を施した文様帯がみられる。下二段には三角形の透孔を千鳥に配置し、上段には長方形の透孔を、三段目と直線的に配置している。

(7) 小 結

以上のように7号墳は東西径約12m、南北約11mの、東西に長い楕円形の墳丘を有し、斜面に築造された円墳である。埋葬施設は後世の擾乱を受け、大きく破壊されていたが、おそらく但馬地方の古式の横穴式石室とされる玄室が細長く、羨道部の短い横穴式石室であったと考えられる。

石室内の床面から出土した土器類は、田辺編年によるTK10型式に併行するものと思われ、馬蹄形の溝内から出土した土器類は、TK10型式とTK209型式に併行するものと思われる。また原位置を失って、墳丘の周辺で採集された土器類はMT15型式の範疇に含まれるものである。しかし採集された土器類は、全て本来の位置になく、必ずしもこの古墳に伴うものとはいきれない。したがって本墳の築造年代は、石室内の土器類の示す、6世紀前半に求めた方がよいのかもしれない。

ただこれらの土器が採集された尾根等には、他に古墳の存在は認められないことから、7号墳に伴うものであった可能性が強い。そこで本墳の築造年代は6世紀前半から中葉に想定でき、6世紀中葉に追葬が行われたと考えられる。馬蹄形の溝内から出土した新しい1群の土器は、石室内からは出土していない。このため追葬時の副葬品が運び出された可能性は薄く、墳丘上あるいは墳丘の周辺で何らかの行事が行われた可能性を示すものと考えられる。

### 3. 8号墳の調査

#### (1) 位置と調査前の状況 (第6図)

8号墳は、7号墳と9号墳の中央の下方、標高約45.0m～49.0mの斜面に築かれ、第4支群の中では最も谷底近くに位置する。谷底との比高差は約5m、尾根との標高差は約15mを測る。

7号墳とは約4m、9号墳とは約5mの標高差があるが、7・9号墳の墳丘裾部と、8号墳の馬蹄形の溝が接して築造されている。6号墳とはほぼ同じ標高にあり、墳丘裾部で4～5mの間隔をあげ、東西に並ぶように位置している。

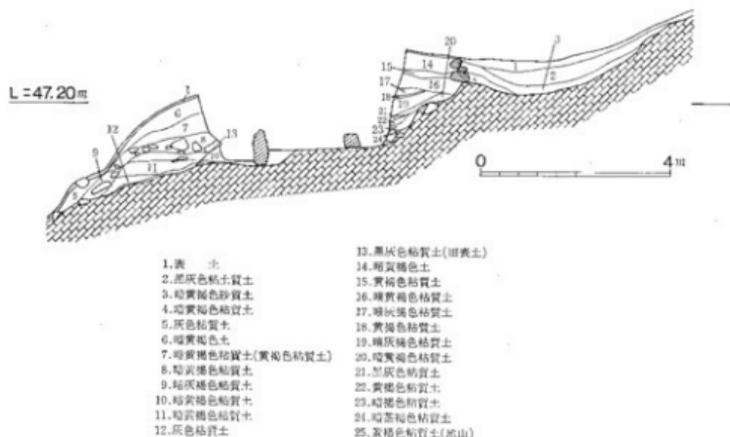
墳丘の西端を削り取って工事用道路が設けられ、墳丘測量の結果、この削り取られた部分は、全体の約 $\frac{1}{6}$ ～ $\frac{1}{8}$ 程度と思われる。

埋葬施設の位置すると思われる墳丘中央には、幅約3m、長さ8m以上の盗掘坑が西に開くコノ字形に掘り込まれており、西端は工事用道路に切り取られている。盗掘坑が西に開くことから、おそらく埋葬施設は西に開口した横穴式石室と思われるが、全壊状態であろうと思われる。

また盗掘の際に多量の土砂が放り出され、墳丘は旧状を失って、北半は急な段状の斜面を呈していたが、標高約45m付近で緩やかな傾斜となり、谷底に続く。おそらくこの付近に北側の墳丘裾部があるものと思われる。

墳丘測量の結果には明確に表われていないが、墳丘の南側には墳丘裾部に沿って、浅い窪地が確認できた。東側はほぼ標高約45.2m付近まで続き、浅くなって斜面に続く。西側は工事用道路に切られているためはっきりしないが、おそらく西側墳丘裾部の中央付近までは続いていたものと考えられ、この窪地は墳丘の南半を取り囲む馬蹄形状の溝と思われた。

墳丘の南半裾部をこの浅い窪地とし、傾斜の変る標高約45m付近に北側の裾部とすると、墳丘は東



第16図 墳丘断面図

西約13m、南北約11mの、等高線の走行方向に長い、楕円形を呈する凹形と思われた。

墳丘北斜面及び墳丘南裾部には山石の露頭がみられたが、当初はこれを埋葬施設の石材が盗掘の際に投げ出されたものと考えた。しかし調査の結果、これは列石の一部であることが判明した。

墳丘南側の浅い窪地の山側には、周辺より急な傾斜の斜面が窪地に沿って認められた。おそらくこれは墳丘を築造する際に整地した痕跡と思われ、7・9号墳に比べると範囲は広いが、高さは低く約1.3mを測る。

## (2) 馬蹄形の溝(第6図、図版第12—上)

調査前から墳丘の斜面上方側に浅い窪地がみられたが、調査の結果これは墳丘の南半裾部を圍繞する溝であることが判明した。

溝は地山面の最も高い、墳丘南側中央付近の溝底が高く、そこから東西に分流する。東側では次第に浅くなり、奥壁の背後付近で、地山面に到達して消えている。西側は工事用道路で削り取られていたが、おそらく石室の入口付近で地山面に達し消えていたものと思われる。

したがって溝の平面形は東西に伸びた弓状、あるいは馬蹄形状を呈していたものと思われる。溝の最大幅は墳丘南側の中央付近にあり、約3.3mを測り、この付近で深さ約85cm、断面は皿状を呈する。溝の南側は整地の際のカット面であり、墳丘側は地山を掘り込んでいる。また溝の東側では溝底に下段の列石が置かれていたことから、溝の掘削は墳丘築造以前と考えられ、溝の掘削段階は墳丘の規模・形状を想定し実施された可能性もある。

## (3) 墳丘と列石(第16・17図、図版第12・15—上・下、図版第14—下)

墳丘は標高約45.8m～49.0mの斜面に築かれ、元来16°の傾斜をもっていたと思われる斜面を削平・整地し、築造している。

整地後、墳丘南半に馬蹄形の溝を掘削することにより、墳丘南半の基底を削出している。おそらく溝の掘削工程において、墳丘の規模・形状、埋葬施設の規模・形状・位置といったものは、ある程度想定されていたものと思われる。

墳丘の築造は整地した地山を掘り込んで、石室を構築する平坦面を削り出すことから始めている。平坦面は二段に作成され、斜面上方側が斜面下方側より約30cm高くなっていた。この二段の平坦面に石室の側壁基底の石を据えている。ただ奥壁は石の形状に合せ、斜面上方側の平坦面を掘り込んで据えている。

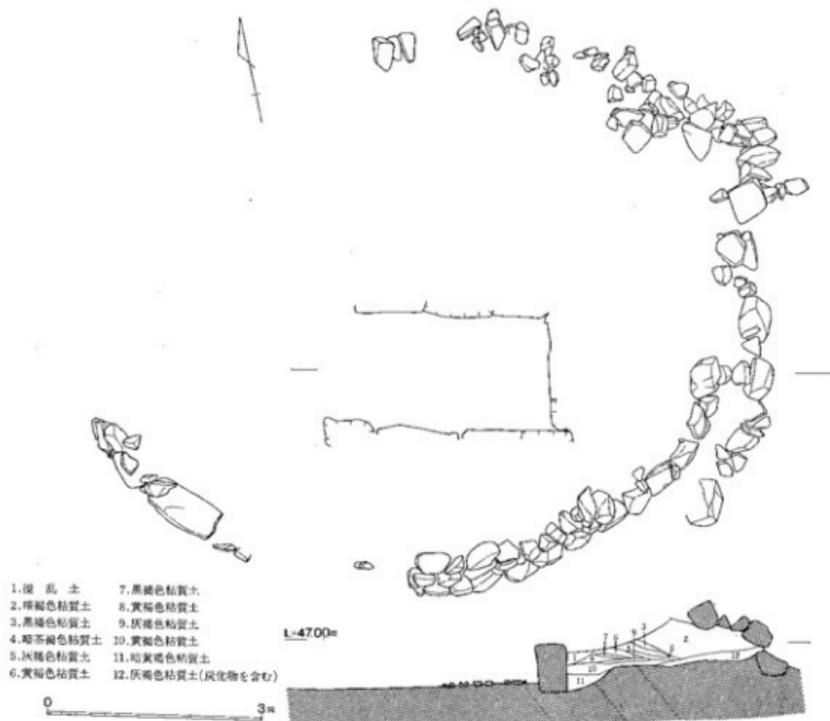
墳丘封土の積み上げは、石室の構築と並行して行なわれており、斜面下方側では旧表土と思われる黒灰色粘質土の上に積み上げられている。石室基底の石とはほぼ同じ高さまで盛り上げた段階で、約40cm大の石が封土全体を覆うように入れられている。これが何を目的としたものなのか判断できなかったが、墳丘の崩壊を防ぐという意図をもつものかもしれない。その後は石室の構築と並行して盛り上げられ、斜面下方側では石室に向けて高くなるように積み上げている。斜面上方側では約1.2mの高さまでは、版築状の薄い層が認められるが、そこから上はほぼ水平か若干石室に向けて高くなる傾斜をもたせて積み上げている。

また本墳には列石が2列みられ、墳丘南側裾部から墳丘東側中段に続く列石を上段列石、墳丘東側裾部に残る列石を下段列石とする。

下段列石は墳丘東側裾部、長さ約4.5mにわたってみられ、残存部分で見ると、この列石の南端にはかなり大きな石を置き、そこから北側に石を配列し、部分的には2段に積み上げている。おそらく墳丘北側の裾部にも続いていたものと思われるが、旧状を残すものはほとんどなく、崩壊してしまっていた。ただ北側裾部の中央付近に残っていた3個の石が、旧状をとどめているのかもしれない。

上段の列石は、墳丘南半裾部を溝に沿って回り、墳丘東側では一段残るだけであるが、墳丘の中段を約2m回り、その付近で消えている。おそらく北側にも回されていたものと思われるが、これも下段の列石と同様に崩壊してしまったものだろう。また西半は盗掘のため約2.8m途切れ、約2.5m続いて工事用道路によって切りとられていた。しかし石室の両側壁の延長線上付近まで配されており、築造当時は石室狭門に取り付くように配されていたものと推測される。この列石は2～3段、約50cmの高さに積まれていた。全体的には長さ約50～60cmまでの石を利用しているが、部分的には長さ1mほどの石を利用している。

この上下二段の列石の内、上段の列石はほぼ最後の封土積み上げ工程段階に並行して積まれたこと



第17図 墳丘平面図

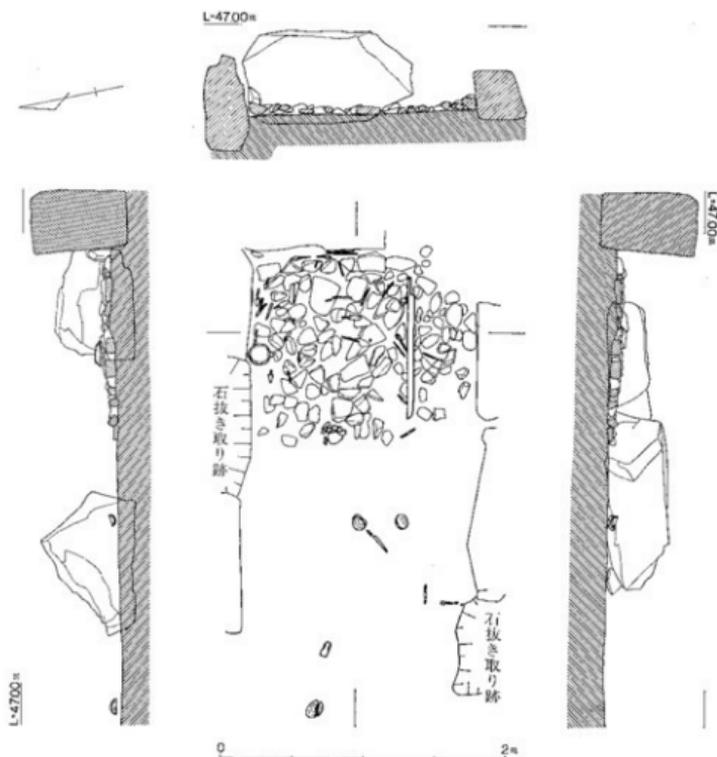
が墳丘断面で観察できたが、下段の列石については、残存部分が僅かなこともあって墳丘構築との関係は確認できなかった。

この列石により、墳丘の南・東側裾部は明確になったが、西・北の側裾部は列石が崩壊していたり、削平を受けていたりしたため、明確にすることはできなかった。ただ下段列石と思われる3個の石に北側裾部を求めると、墳丘は南北約8m、東西は約10mの等高線走行方向に長い、楕円形を呈していると思われる。高さは斜面下方側で約8.8m、斜面上方の馬蹄形の溝底から約0.8m、石室の基底から約1.8mを測り、築造当時はこれより若干高かったものと思われる。

#### (4) 埋葬施設 (第18図、図版第18—上・下)

すでに述べたように、墳丘中央がコの字形に大きく掘り込まれ、採石が石室の基底にまで及んでいた。

このためコの字形に配された石材が一段残存していただけであり、石室の形態・規模等については



第18図 石室実測図

把握できなかった。しかし、石材の大きさが約1m以上もあることから、石室は横穴式石室であり、N78°W開口していたと思われる。残存していた部分は横穴式石室の玄室奥壁部分であり、この部分での玄室幅は約1.6mを測る。南側壁が奥壁から約2.7mまで石材・石の抜き取り跡が確認でき、玄室の長さはこれ以上あったものと思われる。

奥壁は北半に基底の石が残っていたが、叩き割られていた。この石材に連続して南半には石の抜き取り跡が検出された。おそらく元来は奥壁の基底は一石が据えられていたものと思われる。

床面には奥壁から約1.2mの範囲に、奥壁とは約7cmの間を開けて、約15cm大の山石が敷かれていた。この敷石上から多数の遺物が出土しており、特に側壁と並行して出土した直刀と北側壁の間に集中していた。ここに棺が安置されていた可能性が高い。

玄室羨道部よりから羨道部にはかけて全く残っておらず、これを推測する手がかりさえ残されていなかった。ただ南側壁の残存していた部分を、西に延長すると上段の列石と接する。したがってこの接点付近に羨道入口があったものと考えられる。しかし接点の東側に自然の巨石が存在し、南側壁を直線に築くことは不可能であり、羨道部の側壁は、玄室側壁より、中央に寄って構築されていたものと思われる。南側壁がこのような状況であったとすれば、石室の幅からみて、北側壁にも袖を有していたとは考え難い。このことから石室は、おそらく南側に袖をもつ片袖式の横穴式石室であり、全長約6.0m～6.5mの規模であったと推測される。また高さについては、石室の基底部が残るだけであったため判然としないが、封土の状況から考えて、約1.5m前後であったものと推察される。

#### (5) 遺物の出土状況(第18回、図版第14—上)

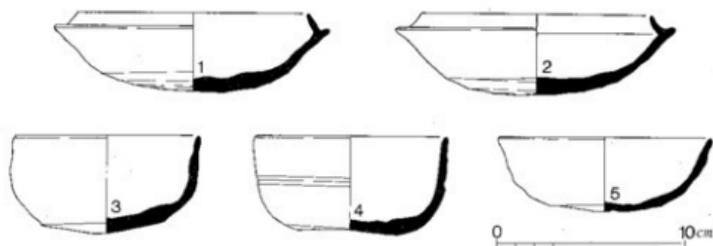
遺物は石室内床面上、馬蹄形状溝内及び石室の盜掘墳内からも出土している。

石室内の遺物は玄室奥壁から約3.5mまでの範囲で出土し、特に奥壁から約1.2mの敷石がある範囲から多量の鉄器類が出土している。この敷石上及び奥壁際の遺物と、敷石から西側の遺物に大きく分けられ、敷石上のはほぼ埋葬当時の状況に近いものと考えられる。敷石西側の遺物については散在し、杯身が逆さになったり、床面から僅かではあるが浮いていることから、盗掘の際に動かされている可能性が大きい。またこの一群の土器は敷石上のもより新しい型式の須恵器であり、追葬の際のものと考えられる。

奥壁付近の敷石上の遺物は鉄器類が多く直刀一口を含んでいる。直刀は中央南寄りに南側壁と約40cmの間隔で並行した状態で出土し、おそらく埋葬当時の状態であろう。この直刀の北側に遺物が集中し、直刀の南側からは鉄鏃1本が出土しているにすぎない。北側壁際からは、須恵器杯身(1)が出土しており、この杯身の下からも鉄器類が出土している。

奥壁と敷石の間には、約7cmの僅かな隙間があり、そこから鉄器類が出土している。当初これを棺外遺物と考えたが、敷石上からこの隙間に向って斜めの状態で出土した鉄鏃があることから、敷石上の遺物が落ち込んだ可能性も考えられる。

石室内の他、馬蹄形状溝内からも遺物が出土している。おそらく石室羨門付近の斜面上方側と考えられる溝内から多量の土器が出土している。いずれも溝底から黒灰色粘質土にいたる間の土層中に含



第19図 石室内出土遺物実測図（須恵器）

まれており、特に溝底に近い暗茶褐色土から多く出土している。図示できなかったが、土師器の甕1個体分が極めて細片になって出土している。黒灰色粘質土上面からは7号墳の溝内出土遺物の中の大葉片出土しており、流入してきたものと考えられる。

この溝内西半という位置は、石室羨門部の山側にあたり、羨門部の斜面上方側の溝内から土器が出土するという現象は、7・9号墳にもみられた。またこれらの遺物類は石室内のものより古い様相を示し、おそらく追葬時に石室内の清掃が行なわれ、その際に石室内から運び出され、放棄されたものと思われる。

## （6）遺物

### a. 石室内出土遺物

石室内からは杯身3個体・碗2個体の須恵器類と、直刀1口、鏝1点、鉄斧1点、刀子5本、鉄鎌29本の鉄製品類が出土している。

#### 須恵器類（第19図、図版16—上）

杯身 受部を持つものと持たないものとに分けられる。1・2は内傾の度合いが大きい口縁が短く立ちあがり、受部が外上方に張り出す。受部と口縁の差は少なくなっている。3は杯の身と蓋が逆転して受部を持たない。器壁が薄く外上方に開いた体部を丸く納めて口縁としている。

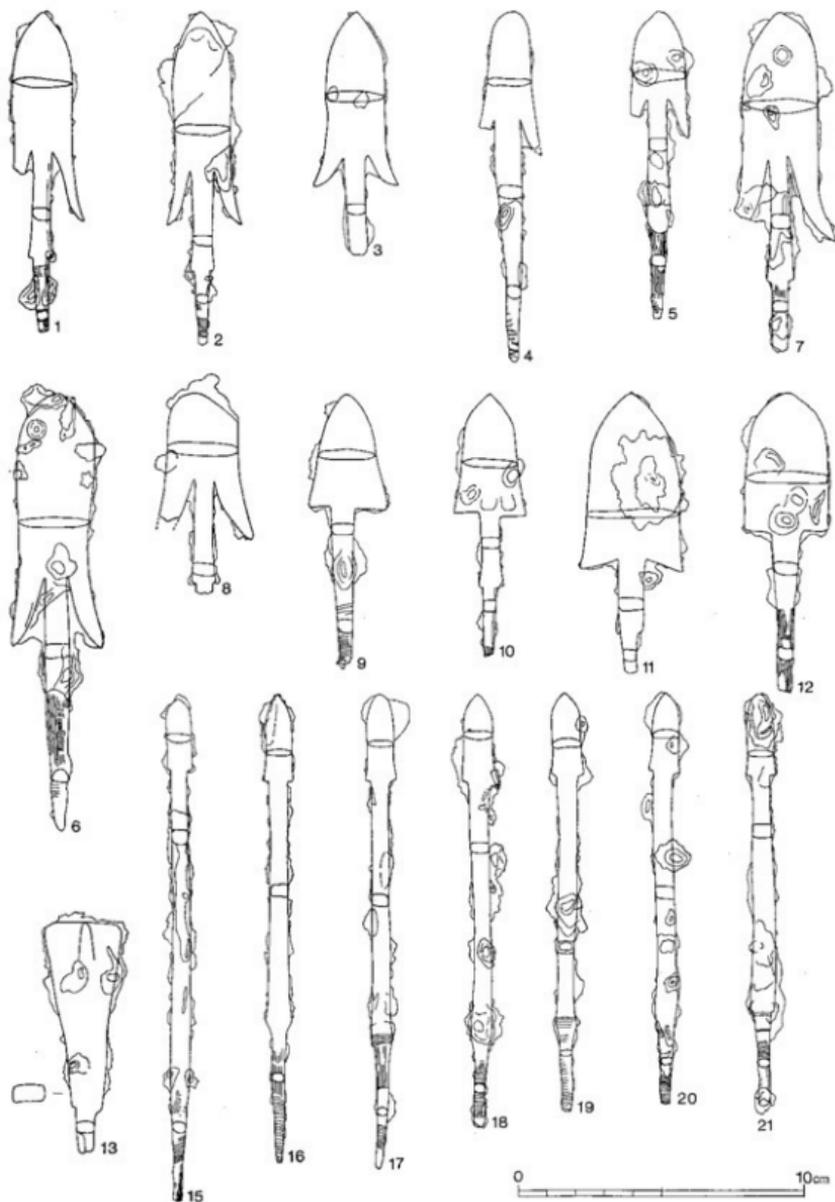
碗 器壁は厚く、胎土も粗く、直立した体部を丸く納めて口縁としている。4には体部に一条の沈線がみられる。

#### 鉄製品（第20・21・22図、図版第17・18・19）

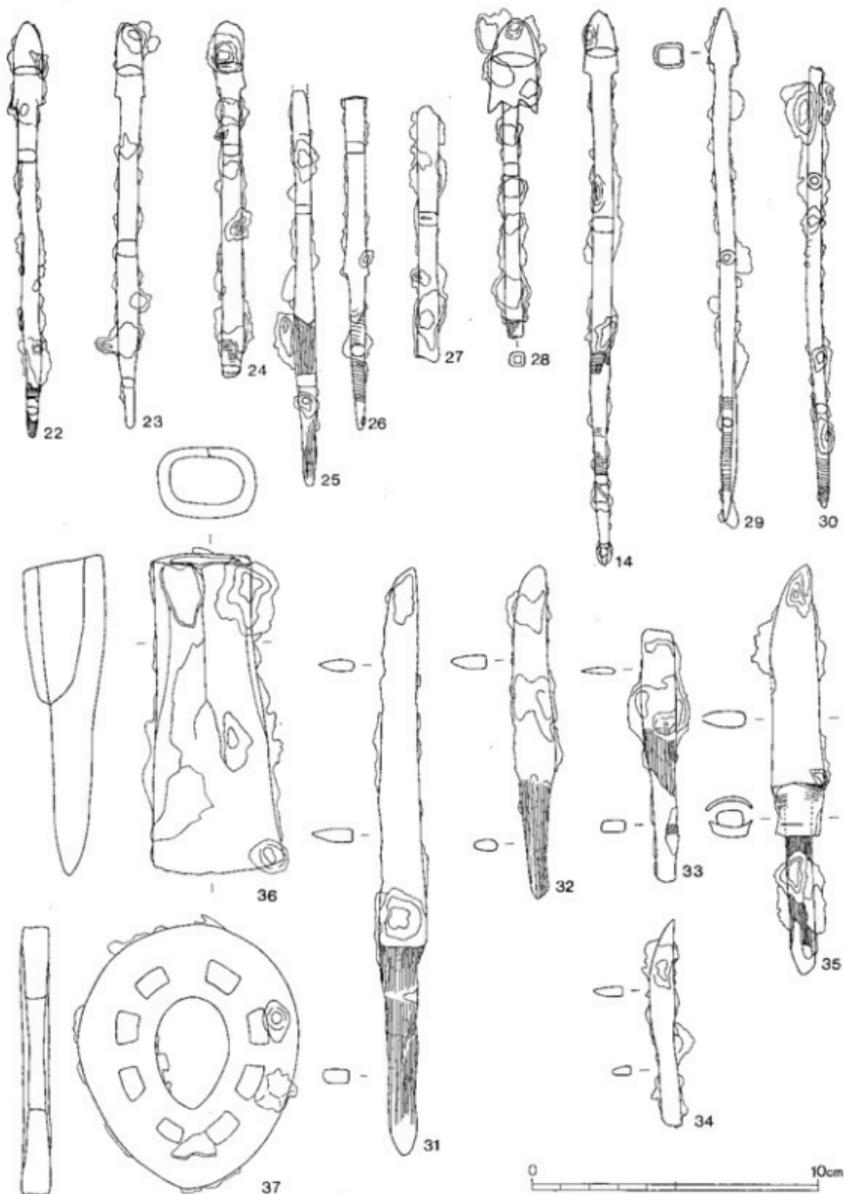
鉄鎌 鉄鎌は総数29本出土しており、大きく有茎鎌と長頭鎌とに分けられ、その形態から5種類に分けることができる。

第1類は腸扶柳葉式と呼ばれるもので、1～8がこれにあたる。刃部から続く腸扶は深く鋭い。この形式のものは、刃長・刃幅から三型態に分けられる。第1は刃長・刃幅とも大きなもので、刃長が約7.5cm以上、刃幅約2.5cmと大型のものである。第2は腸扶は細く、刃長約7.3cm、刃幅約2.0cmと、第1のグループに比較するとやや小型で、細い。第3は刃長が約5cmまでの小型のものである。

第2類は有茎三角式鎌と呼ばれるもので9～12がこれにあたる。刃部の大きなものと小さなものがある。



第20图 石室内出土遺物実測図(鉄製品1)



第21图 石室内出土遺物実測図(鉄製品2)

第3類は円頭広根斧箭式と呼ばれるものであり、13がこれにあたる。現存長約11.6cm、刃長約7.3cm、刃幅約2.0cmを測り、身と茎との境は関をもつ。

第4類は長頸鎌であり、14～27・29・30がこれにあたる。両刃で髷状をもち、両関で丸造りのものである。筥被の長さに長短2種類みられる。茎は丸く、断面は円筒状となる。30も29と同様の鎌になるものと思われる。

第5類は長頸鎌の内、髷状をもつもので、現存長約11.3cm、刃長約3.3cm、刃幅約1.5cmを測る。28がこれにあたる。

刀子 刀子は5本出土しており33以外は完存である。31は現存長約20.7cm、刃長約13.1cm、刃幅1.5cmを測り、両関である。その他、32・35も両関である。34は小形の刀子で現存長約7.4cm、刃長約8.1cm、刃幅約1.6cm、関はみられない。35は把の一部が残る。

鉄斧 袋穂部は、両縁を折り曲げて断面楕円形にしている。現存長約11.0cm、刃幅約4.5cm、袋穂部長約5.0cmを測り、両刃である。

鋤 大型の鉄製鋤で長径約9.2cm、短径約7.8cmの倒卵形を呈し、厚さ約0.9cm、把を通すための孔も長径約3.9cm、短径約2.5cmの倒卵形を呈する。8個の透孔をもち、現状では装飾等は認められない。

直刀 現存長は約100cmで茎先を欠いている。おそらくさらに1cm程度長かったものと思われる。刀身は長さ約88.3cm、幅約4.4cm、断面は二等辺三角形を呈するが中央がやや膨む。刀身に反りはなく、平造りである。茎は現存長約11.7cm、厚さ約0.8cm、ほぼ中央に約7mmの目釘穴をもつ。また刃関から約1.6cm刀身側、刃部側から約2cmを測るところに、径約6mmの刃関孔をもつ。かなり錆ているため、おおよその数字だが、現重量は約2kgを測る。

#### b. 溝内の出土遺物

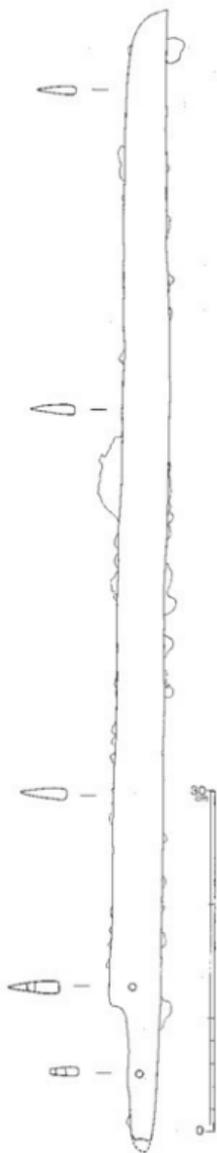
馬蹄形状溝内からは須恵器杯身・杯蓋・有蓋短頸壺・提瓶、土師器壺・高杯脚部等が出土している。

#### 須恵器類 (第23図、図版第16—下)

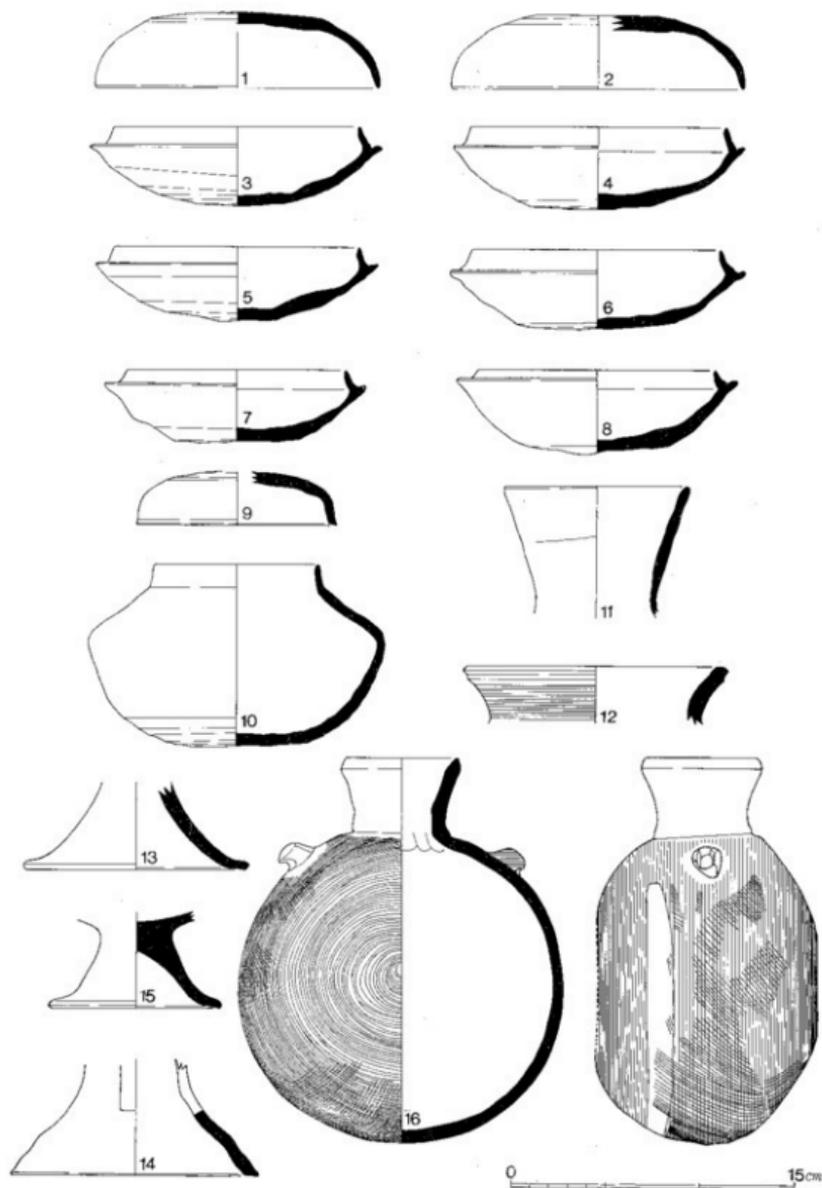
杯蓋 2個体出土しているが、ともに体部を内彎させて口縁部とし、ヘラ削りは体部の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 程度で似た器形及び調整をしている。

杯身 は3～8の6個体が出土しており、3類に分けることができる。

I類は3～6の4個体であり、口径は13.0cmを越す。3・4は外上方に伸びる受部から内傾する口縁が立ちあがるが、口縁と受部の境界が沈線状を呈し、特に4はV字形の断面を呈している。杯蓋1と3、杯蓋2と4が



第22図 石室内出土遺物実測図(鉄製品3)



第23图 藩内出土遺物実測図(15土師器 他須恵器)

セットになると思われる。

Ⅱ類は5～7の3個体であり、Ⅰ類と比べるとやや小形ある。口縁部の内傾度が強くなり、立ちあがりは短くなっている。全体に自然釉が付着している。体部のヘラ削りは $\frac{1}{2}$ 。

Ⅲ類は8の1個体である。受部は外上方に伸び、そこから内傾度の強い口縁部が短く立ちあがる。ヘラ削りはみられず、底部はヘラ切り未調整のままである。

有蓋短頸壺 9は有蓋短頸壺の蓋である。体部と口縁部とは分けるものではなく、体部が内傾して口縁部となる。口縁下端が短く外反し、口縁端部は面を有する。色調は青灰色を呈し、胎土は良く、10の肩部に残る重ね腕の痕跡と一致するところから、10の蓋であろう。

10は短頸壺である。体部は胴部と肩部の境付近に最大径をもち、肩部からやや内傾気味の口縁部が直線的にたちあがる。底部は扁平で、内面に同心円文を残し、肩部に重ね腕の痕跡を残す。

壺 11・12は壺類の口縁部の破片である。11は色調暗茶褐色、胎土は良く、内面に灰をかぶっている。12は広口壺の口縁部片である。口径約13.6cm、頸部外面にカキ目調整がみられる。

高杯 13は高杯の脚部破片である。大きくラップ状に開き、脚部は外反させ端部の内面をナデている。

台付壺脚部 14は台付壺の脚部片と考えられる。ラップ状に開き脚部でやや内反し、端部は短く外反する。端部は中央が凹面を呈する。透孔が一孔残り、おそらく長方形の透孔であったと思われる。しかし透孔の個数は不明である。

堤瓶 16は堤瓶である。体部は前、背面ともカキ目調整をし、側面の一部にカキ目調整後のヘラ削りが残る。外反する頸部が内傾して漏斗状の口縁部となる。鉤状の耳が側面に取り付けられている。

#### 土師器

高杯 15は脚基部から外反する脚部が裾部で大きく開く。脚部は丸く、内面をナデる。

#### c. 盗掘坑内出土遺物

埋葬施設の狭道部付近の盗掘坑から杯身3点、長頸壺、高杯2点が出土している。

#### 須恵器(第24図)

杯身 1・2は受部をもつ。1は受部が外上方にたち、内傾度が大きい口縁部が短くたちあがる。2は口径12.9cm、やや外上方に伸びる受部から、内傾した口縁部がたちあがる。受部上面にナデのためと思われる沈線が認められる。体部の $\frac{1}{2}$ 程度をヘラ削りしている。

3は1・2と異なり、受部を持たない。底部はヘラ切り未調整。

長頸壺 外反する頸部がやや内傾して口縁部となる。頸部は2本の沈線を施している。

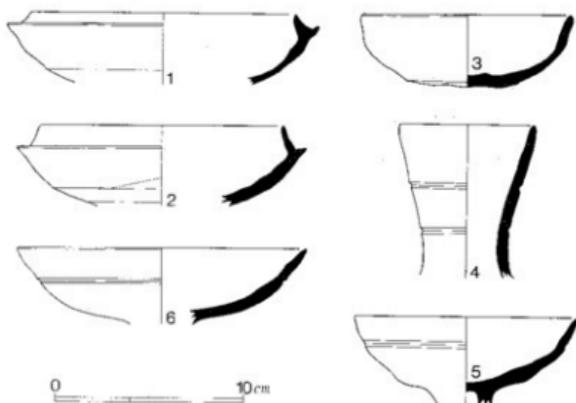
高杯 5は高杯の杯部であり、脚部を欠く。外上方に開く口縁部は端部が丸く、口縁部下に一条の沈線を施して体部と分けている。脚基部は細く、無蓋の高杯の杯部である。

#### 土師器

高杯 6は土師器の無蓋高杯の杯部である。5と同様に、口縁部下に一条の沈線を施し、体部と口縁部とを分けている。体部はヘケ整形後にナデ調整している。

### (7) 小 結

以上が8号墳の概要である。これを要約すると、8号墳はN78°Wの方向に開口していたと思われる横穴式石室を埋葬施設とした、墳径東西10m、南北約8mの楕円形を呈する円墳である。南側の墳丘裾部、墳丘中央よりの東側の2段に列石を築き、墳丘南側には馬蹄形の溝を設けていた。横穴式石室は玄室の奥壁部分



第24図 盗掘壕内出土遺物実測図

だけが残り、羨道部は壊されてしまっていた。このため石室規模は、不正確ではあるが列石との関係から、長さ約6m～6.5m、玄室長約2.7m以上、玄室幅約1.6mの規模であったと思われる。玄室床面には奥壁から約1.2mの範囲に山石を敷いていた。この敷石上から鉄製品を中心に遺物が出土した。また墳丘南側の馬蹄形の溝内からも土器が多く出土している。

さて本墳の築造年代であるが、石室床面から出土した遺物の内、玄室奥側の敷石上から出土した土器は、田辺編年のTK209型式に比定でき、敷石のない床面上から出したものはTK217型式に比定できる。したがって前者の土器形式の段階に築造され、後者の土器形式の段階に追葬されたものと考えられる。しかし溝内出土の土器の一部は、TK43型式に比定できるものであり、追葬段階に石室内から運び出されたものとする。そこで本墳は6世紀後半に築造され、6世紀から7世紀初頭の段階で追葬し、7世紀前半の段階に最後の追葬が行われたものと思われる。

## 4. 9号墳

### (1) 位置と調査前の状況(第6図、図版第21—上)

9号墳は、7号墳の東側、8号墳の上方に位置し、第4支群では最も東側に位置する。標高約49m～53mの斜面に位置し、7号墳とはほぼ同じ標高を示す。7号墳との間は平坦な面となっている。8号墳とは約5mの標高差をもって築かれている。

埋葬施設の位置すると思われる墳丘中央には、幅約2.2m、長さ約5.5mの大規模な盗掘壕が、東に開くコの字形に墳丘東側の裾部付近まで掘り込まれていた。この盗掘壕底にはかなり石材がみられ、石室が築かれていることは推測できたが、おそらくほとんど破壊されてしまっているものと思われた。また盗掘壕が東に口を開くことから、石室は東に開口しているものと推測された。

この盗掘の際に多量の土砂、石材が放り出されたためか、北側の墳丘は急な傾斜の斜面となり、墳

丘東側には、後に列石と判明した多くの石材が認められた。

墳丘の北側裾部には、部分的に列石が露頭し、墳丘裾部をめぐる列石が存在することが予想できた。墳丘南側は平坦面となり、そこに墳丘裾部をめぐる浅い窪地がみられた。東側では標高約51m付近まで、西側では標高約50m付近まで確認できた。

墳丘北側の列石の露頭する部分、及び墳丘南側の馬蹄形状の溝と思われる浅い窪地に墳丘裾部が求められ、調査前の規模は東西約12m、南北10mで東西に長い楕円形の墳丘を有すると思われた。

また墳丘南側には、かつての農道が残っていた。

## (2) 馬蹄形状の溝(第25図、図版第22—上)

調査前から、墳丘の斜面上方側に半円形の浅い窪地が、確認できた。この窪地が調査の結果、墳丘南半の裾部を半周する溝となった。溝底は地山面の最も高い墳丘南側が高く、そこから東西に分流している。東側では石室羨門付近で地山面に達し消え、西側も石室主軸の延長線よりやや上で、地山面に致達し、消えている。

墳丘南側では非常に直線的であり、溝の平面形は、弓状を呈する。最大幅はほぼ墳丘南側の中央にあり、約1.1mを測る。この付近では断面がV字状を呈し、深さは約0.6mを測る。他の7・8号墳の同種の溝が断面皿状、あるいはU字状であったのとは異なっている。

溝の南側法面は整地の際のカット面でもあるが、他の2基の古墳と比べると、カット面は最も狭く、単に溝の法面としてカットされたようにも見える。墳丘側は地山面を掘り込み、墳丘の南半基底を作り出している。

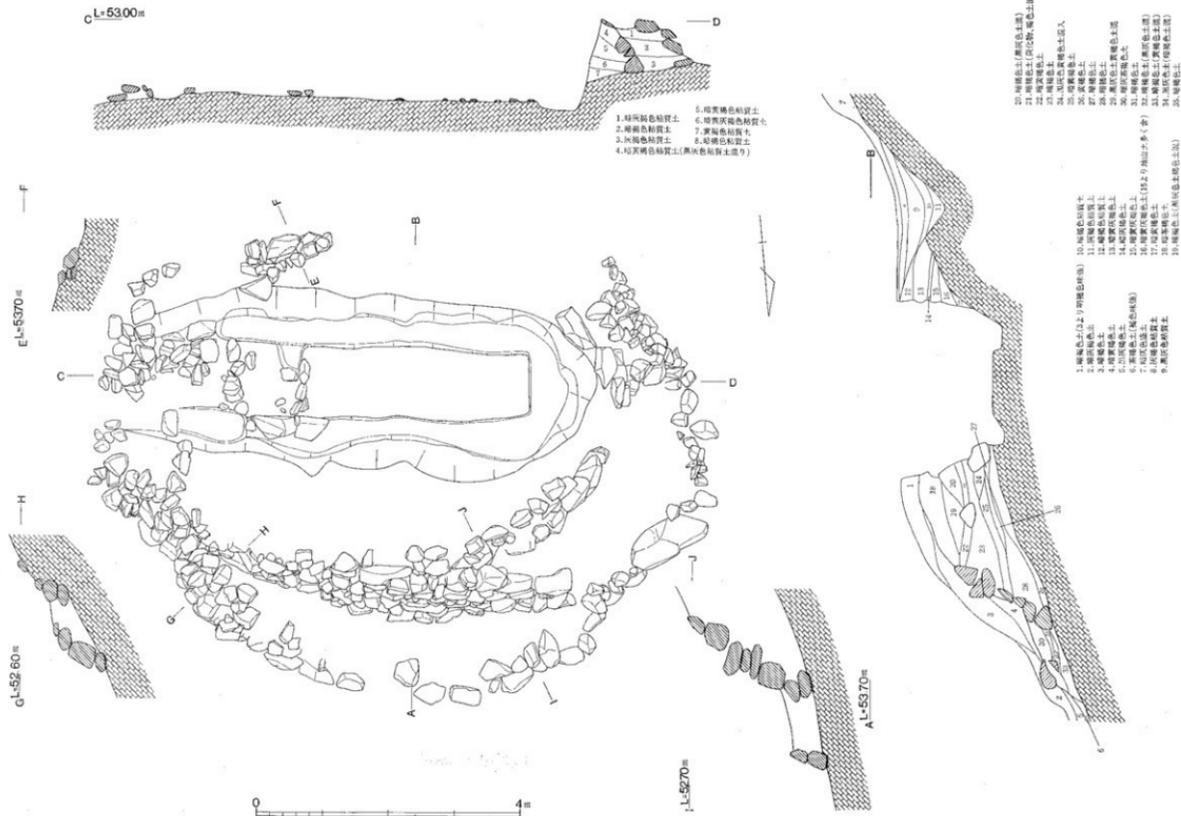
この溝の直線部分は、ほぼ石室の主軸と並行しており、溝を掘り込むことによって墳丘基底を創出するなど、一連の古墳築造工程が無作為とは考え難い点がある。溝を掘る段階で、すでに墳丘規模、石室の規模、向きなどが想定されていたものと考えられる。

## (3) 墳丘と列石(第25図、図版第22・28・24—上・下、図版第21—下)

整地、溝の掘り割り、墳丘南半の基底の創出、石室の構築とともに墳丘を積み上げている。この墳丘封土の積み上げる際に、墳丘南側を除き、列石を構築している。

墳丘封土はまず、石室の基底の石を据えた後に、斜面下方側は基底の石の高さと思われる位置まで、旧表土を残したまま暗褐色粘質土等を積み上げている。この段階で封土裾部に、列石を石垣状に積み上げている。これを列石1とする。この列石1は石室の北壁及び墳丘南側の溝とほぼ並行して直線的であり、石室の奥壁下方付近から、羨道中央の下方までの間に構築している。全長約6mを測り、高さ約1.8m、4～6段に積み上げている。斜面上方側は石室構築のための掘り方と基底の石の間を版築状に積み上げている。

この後に、石室の構築と並行して封土を積み、積み上げた封土裾部に列石を繞らす。これを列石2とする。列石2は2～4段で、最高約80cmの高さに積み上げられ、墳丘南側の溝が直線的で、断面V字をなす溝中央付近には認められず、築造当時から存在しなかったものと思われる。また埋葬施設が盗掘を受けているため、埋葬施設上あるいは奥壁の背後で途切れた状態となっている。しかし奥壁背



第25回 墳丘平面及断面図

後の西側部分は、元来は連続していたものと思われ、盗掘の際に壊されたものと思われる。また墳丘北側中央付近では、列石1上に積み上げられており、ここでは、列石1・2合わせて約1.6mと高く、石垣状となっている。また列石1との合流点から東は、列石2と列石1の上段が崩壊したものと考えられ、列石2は途切れている。

このように列石1・2はあくまで石室の構築と併行し、積み上げた封土の保護、あるいは石室構築の方法等との関連が求められる。しかし墳丘裾部の列石を繞らす際には、石室の構築、封土の積み上げは終了し、封土裾部に列石を回した墳丘が築造されていたと思われる。したがって、一応古墳としての体裁は整えていたと思われる。しかしその平面形は胴の張った隅丸方形を呈し、北側には約1.6m以上の石垣状となっており、墳丘は不安定なものだったと考える。

このため、石室前面、奥壁背後、斜面下方側の裾部に再度列石を繞している。これを列石3とする。斜面下方側の列石は、列石1の両端から列石1の裾部を保護するように、列石1の前面に築かれている。また石室前面、奥壁背後の裾部列石は、列石1と継続するように築かれているが、列石1とは途切れており、斜面下方側の列石に連続している。斜面上方側では列石2を覆い、また石室前面の列石は閉塞石と重なるように構築されている。残存高は最高80cmを測る。

このようにして構築された墳丘は、斜面と並行して長く、長径約9.4m・短径約7.7mの楕円形を呈し、斜面下方側で約3.0m・上方側で約1.2mの高さを測る。

#### (4) 埋葬施設 (第26図、図版第25上・下)

すでに述べたように、墳丘中央にコの字形に大きく盗掘坑があき、その形状から埋葬施設は横穴式石室と考えられた。

調査の結果、石室は北側壁の一部と南側壁の羨門付近を残す他は、石材はすでに残っていなかった。幸にも石の抜き取り跡と思われる溝がコの字形に検出され、その形状から石室の規模をある程度知ることができた。

石室は全長約5.5m、幅約1mを測り、南側壁の東端付近には石の抜き取り跡が中央に向かって突き出した部分があり、袖石が存在した可能性もある。ここに袖石が据えられていたものと考え、この石室は玄室長約3.4m、幅約1.1m、羨道部長約2.1m、幅約1mと考えられ、玄室と羨道部を分ける袖石付近で幅約85cmであったと推測される。袖石の抜き取り跡付近から東にかけて、床面上に20cm～30cm大の石が認められ、閉塞石の一部と考えられる。羨門付近では閉塞石に列石3が被せられている。袖石の抜き取り跡付近には、床面を区切るように一列に配置された石が存在した、閉塞石の根石あるいは仕切り石にあたるものかもしれない。

玄室の床面上には、奥壁から約1.9mの範囲に、約20cm大までの山石が認められる。しかし玄室の中央から羨道よりにかけては、敷石は部分的に残るだけであった。この付近からも土器類が出土し、敷石は、追葬の際に運び出されたものかと思われる。

#### (5) 遺物の出土状況 (26図、図版第26上・下)

本墳では石室内、馬蹄形溝内、及び墳丘上から遺物が出土している。

a. 石室内の遺物出土状況 (26図  
図版第26—上・下)

石室内の遺物は、3群に分けることができる。石室奥壁付近の一群と、玄室中央の南側壁付近の一群、さらに玄室の羨道部より北側壁の一群である。

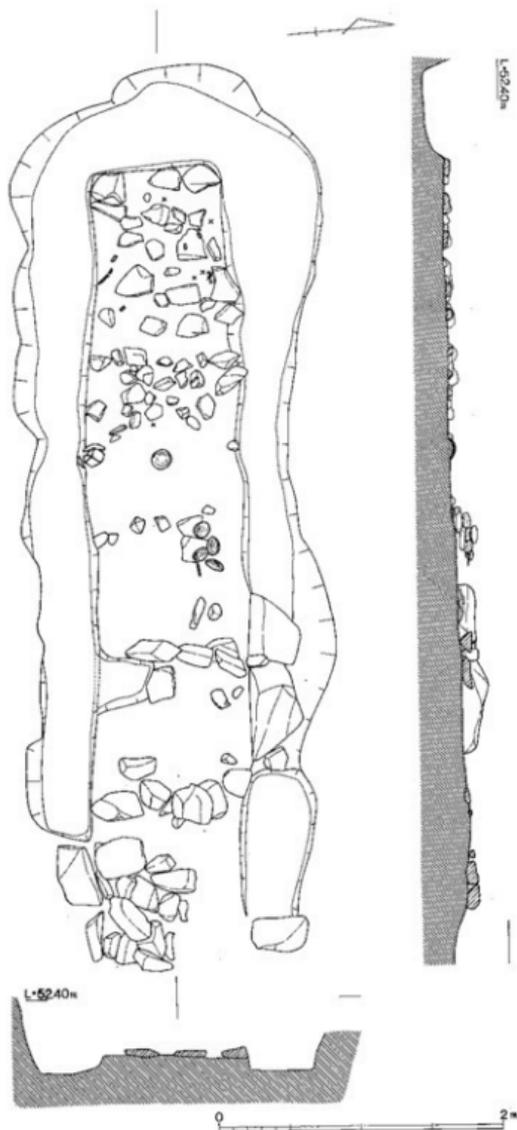
奥壁付近の一群は、管玉・小玉・丸玉・切子玉の玉類と、刃子で構成される。管玉は奥壁付近の床面ほぼ全体に散らばり、敷石上及び敷石の間から計8個が出土している。北側壁付近からはガラス小玉、丸玉が敷石の間に転がり落ちた状態で出土している。奥壁中央の壁際からは切子玉が1個出土している。

玄室中央の一群は杯身、杯蓋、切子玉各1点なる。杯身は裏返しになっており、杯蓋は床面から石の抜き取り跡に落ち込むように斜めになり、壊れて出土している。

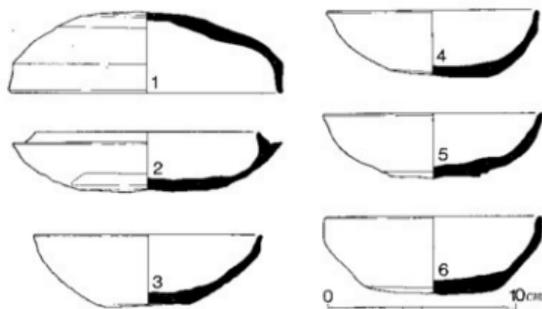
羨道部寄りの玄室内床面上の一群は、床面から約4~5cm浮き、2個の石の上から出土している。杯身4個、刀子1本からなる一群である。杯身4点は斜めになっており、刀子が乗った状態で出土している。出土遺物の中では最も新しい型式の一群である。

b. 溝内遺物出土状況

石室羨門部の斜面上方側、つまり山側から多くの遺物が出土している。杯身3個体、杯蓋2個体、高杯、広口壺、甕各1個体の須恵器類と、



第26図 石室実測図



第27図 石室内出土遺物実測図（須恵器）

遺物は、元来石室内に副葬されたもので、追葬の際に運び出され、放棄されたものであろう。

美門の山側の溝底から遺物を出土するという状況は、7・8号墳と共通の現象である。

墳丘上から出土する遺物は、列石の上に乗った状態であったり、列石上から墳丘外に転落した状態で出土している。おそらく、盗掘の際に放り出され、本来の位置を失っているものと思われる。

## （6）遺物

### a. 石室内出土遺物

石室内からは、須恵器杯身5個体、杯蓋1個体の土器類、ガラス玉11個、管玉8個、丸玉1個、切子玉2個の玉類、及び刀子2本の鉄製品が出土している。

須恵器類（第27図、図版第28—上）

**杯蓋** 1は杯蓋である。体部と口縁部との境界は僅かに稜をなす。口縁部下半が外反して端部は丸い。色調は青灰色を呈し、胎土はやや粗い。

**杯身** 計4個体が出土しているが、玄室中央付近から出土した2と、玄室の羨道部よりから出土した3～6とでは、形態が異なる。

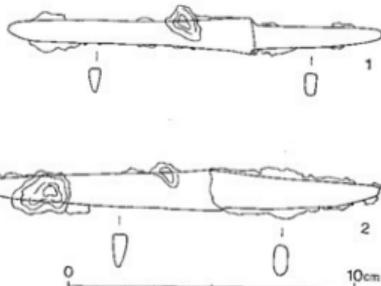
2はほぼ水平に伸びる受部に、大きく内傾し、端部が僅かに上方へちあがる口縁部をもつ。全体に肉厚である。

3～6は受部を持たない杯身である。底部はヘラ切り未調整であり、3・6の底部には僅かに赤色顔料が付着している。大きく鏡けひずむ。

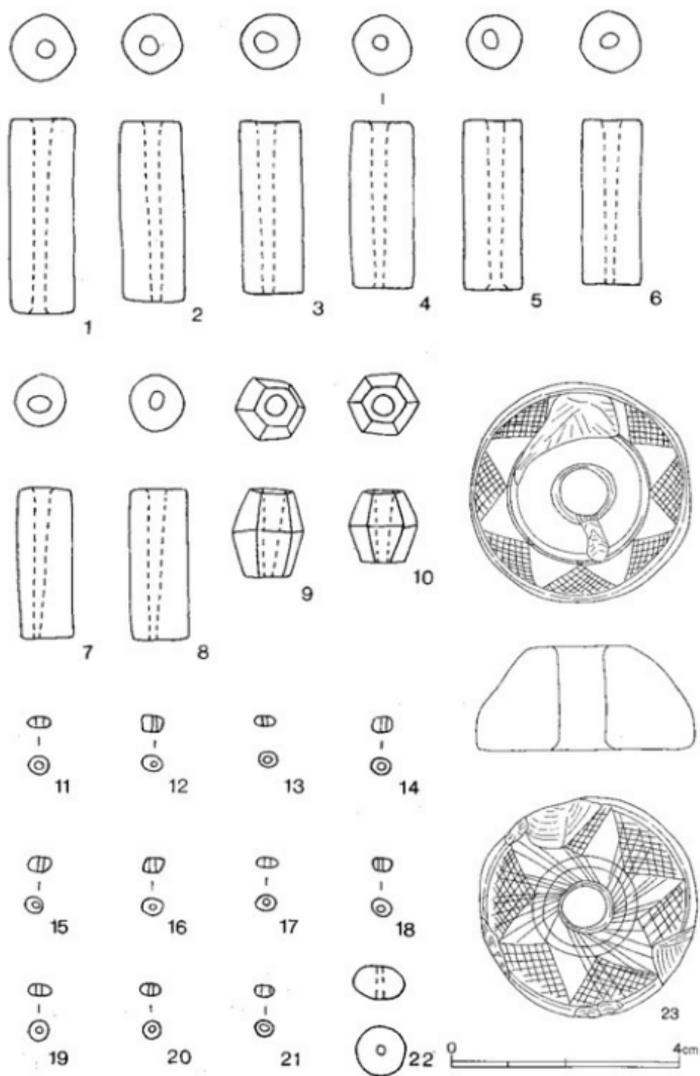
鉄製品（第28図、図版第29—下）

**刀子** 玄室奥壁付近から2が出土し、羨道部に近い玄室内から1が出土している。

1は両関の刀子である。よく使用されたためか、



第28図 石室内出土遺物実測図（鉄製品）



第29図 石室内出土遺物実測図（玉類及び筋垂車）

刃部の中央が内彎している。

2は現状は刃関だけが確認できるが、おそらく、背にも関をもつ両関のものと思われる。

#### 玉 類 (第29図、図版第29—上)

管 玉 1～8は碧玉製の管玉である。最大のものは約3.39cm、最小のもので約2.70cmを測る。色調は深緑色を呈し、かすかに縞状に色の薄い部分がある。全体に非常に良質な石材を利用している。また、両端面は孔を中心に、約 $\frac{1}{2}$ の範囲が摩耗している。全て一方向から孔をあけている。

ガラス小玉 11個出土している。1～6は黄色、7～11は深いコバルトブルーを呈する。大きなもので約3.9mm、小さいものは2.7mmと非常に小さく、重量も約0.02g測る。

1～6には形のいびつなものが多く、7～11には形は整っているが、バリを残す。

丸 玉 22はガラス製の丸玉である。やや両面が扁平になった球形を呈し、色調はコバルトブルーを呈する。

切子玉 2個出土している。いずれも水晶製で、半透明である。中央に稜を持つようにカットしたもので、いずれも六面体をなす。孔は片側から穿つ。

#### b. 溝内出土遺物

##### 須 恵 器 類 (第30図、図版第30)

杯 蓋 1・2の2個体があり、体部が内彎して口縁部となり、口縁部と体部を分けるものは幅が広く、浅い凹線状のものである。口縁端部は丸い。2はおそらく、石室内出土遺物の2の蓋と思われる。1は3の杯身とセットになると思われる。

杯 身 3～5の3個体あり、受部を持つ3・4と持たない5とに分けられる。

3・4は、石室内から出土した2によく似た器形を呈し、調整方法も同一である。受部から短く、内傾度の大きい口縁がたちあがり、端部をややつまみあげている。底部の内面はほぼ平らである。

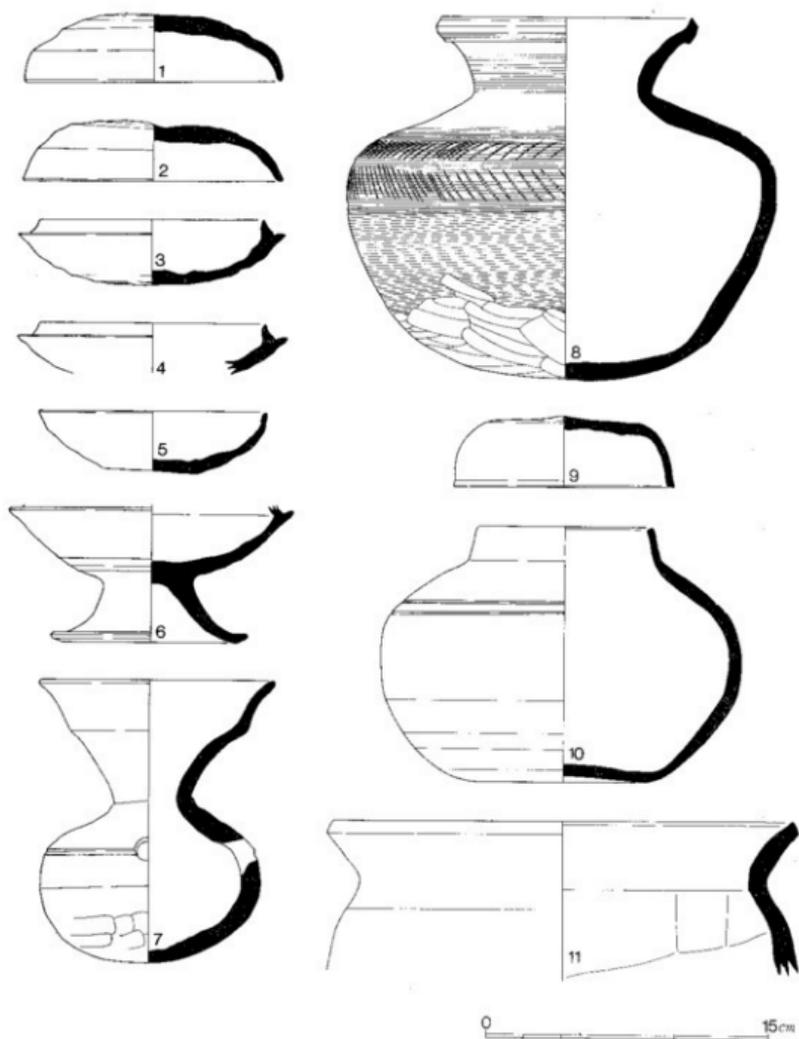
5は石室内から出土した3～6と器形、調整がよく似ている。底部はヘラ切り未調整で、大きく挽けひずむ。

高 杯 6は口縁端部を欠く。基部が太く、大きくラップ状に開く脚部に、受部が外上方に伸び、口縁部下半が大きく内傾した杯部がつく。脚部はやや外方へ反り返り、端部は丸い。杯部の体部下半に回転へら削りを行っている

踵 7は口縁の $\frac{1}{2}$ を欠く。ほぼ球状の体部に基部の細い頸部がつく。頸部は外反して鈍い段をなし、口縁部に続く。口縁部は外反して端部は丸い。体部には最大径付近に1条の凹線とかすかな稜を有するが、文様はない。体部下半に静止へら削りが認められる。

広口壺 3は扁平に近い底部をもち、最大径を体部の $\frac{1}{3}$ 上位にもつ体部に、外反する頸部がつく。口縁部は中央に稜をもち、端部が短くたちあがる。体部最大径付近から肩部にかけて、凹線で区画された2区画の文様帯がある。この文様帯の中に櫛による列点文を施す。口縁部下端、頸部、肩部から体部下半にカキ目調整がみられ、体部下半から底部にかけて、カキ目調整後にへら削り調整を行っている。

##### 土 師 器 (第30図)



第30图 沟内出土器物实测图（9～11土部器）

有蓋短頸壺 9は10の蓋で、天井部は扁平であり、やや外反する口縁部の下端は短く外反する。口縁端部は凹面を呈する。

2は肩部から内傾する口縁がたちあがる。体部下半は回転ヘラ削りを施し、肩部と胴部の境界付近に2条の沈線を繞す。底部は中央がやや凹む。

9・10ともに調整方法、器形ともに須恵器と同一であり、おそらく須恵器を模倣したものである。

壺 11は口径約24.5cmを測り、くの字に外反した口縁部の端部をつまみあげている。器表内面ともに風化が激しいが、内面はヘラ削りをしている。

### c. 墳丘上出土遺物 (第31図、図版第28—下)

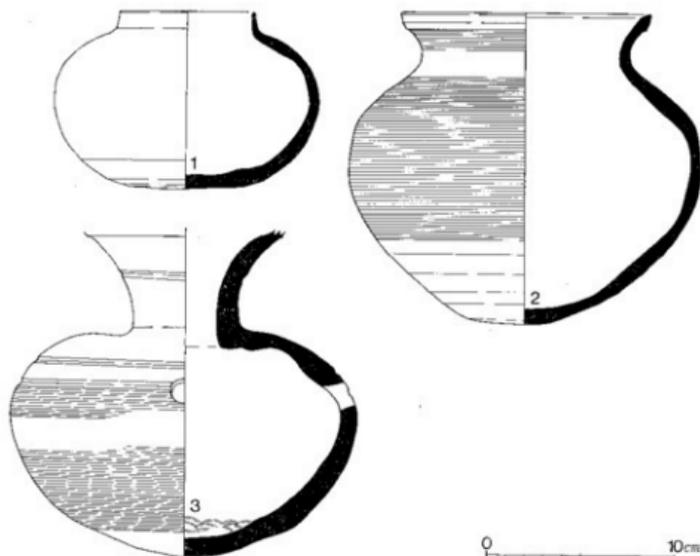
墳丘上からは短頸壺・壺・甕の須恵器類が各1個体出土している。いずれも破損している。

#### 須 恵 器 類

短頸壺 1は短頸壺であり、濃青灰色を呈し胎土はやや粗い。肩部に重ね焼の痕跡が残っていることから、蓋をもつものと思われる。

壺 2は壺であり、色調は乳灰色を呈す。焼成は不良であり、胎土はやや粗い。体部上半とカキ目調整し、体部下半は右回りのヘラ削りで調整している。

甕 肩部が強く張り、扁平な感を受ける体部に、基部の細い頸部をもつ大形の甕である。体部最大径付近に凹線による区画をもつが、文様はみられない。頸部から体部最大径付近まで全体に軸垂れしており、体部上半の調整は不明である。底部には焼成時に他の土器片が付着している。



第31図 墳丘上出土遺物実測図

## 小 結

以上が9号墳の概要である。これを要約すると標高約49mから約53mの間に築かれ、東西約9.4m、南北約7.7mのはぼ楕円形の墳丘をもつ。墳丘は封土の積み上げと並行して、2段の列石を築き、最後に墳形を整えるためか、あるいは列石・墳丘保護のためか、裾部に列石を回す。そこで、できあがった墳丘は3段に列石を回し、階段状を呈していたものと思われる。埋葬施設は墳丘中央南寄りに設けられ、横穴式石室と考えられるが、盗掘、採石のため全壊していた。墳丘の両側には幅約2mの溝を掘らし、溝は断面V字形を呈する。地山を掘り込み、墳丘の基底を溝とともに削り出している。出土遺物は須恵器類、鉄器類、玉類である。

さて、本墳の築造年代については、石室内及び溝内出土の遺物に求められる。石室内の遺物は土器類が少なく、5個体であるが、それぞれ時期差をもつと考えられる。石室内中央付近から出土した杯蓋はTK43型式、杯身はTK209型式と並行期と考えられる。羨道部よりの支室内から出土した杯身はTK217型式と並行期に比定できる。したがって、6世紀の後半に築造され、6世紀終末から7世紀初頭にかけての時期に一度追葬がされ、7世紀前半に最後の追葬がされて、その後放棄されたものと考えられる。

## Ⅳ 夕 垣 遺 跡

### 1 位 置

夕垣古墳群から南に直線距離で約500m離れた尾根上に位置する。

夕垣7～9号墳の発見者である高松龍輝氏から、7～9号墳から、送電塔の位置する尾根に至る間には、尾根上に地山整形で墳丘を削り出した古墳が存在する可能性がある、という指摘を受けた。そこでこの間の尾根上に幅1mのトレンチを設定し、調査を実施したところ、送電線の鉄塔が位置する尾根上に、柱穴状のピットが確認された。このため急傾尾根上を全面発掘した。

遺跡は舞狂山から、円山川と八木川の合流点に向かって張り出した尾根の上に位置する。

夕垣古墳群と同じように、眼前を円山川と八木川が合流して北流している。この円山川に尾根裾が絶えず洗われて急傾斜となっている。

尾根上は急な傾斜で、幅の狭いやせた尾根であり、僅かに柱穴状遺構が検出された区域が緩やかな傾斜の平坦地となっている。この付近で標高約58.5mを測り、西端は送電線の鉄塔が立ち、尾根が削られている。この削平した法面にも柱穴状遺構が観察された。

### 2 土層の堆積状況

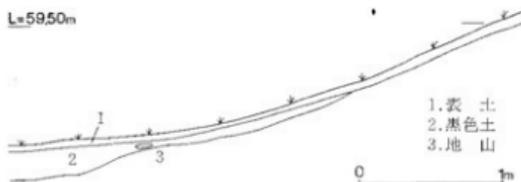
#### (1) 土層の堆積状況 (第32図、図版第31—上)

遺構は、巾約8mの尾根の先端で検出された。尾根上の急な傾斜面が、遺構の存在した平坦地へ変化する傾斜変換点にあたり、尾根上ではあるが、若干の土層の堆積が認められた。

土層の堆積状況は基本的には、表土、暗褐色粘質土、黒灰色粘質土、黄褐色粘質土(地山)である。黒灰色粘質土は平坦面全体にみられるものではなく、平坦面と急な傾斜面との変換点にだけ確認される土層である。また黄褐色粘土は古墳群の基底となる土層と変りない。

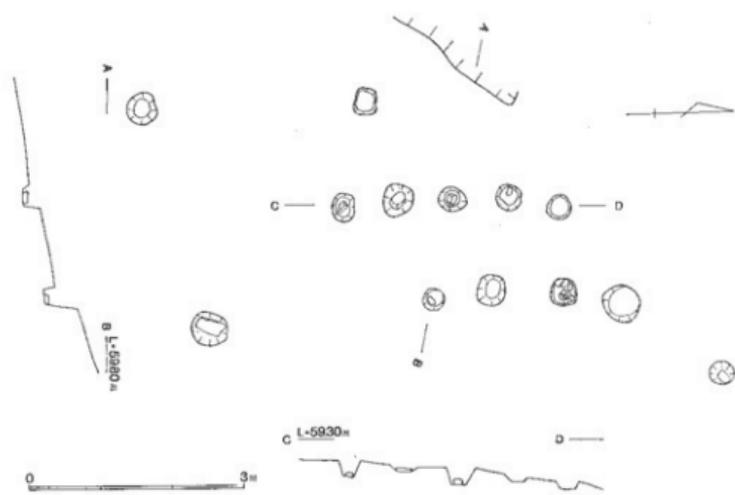
### 3 遺 構 (第33図、図版第31—下)

遺構としては、柱穴状のピットが13個検出できた。径約25cm～60cm、深さ8cm～50cmを測る。ピットの中には15cmの石を据えたもの、



第32図 土層堆積状況実測図

あるいは、5cm大の小石を敷いて、根石としたものが認められた。また柱穴の埋土には焼土を含むものも確認されている。こうした柱穴状遺構の存在する平坦面にも、焼土が確認



第33図 遺構実測図

されている。

何らの出土遺物もないため、築造された時期も不明であり、また性格についても不明である。

## Ⅳ ま と め

### 1. 7号墳の埋葬施設について

以上が今回発掘調査を実施した4基の古墳の調査結果である。しかし7号墳の埋葬施設については横穴式石室なのか竪穴式石室になるのか、調査では決定できなかった。このため但馬地方で似た埋葬施設をもつ古墳と比較することで、両者のいずれになるのか考えてみたい。

7号墳の石室は現存長約4.7m・幅約1.3mと、幅に対して約3.6倍の長さをもつ、狭長なプランの石室である。また石室基底の石を立て、木口積みで壁を築き、背後に控え積みをするなど、石室平面プラン、構築法とも竪穴式石室と共通する特徴をもつ。ところが但馬において竪穴式石室を埋葬施設とする6世紀代の古墳は、和田山町秋葉山墳墓群の第3号墳が知られているだけである。秋葉山第3号墳の竪穴式石室は全長約2.83m、幅約0.65m～0.6mと小規模なものである。この他4・5世紀代の竪穴式石室としては豊岡市森尾古墳<sup>113</sup>、山東町柿坪中山古墳群中の第1号墳、第2号墳、第4号墳、などの中にみられる。しかしこれらの竪穴式石室も、全長3mを超すものはなく、いずれも小規模なものである。以上の類例からすれば、7号墳の埋葬施設を竪穴式石室と考えると、但馬においては最大の竪穴式石室となる。墳丘規模が約13mと小規模な7号墳が、但馬最大の竪穴式石室を有することとなり、不自然さを感じ得ない。

そこで本墳の石室を玄室と考え、壁を木口積みで構築し、狭長な玄室をもつ横穴式石室の例をみてみたい。この例として上げられる古墳は少なく、養父町観音塚古墳<sup>115</sup>、豊岡市見手山古墳<sup>116</sup>の2例が知られるにすぎない。観音塚古墳は長さ約5.4m、幅1.2m、壁を木口積みで積み上げた狭長な石室である。羨道部が壊されてしまっていたため、横穴式石室、竪穴式石室の両方の可能性を追及しながら、古式の横穴式石室とされている。また竪穴系横口式石室の可能性を強く残すともいわれ、築造年代は6世紀前半に求められている。豊岡市見手山古墳は全長約34mの前方後円墳であり、後円部に埋葬施設が設けられている。埋葬施設は玄室長4m、幅1.28mの石室が設けられ、狭長な玄室に羨道部が申し訳程度に付けられた横穴式石室とされ、築造年代は6世紀中葉に求められている。

以上の2例にすぎないが、狭長な玄室をもつ横穴式石室は、見手山古墳の6世紀中葉には確実に出現している。観音塚古墳を横穴式石室とみるなら、狭長な玄室、木口積みによる壁の構築という石室は、6世紀前半に出現し、6世紀前半まで続いていたものと考えられる。

以上の類例からみれば、7号墳の石室は規模から考えて後者の横穴式石室になる可能性が高いものとする。また墳丘周辺の遺物、石室内の遺物の示す6世紀前半～中葉のいずれに築造されたとしても時期的な問題はない。しかしながら、本墳に最も類似した観音塚古墳を横穴式石室とするのに対し、疑問が残されており、7号墳を横穴式石室と連断はできない。ただ7号墳も、横穴式石室を埋葬施設

とする8・9号墳と同様の構築方法をとる。また極めて消極的な理由ではあるが、8・9号墳でみられた羨道入口の斜面上方側の溝内から遺物を出土するという現象が7号墳においてもみられることなどから、7号墳の埋葬施設を横穴式石室と考えておきたい。

さらに観音塚古墳、見手山古墳が、それぞれの地域における有力な古墳であると考えられているのに対し、7号墳は極めて小規模な古墳であり、群集墳の中の1基に過ぎない。これは、古式の横穴式石室が有力古墳、盟主的な古墳に限って受容されたものではなく、それぞれの被葬者の実情、地域の実情に合わせて採用されたことを示すものと思われる。

## 2. 群集墳の構成について

4基の古墳のそれぞれの築造年代については、各項で記した通りであり、第4支群の7号墳は6世紀前半から中葉にかけての時期に築造され、8・9号墳は6世紀後半に築造されたものと思われる。したがって第4支群は7号墳、8・9号墳の順に、谷口に近いものから築造されたものと思われ、7号墳の放棄と8・9号墳の築造とは、土器形式に断絶がみられないことから、連続して行われた可能性が高い。しかし8・9号墳が築造されて以後、新たに古墳が築造されることはなく、8・9号墳への追葬という埋葬方法を取り、7世紀前半に両墳とも最後の追葬が行なわれて、以後第4支群は放棄されてしまったものと思われる。

ただ、8・9号墳はほぼ同時に築造され、ほぼ同時に追葬がされている。したがって同一グループによる築造と考えるよりも、2グループによる築造を考えた方が妥当と思われる。位置から考えれば、7・9号墳は同一グループによる築造と思われ、8号墳は他のグループによるものと思われる。4基で構成される第4支群の内、6号墳については今回調査を実施しなかったため、その内容、築造年代等については不明である。しかし7号墳の被葬者グループが谷口から築造していることからすれば、6号墳は7号墳と相前後して築造された可能性がある。したがって6号墳は8号墳より先行して築かれ、6号墳の被葬者グループが8号墳を築造した可能性が高い。したがって第4支群は6・8号墳、7・9号墳の2単位群により構成されている可能性が高い。

第3支群は6世紀前半から中葉にかけての時期に築造され、3号墳単独で構成された支群である。立地からみれば第4支群は谷に面した斜面に築造されたものであるのに対し、第3支群は第4支群を見下ろすように、尾根先端という格好の位置を占地している。しかし3号墳とはほぼ同時期か、あるいは若干先行して築造されたと思われる第4支群の7号墳が古式の横穴式石室を埋葬施設とするなど、新しい築造方法を導入しているのに対し、3号墳は尾根を削り出して墳丘とし、埋葬施設を大形の箱式石棺とするなど、前代以来の築造方法で築いている。そして尾根上には古墳を築造できる空間が残されているにもかかわらず、新たに古墳を築造することなく、3号墳1基の築造で終わっている。

このように第3・4支群は、ほぼ同時か、若干第4支群が先行して形成され始める。しかし前代以来の埋葬形態をもつ第3支群は、1基の古墳を築造するだけで終わるのに対し、横穴式石室という新しい埋葬施設を6世紀後半に導入した第4支群は、7世紀前半まで追葬という形態をとりながらも引

き継がれている。

夕垣古墳群の中で第2支群は横穴式石室を埋葬施設とする古墳を含まず、第3支群と似通った様相をもつ。しかし第1支群は、埋葬施設を箱式石棺か木棺としたものと、横穴式石室としたものが混在している。また第5支群は横穴式石室としたものだけで構成されている。今回の調査結果から考えて、群中に3号墳と似た古墳を含む支群は、6世紀前半から中葉にかけて古墳の築造が開始されたものと思われる。また横穴式石室を埋葬施設とする古墳を群中に含む支群は、やや遅れて、6世紀後半に古墳の築造が開始されたものと思われる。

したがって、夕垣古墳群は、まず第1～第4支群に6世紀前半～中葉頃から古墳の築造が始まり、第5支群には6世紀後半から古墳の築造が開始されたものと思われる。また第1・第5支群は、第4支群と同様に、追葬という埋葬形態をとりながらも、7世紀前半まで引き継がれている可能性が高い。しかし第2・第3支群は、古墳群を形成した集団が横穴式石室を採用する直前か、ほぼ同時期に古墳の築造が終るようである。

このように夕垣古墳群という一つの群集墳であっても、古墳の築造が開始される時期、古墳の築造が終る時期、あるいは古墳の内容に差があるものと思われ、小集団間において優劣の差が認められる。

### 3. ま と め

但馬には、豊岡・出石を中心とする地域と、和田山盆地を中心とする地域の、二つの中心となる古墳地帯があるといわれ、この二地域が、古墳時代前・中期を通じて、常に主導的な役割を果たして来たものと思われる。しかし後期には、和田山盆地を中心とする地域が、小盛山古墳、船之宮古墳、春日古墳、箭江古墳等と、前・中期とは多少地域を変えながらも、首長墓と思われる古墳がみられるのに対し、豊岡・出石地域には顕著な古墳がみられなくなる。特に但馬地方に横穴式石室が導入されたといわれる6世紀後半以後は、見るべき古墳はなく、6世紀中葉の前方後円墳である見手山古墳を最後に、首長墓としての古墳はみられなくなるといわれている。

ところがこの時期になると、前・中期にはほとんど古墳がみられなかった二つの中心地帯の周辺に、爆発的な勢いで古墳が築造されている。特に両中心地帯の間に挟まれていた円山川中流域には、約300基以上の古墳が群集して築造されており、養父町の禁裡塚古墳、日高町の楯縫古墳等のように、但馬地方を代表する巨石横穴石室墳も含まれ、有力な集団が成立したようである。しかし禁裡塚古墳を含む大蔵群集墳・楯縫古墳を含む楯縫古墳群以外は、本古墳群のように小規模な群集墳である。

これらの群集墳にはかつて調査が実施された例は皆無に近い<sup>註16</sup>。そうした中で、僅かに知られている出土遺物から、これらの群集墳は6世紀後半以後に築造されたものといわれてきた<sup>註17</sup>。しかし今回の調査によって、これらの群集墳の中にも、6世紀前半～中葉にかけての時期に、古墳の築造が開始されているものも含まれていることが判明した。7号墳を含む第4支群のように、本格的な横穴式石室が但馬地方に導入される前に、すでに群構成が始まるものもあることが明らかとなった訳である。また

尾根を整形、削り出して墳丘とする、伝統的な築造方法で築いた3号墳が、群を形成することなく、単独で位置するという興味深い事実も判明した。

3号墳のような埋葬方法の古墳は、但馬においては数外く知られ、豊岡市の妙楽寺墳墓群<sup>古18</sup>、山東町の中山墳墓群<sup>古19</sup>のように弥生時代後期からみられるのである。これらは尾根上に連なって築かれているが、しかしこの埋葬形態をとる墳墓群あるいは古墳群は、豊岡市七ヶ塚古墳群<sup>古20</sup>、下陰古墳群<sup>古21</sup>、鎌田古墳群<sup>古22</sup>、北浦古墳群<sup>古23</sup>のように、早いものは6世紀初頭から前半に古墳の築造が終る。遅いものでも豊岡市立石古墳群<sup>古24</sup>、見手山古墳群<sup>古25</sup>、矢谷古墳群<sup>古26</sup>、和田山町秋葉山墳墓群<sup>古27</sup>のように、6世紀中葉には古墳の築造の終るものが多いようである。

横穴式石室の群集墳は数多くみられるが、比較的 content の知られているものは、城崎町二見谷古墳群<sup>古28</sup>、日高町橋縫古墳群<sup>古29</sup>・八鹿町こおとし3号墳<sup>古30</sup>、米里古墳群<sup>古31</sup>、養父町人藪群集墳<sup>古32</sup>、沢原古墳群<sup>古33</sup>等があげられる。これらの多くは6世紀後半から、古墳の築造が開始されたものと思われる。

ところが本古墳群は、7号墳のように6世紀前半の置主墳に採用されたといわれる、古式の横穴式石室を埋葬施設としたり、3号墳のように伝統的な埋葬方法を取りながらも、6世紀前半から中葉という時期に、新しい埋葬形態である群集墳として、逸早く形成が開始されるのである。他方、本古墳群とはほぼ同時期か相前後する時期に形成されたと思われる、秋葉山3～6号墳・立石古墳群・見手山古墳群等の古い埋葬形態をとる古墳群は、いずれも群集墳を形成することなく、6世紀後半には古墳の築造が途絶えている。

このように但馬においては、前代以来の埋葬形態をとる古墳群は、遅くとも6世紀中葉に古墳の築造が終り、かわって、新しい埋葬形態である横穴式石室墳を中心とした群集墳の形成が、早いものは6世紀前半から中葉、大半は6世紀後半に開始されるのである。

しかしこの埋葬形態の変遷は、決してスムーズに変化したものではなく、その過程として、秋葉山3～6号墳・立石古墳群・見手山古墳群等のように、早い群集墳とはほぼ同時期に古墳群の形成を開始しながら、群集墳を形成することなく終る古墳群が存在するものと思われる。第2・第3支群がこうした古墳群にあたるものと考えられる。

この過程を経て、新しい埋葬形態である群集墳が、古い埋葬形態のみられなかった地域にも出現するものと思われる。多くのものは移行過程とも、古い埋葬形態とも断層をもって出現するものと思われるが、早く形成を開始する群集墳は移行過程から連続するものと考えられる。

埋葬形態を政治的・イデオロギー的に把えるならば、群集墳の出現は社会構成上の変化を具象しているものと考えられ、但馬地方においては、6世紀後半にはこうした変化が確立したものと思われる。しかしこの変化は突発的に確立するものではなく、その前段階として、6世紀前半～中葉における古い埋葬形態の消滅、移行過程とした古墳群の形成・消滅という背景を通して、漸的に確立するものと思われる。

- 注1 藤井祐介他、『秋葉山墳墓群』1978
- 注2 他に御名谷古墳群中にもみられるようであるが、時期等の詳細が不明なため割愛した。  
但馬考古学研究会「但馬の主要な古墳」『よみがえる古代の但馬』1981
- 注3 但馬考古学研究会「但馬の主要な古墳」『よみがえる古代の但馬』1981
- 注4 榎本誠一他『柿坪中山古墳群』1・2 1975・1978
- 注5 池田正男他『美父・観音塚古墳』1980
- 注6 榎本誠一、小川良大他「見手山古墳調査概要」『但馬妙楽寺遺跡群』1975
- 注7 注5と同じ
- 注8 榎本誠一他『城の山古墳』1972
- 注9 武庫川女子大学考古学研究会「岡田古墳群測量報告」1974
- 注10 榎本誠一「兵庫県下における前方後円墳」兵庫県埋蔵文化財調査集報1 2 1932
- 注11 榎本誠一「上山5号墳・火谷2号墳」秋葉山墳墓群』1978
- 注12 榎本誠一「兵庫県和田山町鶴江出土の頭輪の大刀」『古吉代学研究』67 1973
- 注13 注6と同じ
- 注14 武庫川女子大学考古学研究会「但馬・大藪古墳群」1978
- 注15 榎本誠一他『日高町史』資料編1980
- 注16 鎌木義昌氏によって、禁裡塚古墳の床面清掃調査が行われたことがある。
- 注17 注5と同じ  
潮崎誠、「円山川流域の群衆墳について」『よみがえる古代の但馬』
- 注18 注6と同じ
- 注19 注4と同じ
- 注20 瀬戸谷皓「七ツ塚古墳群」1978
- 注21 瀬戸谷皓「鎌田古墳群・下陰古墳群発掘調査報告」1976
- 注22 注21と同じ
- 注23 瀬戸谷皓「北浦古墳群」1980
- 注24 瀬戸谷皓「立石古墳群発掘調査報告」1『兵庫県埋蔵文化財調査集報』4 1979
- 注25 注6と同じ
- 注26 瀬戸谷皓他「豊岡市福田・矢谷古墳群発掘調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』2 1974
- 注27 注1と同じ
- 注28 榎本誠一他『二見谷古墳群』1975
- 注29 注5と同じ
- 注30 茨木信雄「一墳丘二石室の古墳をめぐる」『よみがえる古代の但馬』1981
- 注31 注14と同じ
- 注32 吉識雅仁・森内秀造「沢原5号墳・高田遺跡発掘調査報告書」1983

## 出土遺物観察表及び計測表

### 3号墳出土遺物

#### 須恵器

土器 番号	器形	法 (単位cm)		形態の特徴	手法の特徴	備考
		口径	器高			
1	蓋	9.9	3.9	扁平な天井部から外傾して直線的にのびる口縁部をもつ。 口縁端部は内傾する凹面をもつ。 天井部と口縁部の境界には鈍い稜をもち、凹線状を呈す。	天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	
2	タ	14.0	3.6	扁平な天井部を強く屈曲させ、口縁部とする。 口縁部はやや内彎し、口縁下端は外反する。 口縁端部は凹面を有する。	天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、右回転ヘラ削り	
3	タ	11.8	5.0	天井部がふくらみ、全体に丸い感がするが、口縁部と天井部をわける稜はもたない。 天井部のほぼ中心に、中のくぼんだつまみがつく。 口縁部はほぼ直下にのび、下端近くで外反して端面をもつ。	天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	
4	短頸壺	6.7	11.6	口縁部は長く、内傾し端部は丸い。体部は扁平であるが、体部最大径付近の屈曲は強くない。 体部最大径は体部の $\frac{1}{2}$ 上位付近。	体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	肩部に重ね焼の痕跡、3の蓋とセット。
5	タ	10	17.8	肩部の強く張った体部から、内傾してたちあがる口縁部を有す。 口縁端部は内傾して沈線を施す。	体部上半にカキ目調整。 体部下半の内面に静止ナデ。 体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	肩部に重ね焼の痕跡、2の蓋とセット。
6	甕	11.4	14.4	口頸部はラッパ状に外反し、口縁部と頸部の境界には端部の丸い稜を有す。 頸部はやや長くなっているが、基部は太い。 体部の最大径は体部の $\frac{1}{2}$ 程度位置にあり、肩部はあまり張らない。	体部の $\frac{1}{2}$ には極めて丁寧な左回転のヘラ削り。	

### 7号墳出土遺物

#### 石室内出土土器(須恵器)

土器 番号	器形	法 (単位cm)		形態の特徴	手法の特徴	備考
		口径	器高			
1	杯蓋	14.8	5.0	口縁部の下端は短く外反し、端面は内傾して浅く凹む。端部と、内面をわける稜線は明瞭である。 天井部と口縁部とわける明瞭な稜はなく凹線状となる。	底部内面中央に直線ナデがみられる。 天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、差な右回転ヘラ削り。	
2	杯身	13.1	5.0	口縁部はやや内傾してたちあがり端部は丸い。 受部はやや外上方にのび口縁部との境は、極めて細い沈線状となる。 底部は扁平である。	底部内面のほぼ全体に直線ナデをおこなう。 体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転の差なヘラ削り。	1とセットの可能性がある。

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
3	タ	12.6	4.7	口縁部は内傾して直線的にたちあがり、 端部は丸い。 受部は外上方にのび、上面には沈線状の ナデがみられる。 受部と口縁部との境は凹線状を呈する。	底部内面には同心円文が残 り、直線ナデをおこなっ ている。 体部器表のほぼ全面、左回 転ヘラ削り。	
4	タ	13.4	5.0	口縁部は内傾してたちあがり、端部の内 面には1条の沈線を施す。 受部と口縁部との境は凹線状となる。 底部は扁平である。	底部内面は直線ナデをおこ なっている。 体部器表の $\frac{2}{3}$ 、左回転ヘラ 削り。	$\frac{2}{3}$ 程度、釉付着 少し焼きひび む。

溝内出土土器（須恵器）

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	杯蓋	14.6	4.8	天井部と口縁部の境界の稜は鈍く、凹線 状となり、一部消えかかる。 外傾する口縁部の下端が短く外反し、端 部は凹面となり、内面と外面との境界に は稜を有する。	底部内面にクロスする直線 ナデ。 天井部器表の $\frac{2}{3}$ 、左回転ヘ ラ削り。 天井部内面に直線ナデ。	一部自然釉がか かる。
2	杯身	13.5	5.1	扁平な底部をもち、受部は外上方にの び、端部は丸い。 口縁部は下半は内傾するが、上半は屈曲 し直立に近くなる。 端部は丸い。	体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ 削り。 体部内面に直線ナデ。	
3	蓋	9.6	3.6	天井部は高いが、天井部と口縁部は区別 しにくい。 口縁部は端部近くで短く外反し、端部は 平直である。	天井部器表の $\frac{2}{3}$ 、左回転ヘ ラ削り。	4の蓋になる可 能性。
4	有蓋短頸壺	8.4	7.8	口縁部は内傾して直線的にたちあがり端 部は丸い。 肩部が強く張り全体に扁平な感じを受け る。	内面は丁寧な回転ナデを し、底部内面に同心円文を 残す。 最大口径やや下半から底部 にかけての胎上には砂粒を 多く含み、上半とは異なる。	肩部に重ね焼の 痕跡。
5	有蓋高杯	12.6	8.6 (3.7)	口縁部は大きく内傾し、口縁端部付近か ら上方にたちあがり、端部は丸い。 受部は外上方にのび端部は丸い。 脚基部は太く、裾部に向かってラッパ状に 開き、全体に台状を呈す。 脚端部は内面に突出している。	杯部の底部内面に同心円文 が残る。 杯部の底部外面に左回転ヘ ラ削り。 受部端部を上方に曲げて、 口縁部と接合している。	透孔については 残存部には認め られない。
6	高杯	6.0		基部は細く、脚部が大きく広がり、端 部は下方へ屈曲する。 透孔はもたない。	脚部全体にナデ。 杯部底部右回転ヘラ削り。	脚部8号墳、杯 部7号墳出土
7	中腹釜	23.5	残存 高 7.9	大きく外反する短い頸部をもち、頸部を 外方へ折り込み口縁部としている。 口縁部中央には、丸い稜線をもつ。 口縁部内面にナデによる浅い凹みが認め られる。	外反する口縁部を折り曲げ て口縁にしている。 肩部の内面には同心円の叩 き目文が、外面にはタテ方 向の平行叩き目文が残る。	口縁部内面には 一部に自然釉が 付着している。 8号墳からも同 一個体と思われる 破片が出土。

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
8	大罎	37.2	(残存高) 21.5	外反する頸部を上方に引き上げて口縁部とし、口縁端面はほぼ平坦であり、僅かに内面に突出する。 口縁部と頸部の境界は段を有し、段上には2条の凹線を施す。 頸部のほぼ中央から上には、1～2条の凹線文で区画された板状工具による列点文が施されている。	口頸部内面はココナゲ調整をし、外面はカキ目調整後に列点文凹線文を施す。 肩部外面はタテ方向の平行叩き目文を残す。	8号墳からも一部が出土。

#### 墳丘外採集土器 (須恵器)

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	杯蓋	14.3	4.8	天井部は扁平で、天井部と口縁部をわけける稜はにぶい。 口縁部は外彎気味に下ったのち、短く外反し、肩部は内傾する面を有する。 内外面とわけける境界には稜をもつ。	天井部内面に直線ナゲをクロスして、4～5回行っている。 天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	天井部の内外面ともに粘土の継ぎ目がみとめられる。
2	杯身	12.8	5.2	底部は丸く、受部は外上方にのびる。 口縁部は内傾してたちあがり、端部は丸い。	底部内面に直線ナゲとクロスして、それぞれ2～3回行っている。 体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	1とセット
3	杯蓋	16.1	5.1	天井部はやや扁平で、天井部と口縁部をわけける稜はにぶく、一部凹線状となる。 口縁部は外彎気味に下ったのち、短く外反し、端部は内傾して段を構成する。	天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	部分的に自然釉がかかり、焼成時のヒビ割れが内面にみられる。
4	杯身	14.4	5.0	全体に扁平で、受部は外上方にのびる。 口縁部は内傾してたちあがり、端部は丸い。	体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	3とセット
5	壺	12	1.2	やや扁平である。球形に近い胸部から短く外上方に開く口頸部を有し、口縁部と頸部の境界には実帯を有する。 最大胴部には、本の凹線で区画された櫛き波状文の文様帯があり、頸部にはさらに細い波状文を施す。	胴部の $\frac{1}{2}$ 程度をヘラ削りしているが、回転ヘラ削り後丁寧な静止ヘラ削りをしているため単位不明。 肩部は内側から指で押し出す。	肩部、口縁部内面に自然釉付着。 口縁部は $\frac{1}{2}$ 程度が残存。

#### 8号墳出土遺物

##### 石室内出土土器 (須恵器)

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	杯身	12.2	4.2	内傾する口縁部のたちあがりは低く、端部は丸い。 外上方にのびる、受部の端部も丸い。	底部内面はクロスする直線ナゲ。 体部の器表 $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	器面に自然釉付着。
2	タ	12.2	4.4	内傾してたちあがる口縁部は低く、端部は丸い。 受部は厚く、端部は丸い。	底部内面は直線ナゲ。 体部の器表 $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
3	碗	9.8	5.2	直立する体部が外上方にのびて口縁部となり、口縁端部は丸い。	底部はヘラ切り未調整。 体部、口縁部の内外面とも回転ナデ。 底部内面に直線ナデ。	焼ひずみが激しい、内外面ともに釉が付着。
4	タ	10.1	5.0	ほぼ体部は直立し、中央付近に一条の凹線を施す。 口縁端部は丸い。	底部の周囲に左回転ヘラ削り。	焼ひずみが激しい。 左底部だけ。
5	杯身	11.3	4.0	外上方に開く体部をやや外反気味にし、口縁部とする。 口縁端部は丸い。	底部ヘラ切り未調整。	焼ひずみが激しい。

溝内出土土器

(〇で囲ったものは土師器、他は須恵器)

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	杯蓋	15.0	4.1	扁平な天井部と外彎する口縁部とをわける境界には、稜凹線といったものはない。 口縁端部は丸い。	天井部内面に直線ナデを施すが難である。 天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	
2	タ	15.4	4.0	扁平な天井部で、口縁部との境界はない。 口縁端部は丸い。	天井部器表 $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。 天井部内面直線ナデ。	
3	杯身	13.0	4.3	内傾する口縁端部は丸い。 受部はやや外上方にのび、端部は丸い。 口縁部と受部の境界は凹線状を呈する。 受部上部に一条の沈線。	底部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。 底部内面直線ナデ。	底部に一直線のヘラ記号。
4	タ	13.5	4.5	内傾する口縁部は直線的にのび、端部は丸い。 受部は外上方にのび、口縁部との境界には深い沈線をもつ。	底部内面にクロスする直線ナデ。 体部器表の $\frac{1}{2}$ 、右回転ヘラ削り。	2とセットになる可能性。
5	タ	13.0	4.0	やや内傾してたちあがる口縁部の端部は丸い。 受部はやや外上方にのび端部は丸い。	体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。 底部内面直線ナデ。	器面全体に自然釉が付着し、焼成時に他の土器片が付着している。 底部にXのヘラ記号。
6	タ	13.2	4.2	内傾してたちあがる口縁部の端部は丸い。 受部は外上方にのび、受部下に凹線状を呈す。 底部は扁平。	体部器表の $\frac{1}{2}$ 、右回転ヘラ削り。 底部内面直線ナデ。	
7	タ	11.5	4.9	口縁部は内傾し、端部は丸い。 受部は外上方にのび、端部は丸い。 底部扁平。	体部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。 底部内面直線ナデ。	体部の器面はほぼ全面に釉付着。 体土内の空気による膨れが4ヶ所みられる。 受部に重ね碗の痕跡。

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
8	タ	12.5	4.5	口縁部のたちあがり内傾して低くなり、端部は丸い。 受部はかなり上方にのびる。	底部ヘラ切り未調整。 全体に雑な調整である。	
9	蓋	10.5	2.9	天井部は扁平で、口縁部とを画するものはない。 やや外彎気味に下がった口縁部の下端は外反し、口縁端部はやや内傾する面をもつ。 内外面をわけた稜は鈍い。	天井部器表の%、左回転ヘラ削り。	10とセット。
10	短頸部	8.7	9.8	体部最大径は体部の%上位にあり、強く屈曲する。 やや内傾して、直線的にたちあがる。口縁部の端部は丸い。	底部の内面に同心円文を部分的に残す。後に回転ナデ調整。 調整は丁寧である。 体部器表の%、右回転ヘラ削り。	肩部に重複の痕跡があり、9の口径と一致する。 肩部に灰をかぶる。
11	壺	9.8	7.0	体部の境界から一端直立した頸部は、外反して直線的に開き、端部を丸くして口縁部となる。 おそらく、球形の頸部が着くものと考えられる。		灰をかぶる。
12	タ	13.6	3.1	頸部は短く外反する。 口縁端面は平坦であるが、内外面をわけた稜は丸い。 口縁部と頸部の境界は、鈍い稜をもつ。	頸部カキ目調整。	
13	高杯			脚部部に向けてラップ状に開き、端部はややふくれた面をもつ。	内外面とも端部上方をナデ。	
14	台付淺罎	13.0 (底径)	6.3	おそらく基部から直線的に下方にのびる筒部を呈するものと思われ、脚部部ラップ状に開く。 脚部部は平坦である。 透孔は長方形であるが、個数は不明。	内外面ともナデ。	
⑬	高杯	8.9	5.2	基部から外反して下方にのび、唇部は大きくラップ状に開く。 脚部部は丸い。	内外面ともナデ。	表面の風化激しい。
16	樽瓶	6.0	20.6	外反する頸部に内傾する口縁部をもち、口縁部は漏斗状をなす。 体部前面がふくらみ、背面もやや膨らむため全体に丸い感がある。 側面の耳は鉤状に屈曲する。	体部前背面ともにカキ目調整後、部分的にカキ目調整、ヘラ削り調整 側面にはカキ目調整後のヘラ削り。 頸部と肩部の接合内面には指痕が残る。	

盗掘域内出土土器

(○で囲ったものは土師器、他は須恵器)

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	杯身	14.1	3.8	大きく内傾する口縁部のたちあがりは低く、端部は丸い。 受部は大きく外上方にたちあがる。	体部器表の%、左回転ヘラ削り。	

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
2	タ	12.9	4.3	内傾してたちちあがる口縁部の端部は丸い。 受部は僅かに外上方にのび、受部上面はナデのためか、沈線状を呈す。	体部器表の%、左回転ヘラ削り。 底部内面に直線ナデ。	
3	タ	11.3	4	口縁部は外反し、端部は丸い。 口縁部下端をナデ調整しているため、浅く凹む。 受部は持たない。	底部ヘラ切り未調整。	
4	長頸壺	7.2	8.2	頸部は基部からはほぼ直立し、上半は外反し、直線的にのび二条の沈線を施す。 頸部をやや内反させて、口縁部とし、端部は丸い。		
5	高杯	11.9	4.8	外反する口縁部の端部は丸い。 口縁部の下端には凹線を施し、体部とわかる。 脚基部は細い。		
⑥	タ	15.4	4.1	口縁部は直線的に外上方に開き、口縁部と体部の境界には、沈線を施す。 口縁端部は丸い。	杯部の内外面とも、横方向のハケ整形後、ナデ調整	

石室内出土鉄製品

(単位cm)

有 茎 鎌

番号	全長	刃 部			竈 被 部			茎 部			重 量 (g)	備 考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
1	11.3	7.4	2.1	0.3	3.8	0.5	0.4	2.6	0.4	0.3	14.1	茎端部欠損
2	11.6	7.3	2.0	0.3	3.4	0.7	0.3	2.3	0.4	0.3	16.2	タ
3	8.6	6.2	2.1	0.35			0.6	0.3			11.4	茎欠損
4	12.4	5.1	1.5	0.2			0.8	0.4		0.4	11.2	茎端部欠損
5	10.8	4.4	2.0	0.3	4.4	0.6	0.4	3.5	0.3	0.3	12.9	タ
6	15.1	8.9	2.5	0.3	4.0 <sub>?</sub>	0.8	0.4	5.0	0.4	0.3	35.5	
7	12.0	8.0	2.7	0.5	4.5	0.7	0.5	2.5	0.3		23.9	茎下半欠損
8	7.3		2.5	0.4	3.5	0.7	0.4				13.5	茎大部分欠損 刃部折れ曲る
9	9.8	4.2	2.0	0.3	2.1	0.8	0.4	3.5	0.4	0.3	17.1	
10	9.3	4.2	1.9	0.3	2.7	0.6	0.4	2.4	0.4	0.4	10.4	茎端部欠損
11	9.55	6.2	3.2	0.25	2.5	0.9	0.4	1.5 <sub>?</sub>	0.5	0.4	21.7	茎下半欠損
12	10.5	4.9	2.9	0.4	3.7	0.8	0.4	2.9	0.4	0.3	19.0	茎下半欠損
13	8.2	6.6	2.7	0.5				1.6	0.6	0.4	22.9	タ

## 長頸鉢

(単位cm)

番号	全長	刃部			筒部			蓋部			重量 (g)	備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
14	19.6	2.2	1.1	0.3	10.8	0.6	0.5	5.6	0.4	0.3	19.0	
15	17.7	2.5	0.9	0.3	11.0 <sub>?</sub>	0.5	0.5	4.2 <sub>?</sub>	0.4	0.3	16.3	茎端部欠損
16	16.6	3.0	0.9	0.2	8.7	0.7	0.4	4.9	0.5	0.3	13.7	
17	16.7	3.1	0.9	0.2	10.0 <sub>?</sub>	0.6	0.4	4.7 <sub>?</sub>	0.3	0.25	14.4	茎先端欠損
18	15.3	3.1	1.0	0.3	9.0	0.7	0.4	3.2	0.3	0.3	16.2	茎端部欠損
19	14.8	3.0	0.9	0.3	8.6 <sub>?</sub>	0.6	0.4	3.3 <sub>?</sub>	0.5	0.2	12.8	◇
20	14.5	2.7	0.9	0.3	8.4	0.4	0.6	3.4	0.4	0.2	23.8	◇
21	14.5	2.8	0.9	0.2	8.3	0.6	0.5	3.4	0.4	0.3	14.8	◇
22	14.7	3.0	1.0	0.3		0.6	0.4		0.4	0.2	13.3	茎下半欠損
23	14.3	2.6	0.9	0.3	9.0 <sub>?</sub>	0.7	0.6	2.7 <sub>?</sub>	0.4	0.3	16.5	茎端部欠損
24	12.6	2.3	0.9	0.3	8.9 <sub>?</sub>	0.6	0.4	1.4	0.6 <sub>?</sub>	0.25	12.6	茎の大部分を欠損
25	14.0				8.0 以上	0.5	0.3	6.0 <sub>?</sub>	0.4	0.3	17.2	刃部茎端部欠損
23	11.7				6.2	0.6	0.4	5.5	0.5	0.4	14.7	刃部欠損
27	9.1				9.1 以上	0.65	0.4				9.7	刃部、茎部欠損
28	11.3	3.3	1.5	0.4	7.8	0.5	0.4	0.6	0.25	0.2	14.5	茎部の大部分を欠損
29	18.1	2.0	0.9		11.7 <sub>?</sub>	径 0.5		4.4 <sub>?</sub>	径 0.3		16.5	筒被部分以下は円筒
30	15.6					径 0.5			径 0.3		15.0	刃部欠損

## 刀子

番号	全長	刃部			筒部			蓋部			重量 (g)	備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
31	20.7	13.1	1.5	0.4				7.6	0.9	0.5	37.2	
32	11.7	7.3	1.2	0.4				4.4	0.8	0.3	15.7	
33	8.9	3.4 <sub>?</sub>	1.2	0.2				5.5	0.8	0.4	14.7	刃部先、茎端部欠損
34	7.4	4.8	0.9	0.35				2.6	0.6	0.3	6.8	
35	14.5	8.1	1.6	0.5				6.4	1.0	0.5	32.9	柄の一部残

## 9号墳出土遺物

石室内出土土器(須恵器)

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形態の特徴	手法の特徴	備考
		口径	器高			
1	杯 蓋	14.2	4.4	天井部と口縁部の境界は鈍い稜をもつ。やや外反する口縁部の端部は丸い。	天井部内面の直線ナデはか なり広範囲。 天井部器表の1/2、左回転ヘ ラ磨り。	

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
2	杯身	11.8	3.1	口縁部は大きく内傾して短く、端部は丸い。 受部はやや上方にのび、受部上面にナゲのためか沈線状となる。 杯底部は浅く、平らである。	体部器表の%、左回転ヘラ削り。 底部内面直線ナゲ。	
3	◇	12	3.8	底部は中央がやや凹む。 口縁部はやや外反し、端部は丸い。 口縁部下端をナゲ。	底部ヘラ切り未調整。 底部内面直線ナゲ。	大きく焼けひずむ。 底部に赤色顔料付着。
4	◇	11.1	3.6	口縁部は外反し、端部は丸い。 口縁部下端はナゲ調整のため浅く凹む。	底部ヘラ切り未調整。 底部内面直線ナゲ。	大きく焼けひずむ。 自然釉付着。
5	◇	11.5	3.5	外反する口縁部の端部は丸い。 底部はヘラ切り未調整のため中央が膨む。	底部ヘラ切り未調整。 底部内面静止ナゲ。	大きく焼けひずむ。
6	◇	11.4	4.3	口縁部は直立し、端部は丸い。	底部ヘラ切り未調整。 底部内面静止ナゲ。	底部に僅かに赤色顔料付着。 大きく焼けひずむ。

溝内出土土器（須恵器）

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	杯蓋	13.5	3.7	外彎気味の口縁の端部は丸い。 口縁部と天井部の境界上部は、ナゲ調整のためか浅く凹む。	天井部器表の%、左回転ヘラ削り。 天井部内面直線ナゲ。	
2	◇	13.8	3.2	天井部は扁平であり、口縁部との境界には、幅の広い僅かな凹みをもつ。 口縁部は外反し、端部は丸い。	天井部器表の%、左回転ヘラ削り。 天井部内面直線ナゲ。	
3	杯身	12.0	3.5	口縁部の内傾はきつく、口縁部上半がややたちあがり、端部は丸い。 受部にはほぼ水平方向にのび、口縁部との境界は沈線状を呈す。	体部全体に非常に雑な調整。 体部器表の%、左回転ヘラ削り。	
4	◇	12.0	2.7	口縁部は大きく内傾し、端部付近で直立するようにたちあがる。 受部は外上方にのび、端部は丸く、口縁部との境界は沈線状にナゲる。	内厚である。 体部器表ヘラ削り。	
5	◇	12.0	3.4	やや外反する口縁部を有し、口縁端部は丸い。 底部は平らである。	底部ヘラ切り未調整。	
6	高杯	口径 12.0 ~12.5 脚径 9.0	7.5 (8.0)	口縁部上半を欠損しているが、おそらく内傾して、たちあがりが高く、端部の丸い口縁部であったと思われる。 受部は外上方に張り出し、端部は丸い。 脚基部は太く、裾部に向けてラップ状に開き、端部付近から水平かやや上方にのびる。脚端部は丸い。	杯部に左回転ヘラ削り。	

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
7	甕	12.2	15.2	基部の細い頸部が大きくラップ状に外反し、上方に屈曲して、口縁部となる。口縁部は外彎し、端部は丸い。体部は球形であり、最大径は体部の中央付近にある。体部最大径のやや上位に、1条の凹線をまわし、最大径付近には不明瞭な稜をもつ。凹孔は小さい。	体部下位から底部は静止ヘラ削り。 凹孔は外側から穿つ。 全体に肉厚な作りである。 口頸部を体部に装着した際にできたと思われるおじれが、頸部にみられる。	胴上半、口縁内面に自然釉。
8	広口壺	13.2	19.5	外反する頸部を有し、口縁部は鈍い稜をもつ。 口縁端部はつまみあげている。 最大径は胴部の高さの上部 1/4前後の位置。 胴部最大径上部に1~2条の凹線を3列施し、その間に櫛状工具による刺突列点を施している。	体部上半、上位の凹線間にはカキ目調整。 列点文はその後施す。 カキ目調整後、底部外面を静止ヘラ削り。 底部内面静止ナゲ。 頸部下半と、口縁部下端付近にもカキ目調整。	

溝内出土土器（土師器）

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
9	蓋	11.7	3.9	天井部を強く屈曲させ口縁部とする。 口縁部下端が外反し、端部は凹面をもつ。 天井部は中央がややふくれるが扁平。	天井部器表の $\frac{1}{2}$ 、左回転ヘラ削り。	
10	短頸壺	9.2	13.8	口縁部は内傾してたちあがり、端部は凹面となる。 最大径は体部の1/4前後の位置にあり、肩部との境界に2条の沈線を施す。 底部は中央が凹む。	底部外面に指頭圧痕が残る。 体部の器表は底部から $\frac{1}{2}$ 位まで、右回転ヘラ削り。	全体に風化が進んでいる。
11	甕	24.5	5.2	くの字に外反する頸部を有し、口縁端部をつまみ上げる。 胴部の肩は張りが強くない。	胴部内面ヘラ削り。	全体に風化が進んでいる。

墳丘上出土土器（須恵器）

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	短頸壺	7.0	9.5	球形に近い体部をもち底部は扁平。 口縁部はやや内傾してたちあがり、端部は丸い。	底部内面に静止ナゲ。 体部の器表は底部から $\frac{1}{2}$ 位まで、左回転ヘラ削り。	
2	壺	13.2	16.7	最大径は胴部の中ほどにあり、底部は丸い。 頸部は外反し、口縁部はナゲ調整のため中央がふくらむ。	底部内面に静止ナゲ。 体部下半の器表、右回転ヘラ削り。 体部上半、カキ目調整。	

土器 番号	器形	法 量 (単位cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口徑	器高			
3	建		17.6	頸部は大きく外反し、中央に沈線をもつ。 口縁は欠損するが、下端に稜をもつ。 体部はやや扁平で、最大径は体部の上から約半分の位置。 肩部と胴部の境界付近に、2条の凹線をめぐらす。 底部は膨らむ。	体部最大径付近から下半にかけて、カキ目調整。 底部内面に棒状工具による押圧痕。 頸部と体部境界の内面に接合時の段がみられる。	口縁部欠損。 肩部から胴部にかけて軸垂れがある。

石室内出土鉄製品(刀子)

(単位cm)

番号	種類	全長	刃 部			筥 被 部			茎 部			重 量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
1	刀子	13.1	8.6	0.8	0.4				4.5	0.7	0.4	13.6	
	◇	13.9	8.6	1.2	0.5				5.3	1.0	0.5	19.4	

石室内出土玉類

(単位mm)

番号	種 類	材 質	長さ	直 径	厚さ	穿孔 方法	孔 径		重 量 (g)	色 調	備 考
							上	下			
1	管 玉	碧玉	33.9	上10.9 下11.8		片	3.8	1.9	8.75	深 緑	
2	◇	◇	32.0	上10.6 下11.1		片	3.6	1.5	7.7	◇	
3	◇	◇	30.8	上10.5 下10.8		片	3.4	1.9	7.4	◇	
4	◇	◇	29.8	上10.3 下10.6		片	3.1	1.2	7.25	◇	
5	◇	◇	29.7	上10.2 下10.1		片	2.7	1.3	6.4	◇	
6	◇	◇	30.0	下10.1		片	3.1	1.8	6.15	◇	
7	◇	◇	26.8	上1.0 下9.4		片	2.8	1.3	5.7	◇	
8	◇	◇	27.0	上8.9 下9.1		片	2.9	1.1	5.15	◇	
11	小 玉	ガラス		3.3	1.3		1.2		0.03	黄	
12	◇	◇		2.9	2.9		1.1		◇	◇	
13	◇	◇		3.0	1.3		1.1		◇	◇	
14	◇	◇		3.5	2.5		1.1		◇	◇	
15	◇	◇		2.8	2.5		1.0		◇	◇	
16	◇	◇		2.7	2.2		1.1		◇	◇	
17	◇	◇		3.1	1.8		1.2		0.02	青	バリを残す
18	◇	◇		2.8	1.8		1.2		0.02	◇	
19	◇	◇		3.3	1.9		1.5		0.02	◇	
20	◇	◇		43.0	2.0		1.2		0.02	◇	バリを残す
21	◇	◇		3.9	1.9		1.2		0.02	◇	
22	丸 玉	◇		8.5	7.5	片	2.1	2.0	0.6	◇	
9	切子玉	水晶	15.6	上6.9 中11.1 下7.2		片	4.9	1.6	2.7	半透明	
10	◇	◇	12.4	上6.9 中10.9 下6.8		片	4.2	1.5	2.15	◇	ヒビが入っている

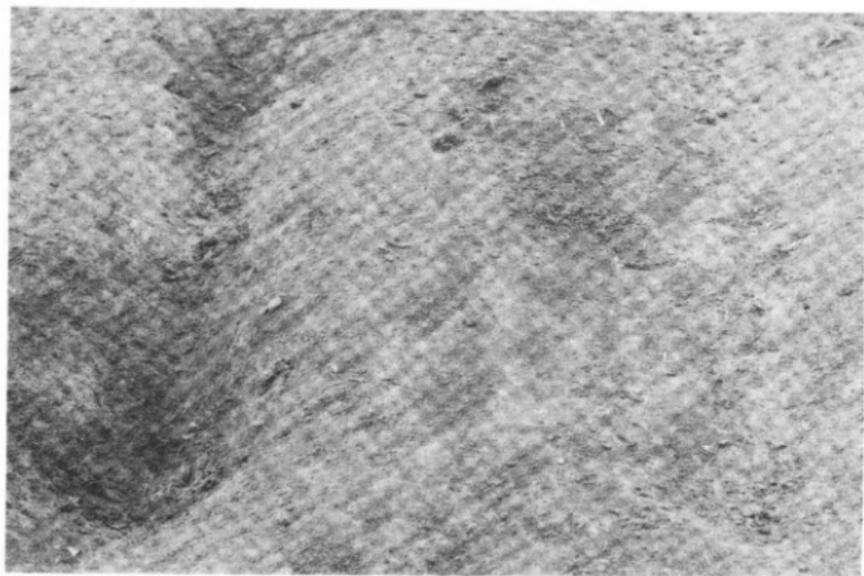


夕垣古墳群航空写真



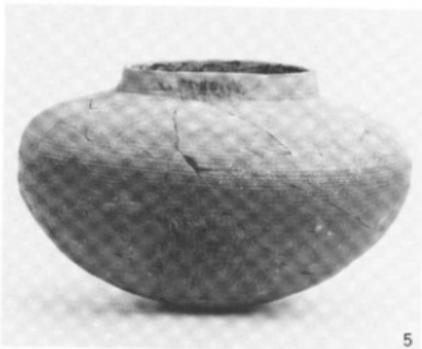
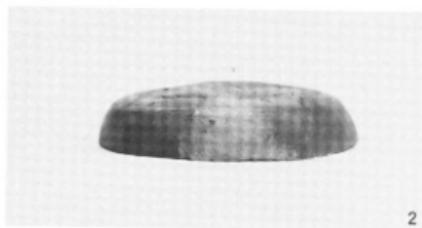
上) 遠景 (西方向より)

下) 遠景 (南西方向より)



上) 9号墳より見た3号墳全景

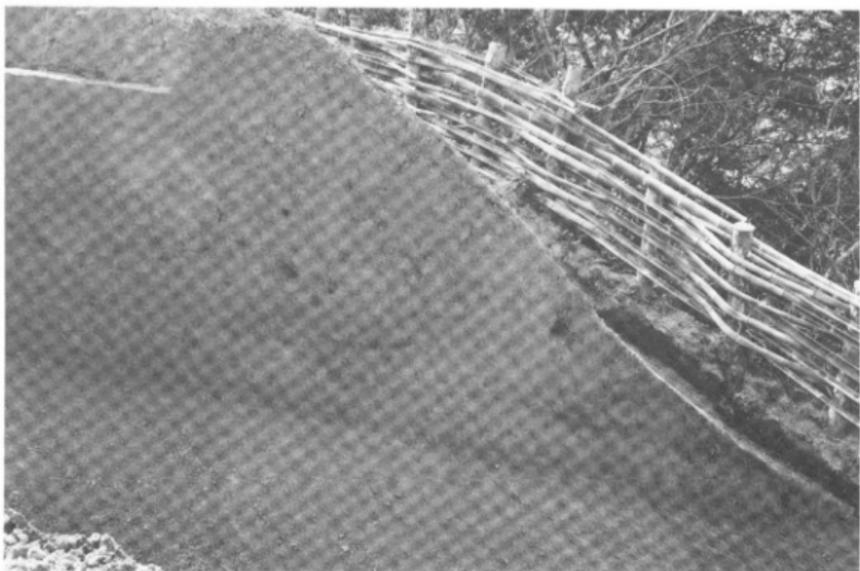
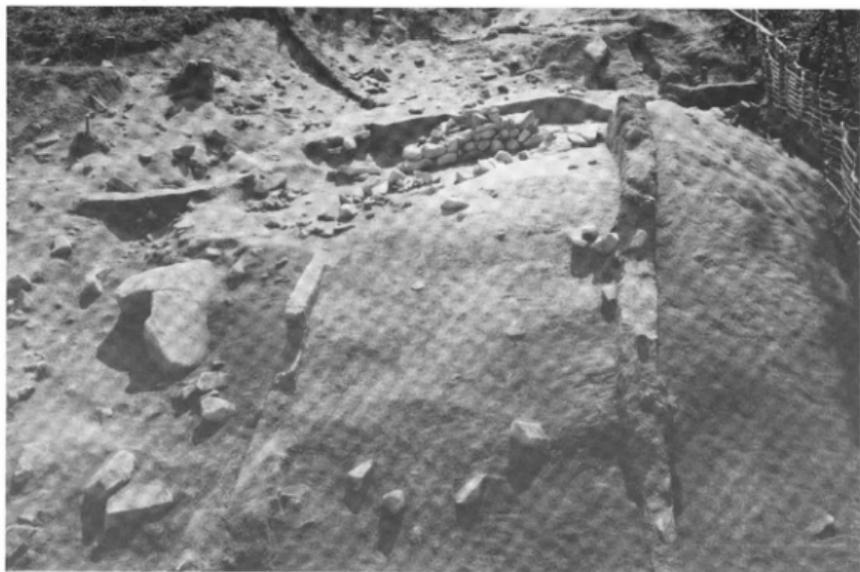
下) 墳頂部石抜き取り跡





上) 調査前の状況

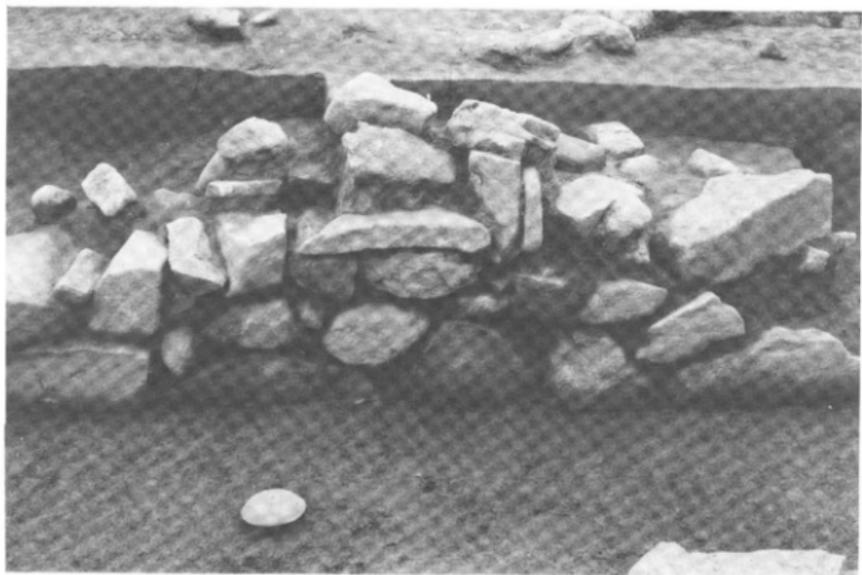
下) 東側から見た全景



上) 斜面下方から見た全景  
下) 斜面下方側の墳丘断面

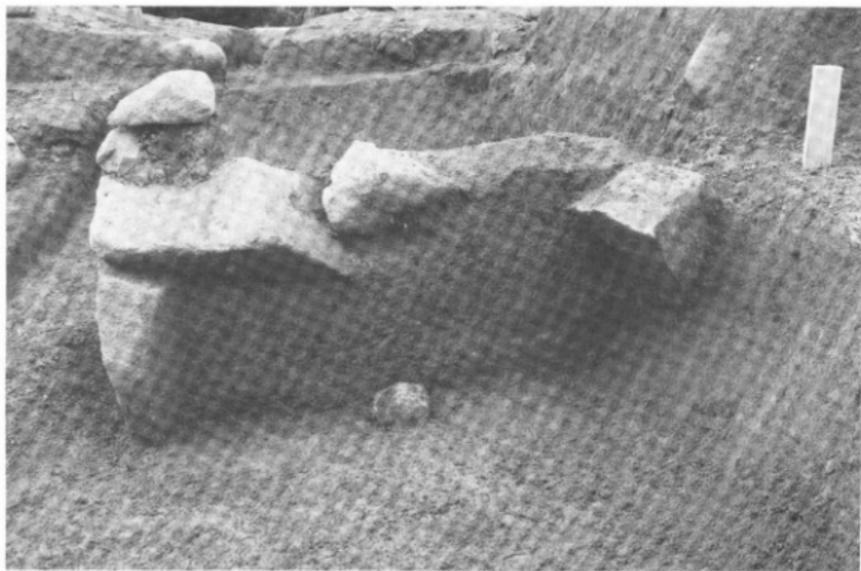
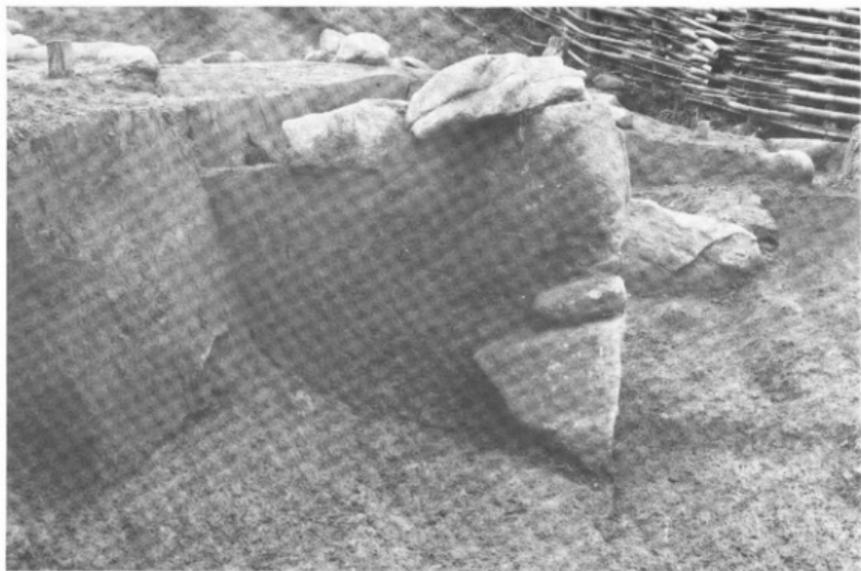


上) 東側から見た石室  
下) 西側から見た石室

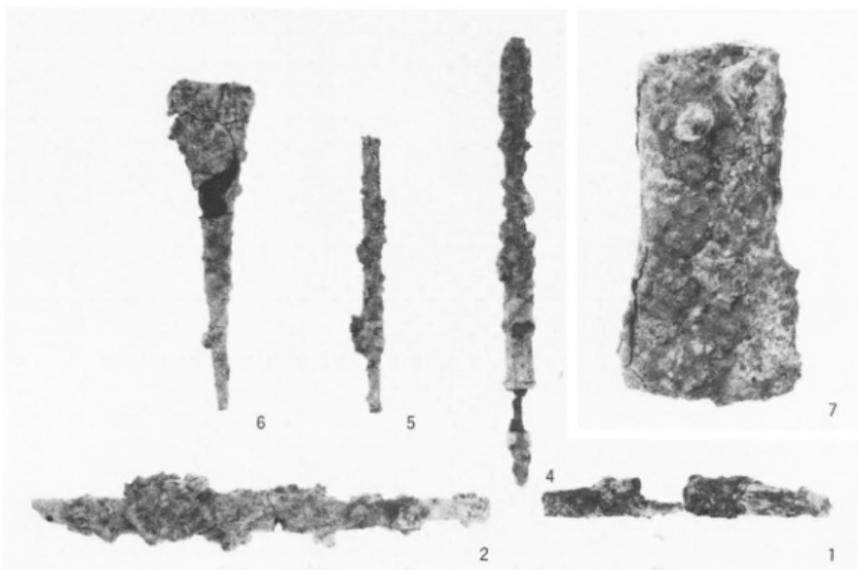
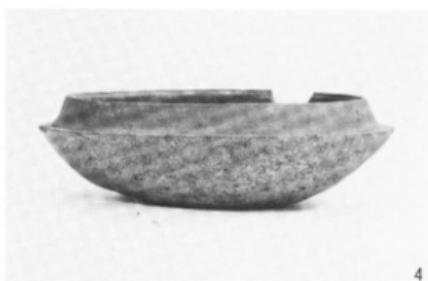
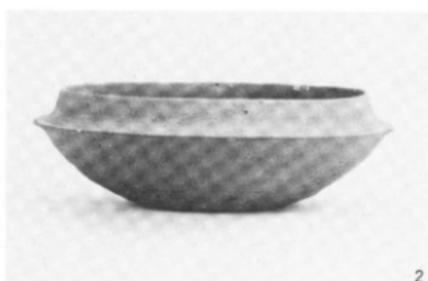
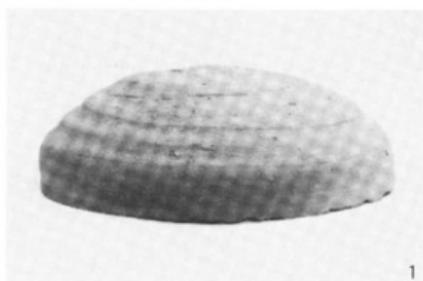


上) 石室床面遺物出土状況

下) 南側壁構築状況

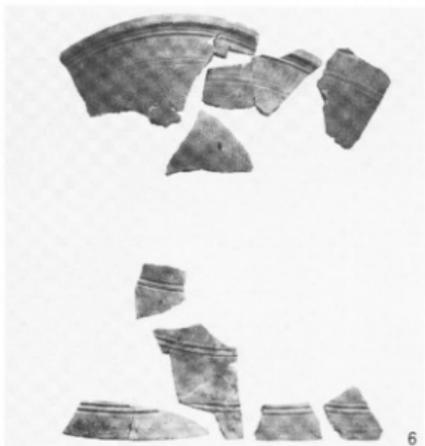
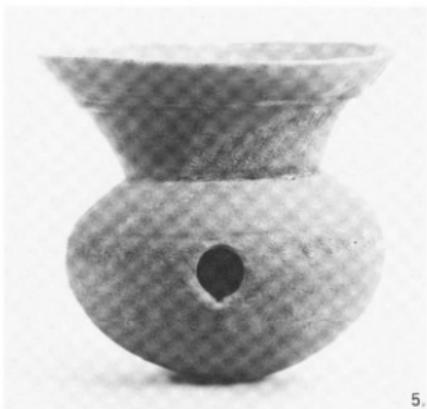
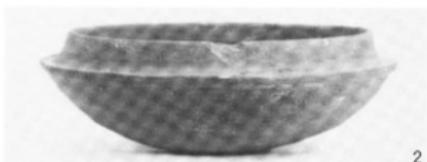
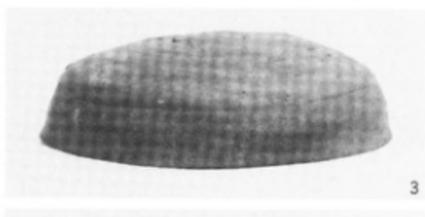


上) 南側壁断面  
下) 北側壁断面



上) 石室内出土須恵器

下) 石室内出土鉄製品



上) 溝内出土遺物

下) 墳丘周辺採集遺物



上) 西側から見た全景

下) 斜面上方側から見た全景



上) 横穴式石室の全景

下) 石室床面



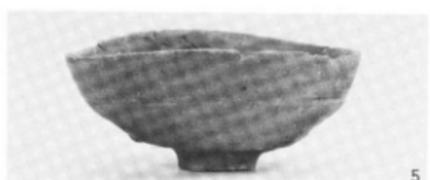
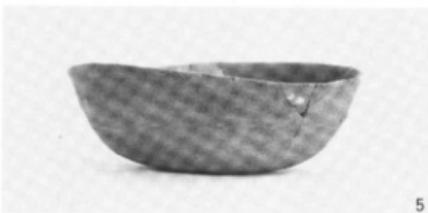
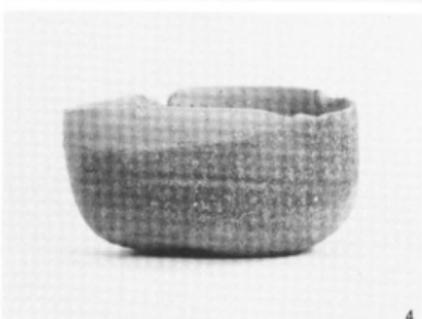
上) 床面遺物出土状況 (奥壁側)

下) 墳丘東側列石



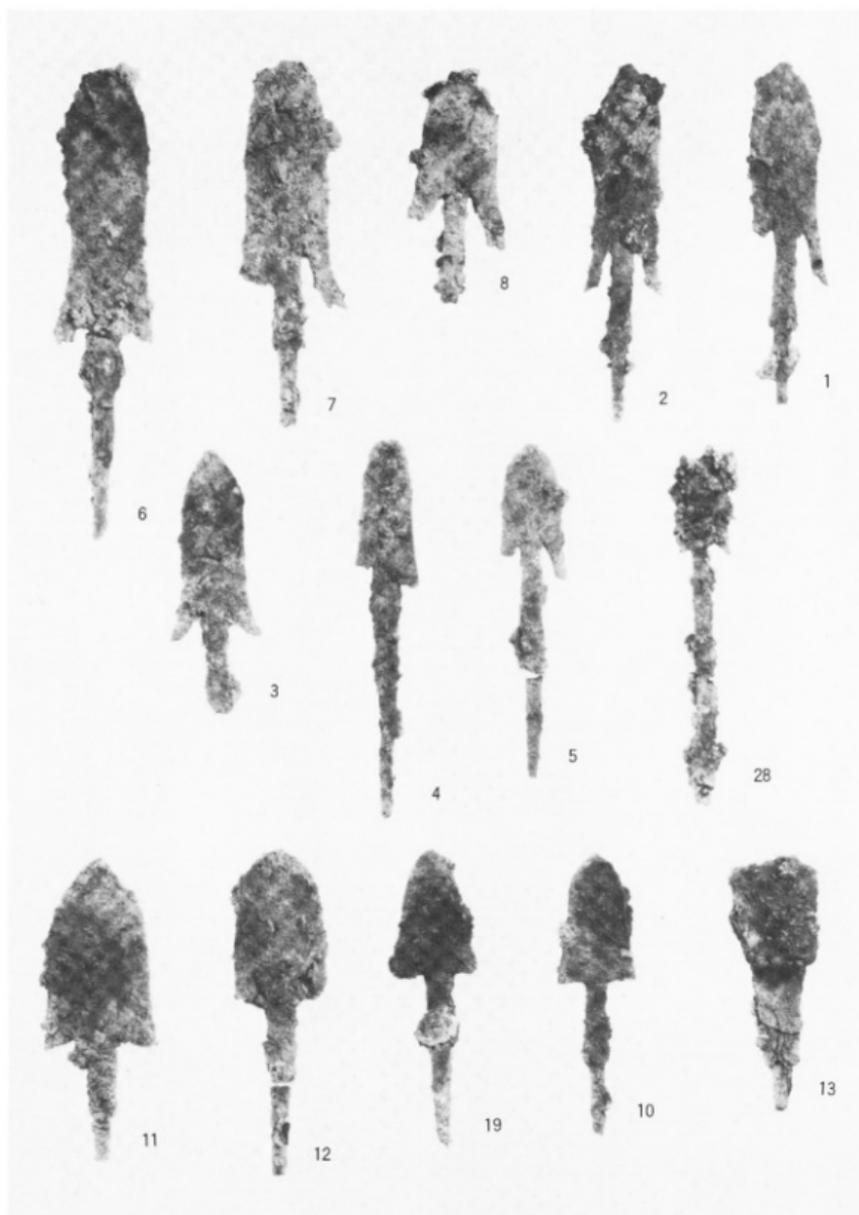
上) 斜面下方側の墳丘断面

下) 斜面上方側の墳丘断面

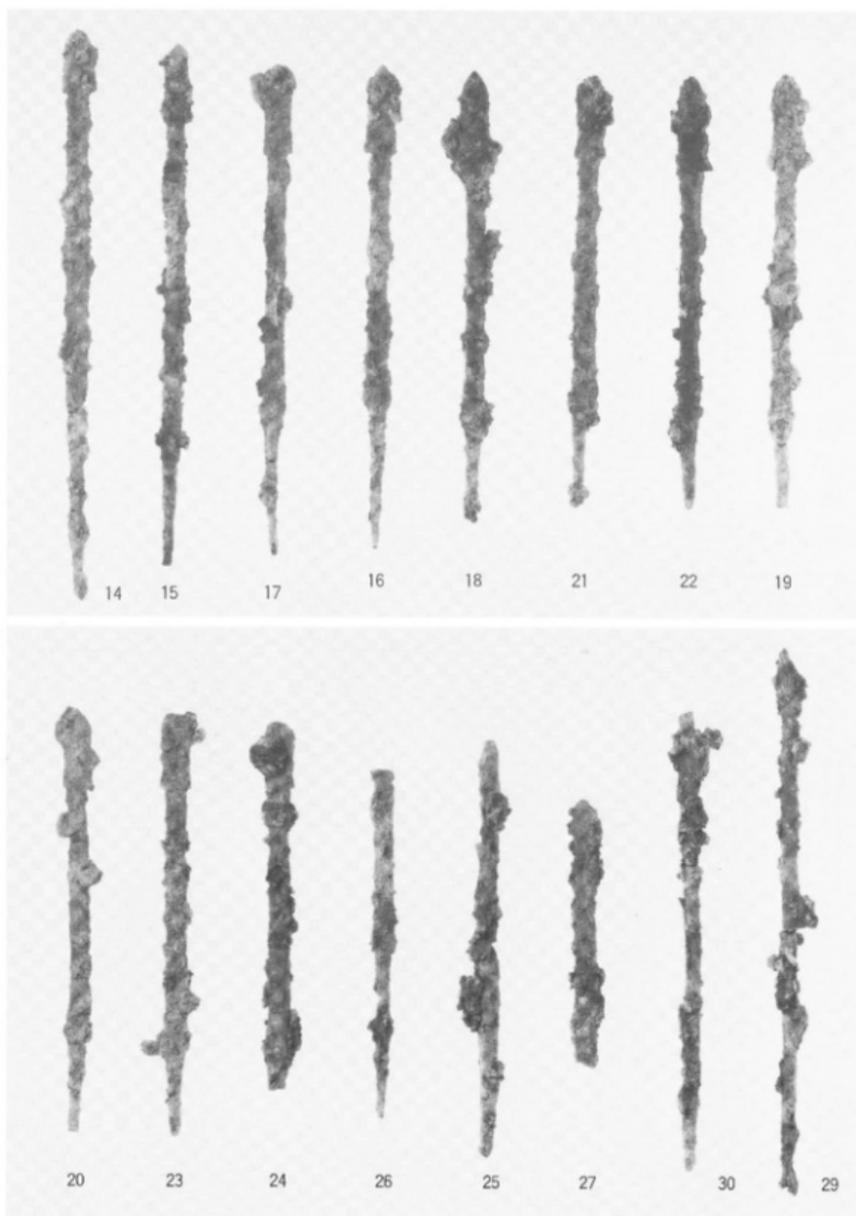


上) 石室内出土遺物 (須恵器 1~5)

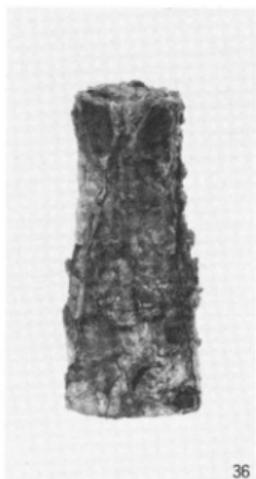
下) 盗掘坑内出土遺物 (3・5・6)



石室内出土鉄製品(1)



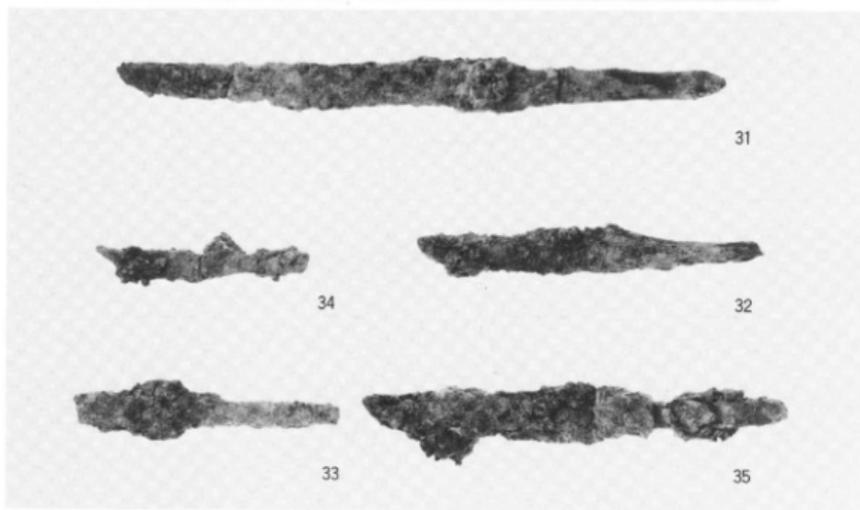
石室内出土鉄製品(2)



36



37



31

34

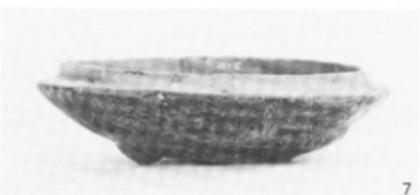
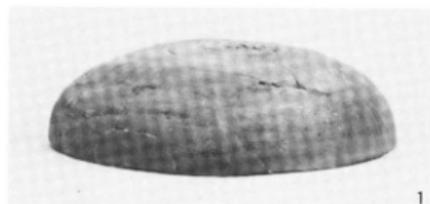
32

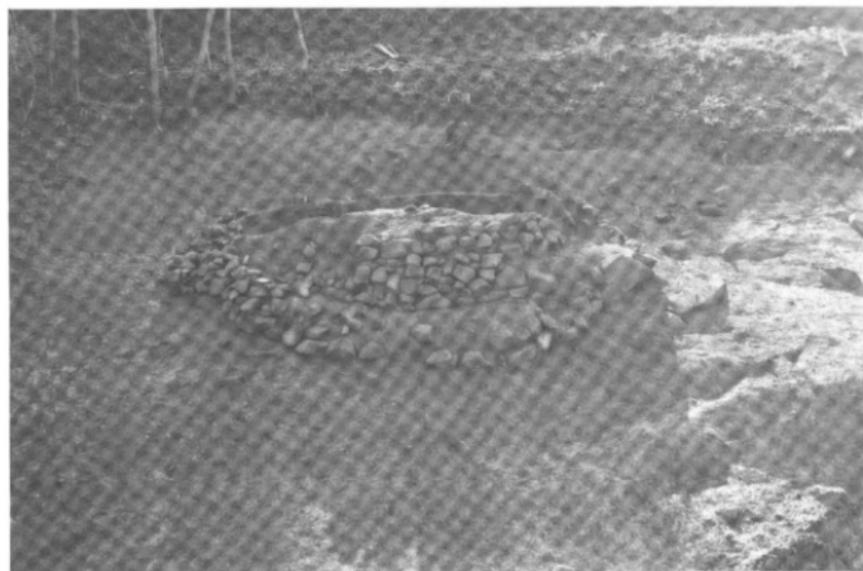
33

35



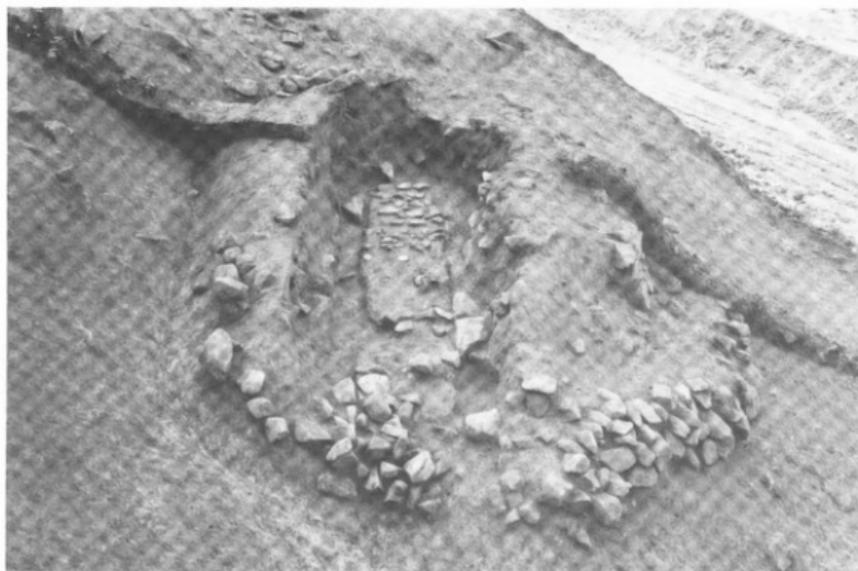
石室内出土鉄製品(3)





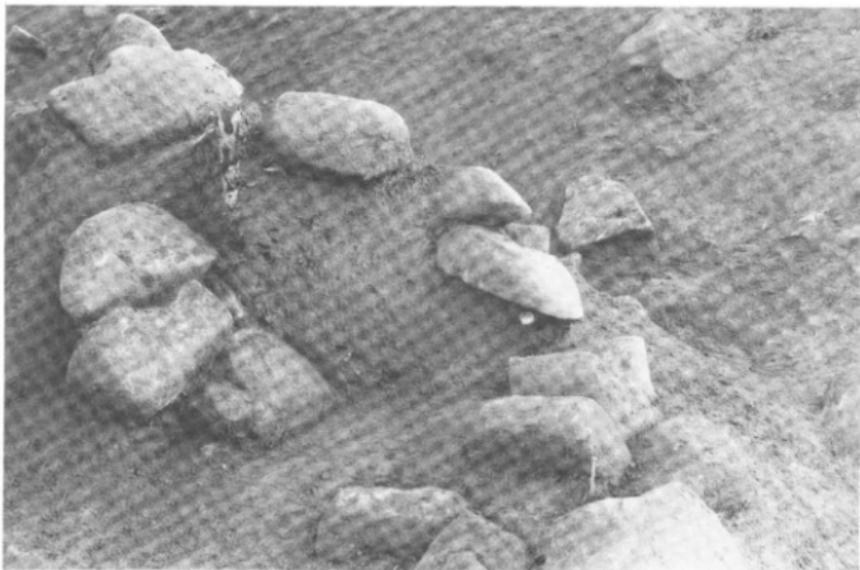
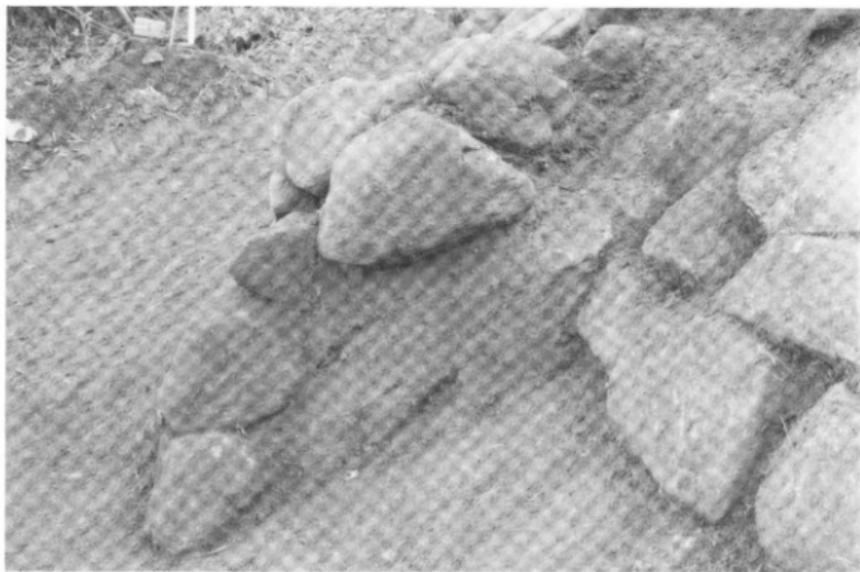
上) 調査前の状況

下) 斜面下方側から見た全景



上) 東側から見た全景

下) 西側から見た全景



上) 列石1と3の関係

下) 列石2と3の関係



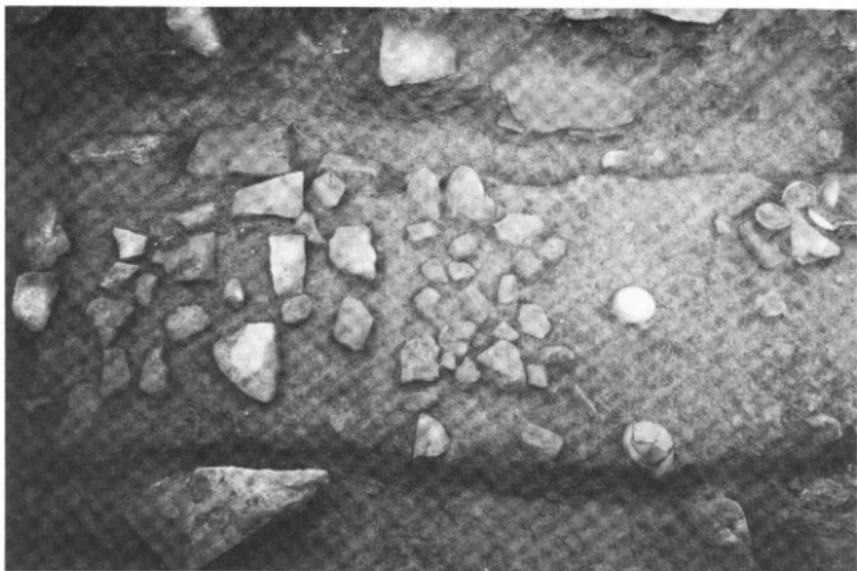
上) 列石2と3の関係

下) 列石3除去後の墳丘



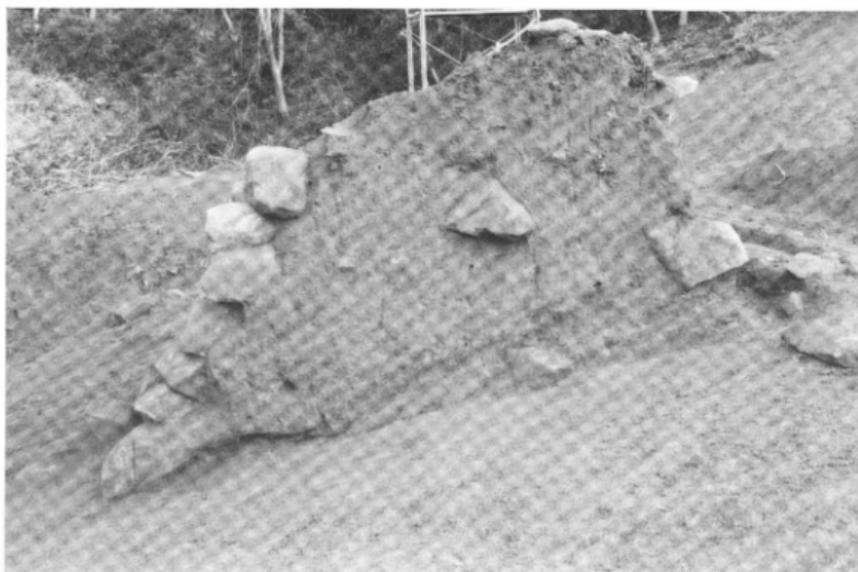
上) 羨道部側から見た石室

下) 奥壁側から見た石室床面



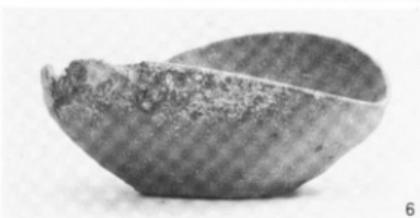
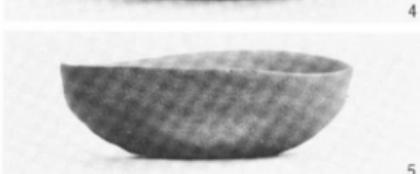
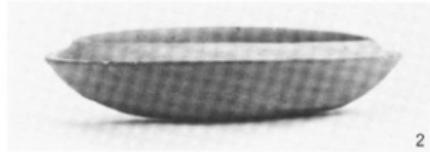
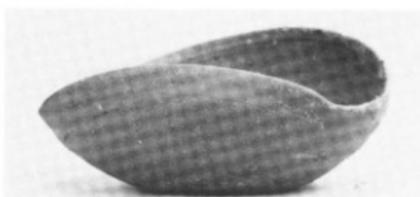
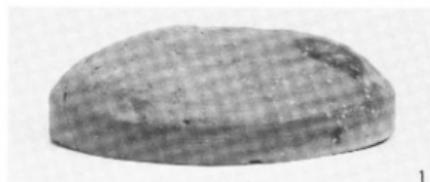
上) 石室内遺物出土状況 (奥壁側)

下) 同 (玄室床面上)

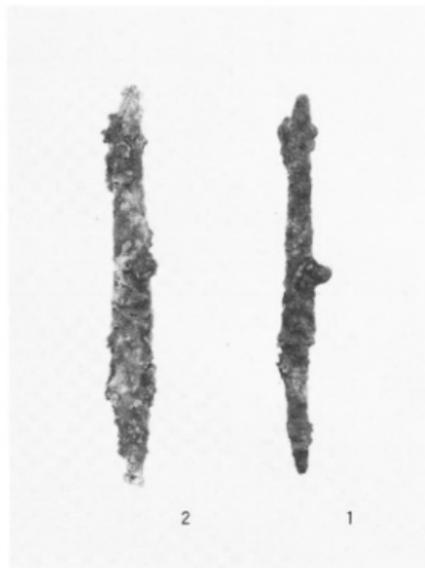
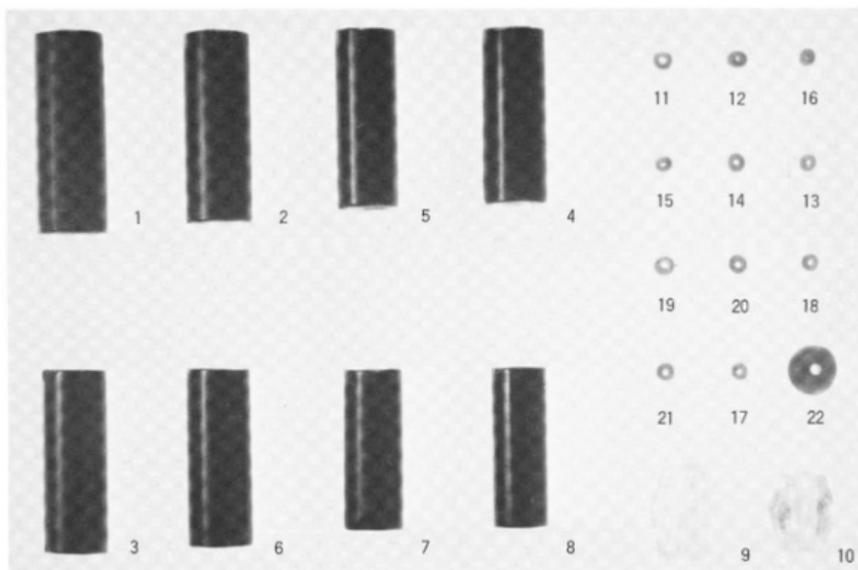


上) 斜面下方側墳丘断面

下) 溝の断面

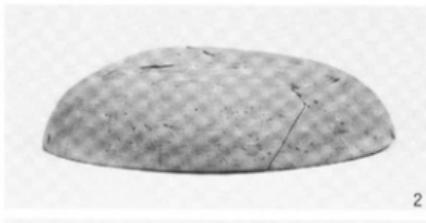


上) 石室内出土遺物 (須恵器)  
下) 墳丘上出土遺物 (須恵器)

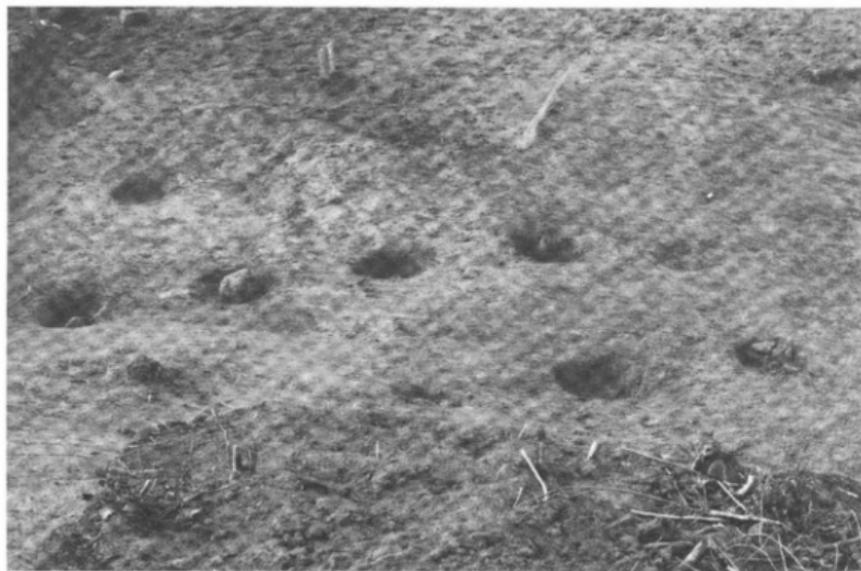


上) 石室内出土遺物 (玉類)

下) 同 (紡繰車・刀子)



溝内出土遺物（須恵器）



上) 土層堆積状況

下) 山側から見た柱穴列

---

夕垣古墳群・夕垣遺跡  
発掘調査報告書

昭和58年3月31日発行

編集・発行 兵庫県教育委員会  
神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
TEL 神戸(078)341-7711  
印刷 三ッ輪印刷工業株式会社  
神戸市兵庫区淡町2丁目3番14号

---